

# 等我



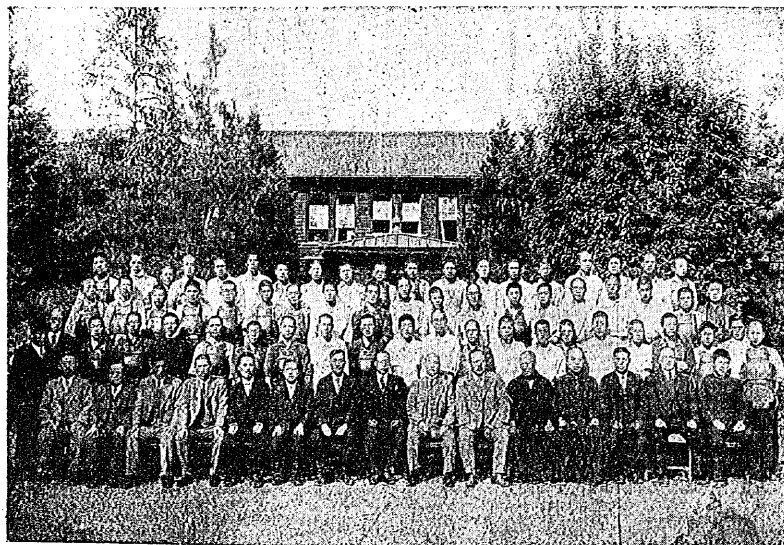
作者：徐学军 熊玉峰

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

4376.6  
廿



縣下劍道大會優勝記念



武道大會記念

編輯部 校川 俳和 詩紀 文趣 見通 說講 寫

編輯部 校川 俳和 詩紀 文趣 見通 說講 寫

目

次

我等第二號

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

校歌

○第一校歌

谷間の流れ落ち合ひて

荒川水の廣きごと

學びの道を辿りつつ

國の榮を圖らばや

千本の若木生ひ立ちて

堤に花の匂ふごと

大和心を鍛へつつ

君の御爲に盡くさばや

○第二校歌

一、高山峭嶽數アレド

イヨイヨ高シ富士ノ山

千古ノ雪ハ皓々ト

東海ノ面ニ輝ケリ

二、大河長江限ラネド

イヨイヨ廣シ利根ノ川

萬里ノ水ハ滔々ト

坂東ノ野ニ漲レリ

三、關八州ハ昔ヨリ

平原遠ク土地開ケ

コハニ生ヒ立ツ民草ハ

心忠誠ニ言食マズ



講演

我等は日本人なり

海軍中將 佐藤鐵太郎



去る六月九日初夏の陽光輝く熊中講堂に於いて偉人であり人格者として萬民周知である海軍中將佐藤鐵太郎閣下の「我等は日本人なり」

と云ふ演題の下に長時間に亘る御講演がありました。諸君は未だ記憶に新しい事と推察いたします。けれども當時速記者として私は更に大略趣旨に基づいて極くあつさり真相を披瀝して諸君と共に眞の日本人たる事を誓ひ佐藤閣下の御講演を彌が上にも意義あらしめ度いと存じます。

私一個人の爲した事ですから必ず意味不明瞭、及び不解等の點は途中少くはないと推察いたします。此の點は充分御容赦を御願ひいたします。

會報部 本 山 正 三 速 記

あなた方の爲になりそうな御話をせる様にと御希望を戴いたので日本を背負つて立つ青年に話すのは愉快であると存する次第であります。

高楠先生の御話で充分なれどももう一つどうしても之でなくてはならぬと云ふ事があります。「我々は日本人である」と申すことであります。

形許りの日本人で腹の中はそうでない者も居り亦心と言葉と一致してゐるものが少ない此の頃特にさう思はれる私は此の頃に

諸君と同時代に於ける事でこうゆう事があつて他の事が忘れられても此の事だけは忘れ度くない。私は庄内の産であり、私の小さな頃には東京に行くとはうらつ(馬鹿)者になると云ふ事を聞かされてゐた。

自分の父兄達は東京に出てくる事は許さなかつた、ので實行が出来なかつた。仕方無くて逃げて来る。この逃げ出るより外はない。頭の中では逃げて来る以上は人の世話の手を借りてはいかんと思つた。

学校の門から出て来て東京街道へ出るには昔の城下を横切らねばならない。もうこうして學校も止めねばならぬと思つて學校の方を振り返り見て行つた。其の時丁度學校の齊藤通先生を見附けたので城の中へ入つて了つた。

到々、齊藤先生は見附けて了つたので、自分は禮をした。先生も答禮した。後數歩歩き去つた時に先生は申した。

佐藤!! 只で歸るな!

私は今でも之を思ふ時涙ぐましくなり、その時は立ち止つて泣いた。此處で思ふ存分心の中にも泣いた。決して只で歸らぬと決心した。

この氣持で日本人が世の中に立つたならば必ず成功するであらう。皆さんは他は忘れても之だけは忘れぬ様に御願ひします。此處で云はれた事を。

我々は日本人である。

日本國はどんな國であるかと云ふ事を知らなかつたならば我々は日本人であると云ふ事は出来ない。

然し乍ら之だけ知つてゐれば差支へないと云ふ處のものを述べよう。日本の國を觀察したと云ふ外人の話をしよう。

廿三年前の事、自分は或船の艦長をして居る時、米國へ参りました。アメリカへ参つてから私は止めて日本へ歸朝しました。皆様御存じか知れませんが、高崎正風先生、當時その人から御傳言に預りました。

あなたの書いた國體論は實に感心した、その事に就いて御話し度い事があるから。

何時御伺ひしたら宜しいでしょうか。私は身に餘つて先輩の宅へ御伺ひした。私は非常に嬉しくいろいろの話を承つて午後四時頃暇乞ひをした。

「御土産をやるから待つてくれ」「否御土産はあつたものでない。御話で充分です。」「いや、私の御土産は何でもなくて御土産

話であるから待つてくれ」「その御土産話であるならもつと御邪魔して御話を御聞き致しませう。」先生は歐洲の話を分けてやり度いからと云ひました。その話はこうであります。

丸山作樂君が用があつて歐洲へ参つた時スライン先生と云ふ人の許に行つた。明治廿七、八年の頃である。あなたの日本國民は驚く可き國民である。十數年の中に日本を築き上げて了つた。

又「あなたの國には歴史と云ふものが無いですね」との問ひ。丸山作樂君はすつかり當惑して「いやどうしまして、とんでもない。日本は立派な最も古い國であるのに何を云ふのですか。」

「相當の譯があるなら云ひ聞かしてくれ。」「では宜しい。」國家學の世界的の大家であるスライン先生は云ふのに國家學を研究するには歴史が必要で之を今調べて居るが東洋の歴史を研究する餘地なく、日本の歴史も調べてない。當時、伊藤博文氏が居た。伊藤氏が御出の節矢張り同様な御話をした。そして、御話を願つた。然し乍ら、伊藤氏は話を變へて決して述べなかつた。別に又、谷子爵が居た。同様に尋ねると谷子爵は述べなかつた。すると。

私は未だ日本には古い立派な歴史がないのだなあ」と感じたのである。

よつて其の次第を丸山君に話して見た。

之は先生が悪い。伊藤、谷の如き無學の者に述べるのは貴下が悪い。と丸山は云つた。

その御話は何でもない。こうゆう事がある。

日本書紀の中に申されてゐる。御勅命の中に次の如く。

天祖の神勅

豐葦原千五百秋之瑞穗國是

吾子孫可王之地也爾皇孫

就而治焉行矣寶祚隆當與

天壤無窮者矣

此の事は畏くも天子様として治む可き國であると云ふ、こうゆう意味を述べさせられてゐる御言葉である。それから今日まで

三千年間に到るも尙その御言葉は完全に實行されてゐる。

日本國民は如何なる人と云へども天照大神の御子孫である以上御皇統連綿少しも變らずこゝに日本の歴史の光り、永遠に輝く由來は存じてゐるのである。スタイン先生は謹んで聽いて居て亦もう一つ云はせてくれと述べた。

「實に驚きました。凡て國に人が多いと此等の人間を導く必要がある。さて此の國の君主と云ふ者はどうゆう方が必要か？富、智慧、力、此である。而し乍ら、より以上更に必要なのは徳である。此よりも更に必要なのは公平と云ふ事である。共和國の大統領は皆自分の黨の者に都合のよくやると云ふ事は免れる事は出来ない。如何なる王國でも、君主は公平と云ふ事は出来るものでない。萬世變らずその君主と云ふ者は公平と云ふ事は必要である。公平と云ふ事は實に變らざるもので國の安泰を計る事である。それは日本に於て始めて實行が出来ると思ひます。

「よく分りました。」「日本は成程と推察する事が出来ました。然しもう一つ述べさせて下さい。

「日本もどうか進歩して下さい。世界の人種を進める上に。不生不滅の國の理想的國家を望むに當つてこの日本、その時に若し日本國の存在が無かつたなら世界の人が暗黒に残されるのか。日本國の大存在は我々の大に喜ぶところであると。

國家學の上からスタイン先生は以上の言葉を言ひ了りました。

丸山作樂君は日本に存する以上誇りとなし、嬉しくて高崎正風先生に此の事を傳へた。其を丁度私が高崎正風先生より傳へられました。

此の輝かしい國體を戴いて、守つてゐる以上、此より以上嬉しい事はないではないか。國家學の大家から述べられた事は實に嬉しい。

世界の人々の中で最も嬉しい國民、最も幸福なる人間は日本人である。此の嬉しい事は日本人だけである。此も御先祖様からの御恩であつて、誠に有難い事ではないか。

こうゆう立派な國の國民はどうゆう人であるか。

日本の文明はどんなだが分らぬでせう。述べませう。始め、朝鮮文明を又それ以上を支那から、支那でも——印度でも——西洋でも——西洋以上より良くなつて居る日本人は最後の世界の文明を取り入れて了ひました。

日本人は外國の人々に對して、ハイカラになつて來ました。此はハイカラ(High Collar)の文物文明を輸入したのである。日本人は何事にかけても、何をやつても負けません。やりさへすれば必ず負けません。戰許りでなく何事にかけてもそうである。今から三年前「シャ」へ日本人の鐵道技師が雇はれて赴いた。その時の鐵相、當時の江木翼氏が私共の處へ御出下つて話し合つてくれて一晩過した。

私は驚いた。その時江木さんの云はるゝには鐵道の作業が日本は世界で第一である。汽罐車が壞れた、それを修理するのに「ロシア」「ドイツ」が八日「アメリカ」が十三日、日本で世界凡ての長所を汲取つて十日で完成して了つた。手先の機敏、頭の明晰に依つて出來得たのです。

こんな風にしてみると私達鐵道に關してゐる者として此程嬉しい事は無い。濱松で實際鐵道の仕事を見ました。四日で前の仕事が出来た様になつた。「ロシア」に雇はれた人々は昨年歸つて來た。

此の事に就いては一番です。嬉しかつたと申しました。誠に嬉しい事です。

運動方面は如何？ 自分はオリンピックの世話役として數回參つた事がある。私は厭になつた。

之が、此の者が選手かなと思ふと厭になつた。

昨年は何をやつても負けるものでないと思つた、それだけに競技の方もうまく第一位で他を壓する位だつた。

マラソンは六番の中まで日本人が入つた。その中に次は屹度大したものになるだらうと思つて喜んだ。江木氏も此の事を聽いて大變喜んだ。

現在は世界の記録をどん／＼追ひ越してゐる。

今海軍の彈も世界一である。魚形水雷も世界一、造砲もイギリスに劣るも世界に並び出る。鋼鐵板も世界一である。海軍も世界一で嬉しく思つてゐる所である。

吾々が外國に行くとても外國人に負けない。負ける事は無い。然し乍ら缺點がある。各自の氣が遷り易い。頭の良い人はその方へ走り易いものである。その方へ轉換する事を自分で望まな、者は必ず成功する。

醫學はドイツが一番、次は日本である。日本は外國に於て此だけが勝つてゐる所である。發明器も何處の國へ出しても恥かしく

ない。

往年ハワイの人が子供を連れて訪れた。話をしてゐる中に私の蓄音器をかけた。

「あれは……あのレコードはハワイですね」と云つた。あれを聞くとハワイの人々は泣き出します。

ハワイ滅亡の時、已むを得ずハワイの王と別れる時に唄つた歌詞なのです。その時を思ひ出すと今でも泣き度くなるのです。どうか止めて下さい。」「そうか。ハワイは氣の毒ですね」その女の人はミシシッピの大學を卒業した女學生である。

「米國人は日本人より偉いのですか。」「何が偉い。」日本人は米國人より偉い證據がある。角力にしても、走つても、凡てが負ける事無しと云ふた具合です。「どうゆう譯かと思つて、云つて見たのです。」

シヤトルから來た人がゐた。日本人も少しは入つてゐる。大學の優等生の中で三分の一は日本人である。一昨年の如きは、一、二、三番までの如きは皆日本人である。然し乍ら就職に迷つてゐる。

白色人が採用されて黄色人種が採用されない。「日本の國に生れたのがうらめしい。」と云つて此の度、母國の卒業生を連れてやつて來た。

觀艦式、觀兵式、多數の工場等を見せてやつたら大變喜んだ。「どんな事が君達に感じたか」と尋ねたならば「伊勢大廟がこうも昔から以來今日まで神々しいものか」と驚き敬服し喜んだと云ふ事である。身延山に行つても非常に喜んだ。そして凡てが感慨無量だつたと云ふ事である。

東郷元帥にも御會ひし、いろ／＼の激勵の辭を戴いて、記念撮映をも致して歸郷した。眞の日本人なる事が自分達によく判つて嬉しかつたと當地の新聞へ掲載した。それを私の許へ送て來た。

日本は最新の文明である然るに、どうゆう事が。此の頃の若い人は知らない。西洋の新しいと云ふ事は日本の古い文明である。西洋の文明は、他人の寄り集つた理窟の文明である。日本は親子が基となつて出來た情愛の文明である。向ふの、西洋の人はいくらどんな事でも道理になつた事は善である。

カント等の如きあんな事がありますか。カント等の説に依れば、川の中の子供を見て構はぬ。理性にうつたへてから救ふ而し乍ら其は惡である。日本人はそれを構はずに置けば子供は死んで了ふであらう。と直に之を救ふ其處に情愛の文明の發露がある。

今や世界の人々は何もかも構はず「新しい」と叫ぶ。而し新しい文明とは何であるか。冷たい文明を求めずして温い文明を求めねばならん。その文明とは日本の文明を指すのである。此處に、一つ注意され度い事がある。

孔子様も、釋迦様も、凡て日本の文明に貢獻した人である。けれども孔子の文明は支那の文明ではない。釋迦も印度の文明ではない。釋迦の文明である。孔子は仁を立てました。釋迦は慈悲の心を説きました。

日本の文明の極致は有難いと云ふ事である。

情操が基となつた温かい文明でなければ、我々の文明は得られん。

權利、義務（其の他も含む。）等と云ふ冷たい文明が入つて來た。がこれではほんとの幸福は得られない。

それに對して情愛が日本の文明である純情のあらはれは例へば「四十七士」である。

昔から偉いと云はれた人は皆純情に依つて動いた人であり、日本の文明は世界の最新文明も三千年前から持つて來たのである。そうして、何にかけても負けぬ國民である。日本人は餘り精神文明と云ふ事に許り頭腦を注ぎ、反つて寧ろ冷淡な位である。

今は精神文明と外國から得た物質文明とを合して、此處に始めて、日本文明と云ふものを併せべきである。

日本人はあくまで日本人、眞の日本人である。兎角、日本人は外國氣質に、やゝもすればとらはれ易く、尊敬し過ぎる位である。尊敬すればする程、よく分る。尊敬すればこそ、その氣質に倣ひ、遂にはそれをも握つて爲すのである。

然し、我々は日本人であると云ふ事を忘れて外國の文明を取り入れたならば、必ずや、日本は滅亡して了ふのである。日本は皆物眞似が好きだ。その結果である。皆洋服を着用してゐる。洋服とは云へ各國にこの様な服はないのである。イギリスのロンドンから歸つて來た友達は皆變な着物を着用してゐる。向ふのをロンドンの着物だと云ふ。

イギリス、苟しくも金の自由が利く以上、フランスの人がイギリスに歸つたならば、自國の着物を着用するではないか。

誰が「トンボ」を捕へて先進動物と云ふか。先進國とは何であるか、何を云ふのか。アメリカ人はイギリス人を捕へて先進國民とは云はない。

日本は確かに世界の先進國である。他國を捕へて云ふ事は駄目だ。他の國を尊敬する事は宜しい。自然を征服すると云ふ事は無い。「エアリシップ」は空中を征服すると云ふ事は出來ぬ。否「エアリシップ」が空中を征服してゐるのではない。之は難問だ。

日本は兎角外人の名前を輸入してすぐ其をつける事が大好きだ。日本人が「何々アルプス」と名前をつけ、アルプス登山をして喜ぶ。アルプス登山をしたのではない。只アルプスの一部、穂高なら穂高の頭の上に乗せられてゐるだけである。ゆら／＼とした言葉を外國より取つて輸入し、その儘使用するは少しは誰でも考へて欲しい。

我々は日本人である以上、日本人らしくする事である。中々「らしく」と云ふ事は大切な事で、日本人らしく本當にそうならねばいかん。

青年は、特に諸君は、青年らしくする事が是非必要である。よく承知して居て欲しいものである。我々の御先祖様は「嗜」と云ふ事を救へてくれた。「嗜」と云ふ事は、女等は何となくじつと心の中に辛抱する事が必要である。女は何となくしとやかな「嗜」が潜んでゐるのである。

或日本婦人がロンドンでお産をした時に、あれ程難産であつたのに、聲一つ出さない。齒を食ひしばつて、油汗を出して堪へたそうである。自分の娘のお産の時聲一つ出したならば、日本の状態も駄目であると思つた。

「只で歸るな!!」と云ふ氣持を以て進んで下さい。

西洋文明を入れて發展して此の恩を諸君はどうして返しませんか。

一昨年、フランスのクレマンソーが主となつて出来た會の劇が開催された。(途中省畧)

日本の佛教徒に對してクレマンソーは寄稿してくれた事がある。

情操文明の賞むべき點を失つたならば、日本は如何しますか? (途中省畧)

今日日本はいろ／＼の點の困弊の極に達して居ります。此から後の日本はあなた方です。

若しあなた方がよく判りましたならば、「只で歸るな!!」此のみであります。更に「我等は日本人なり」を切に強調致します。もう、大分豫定時間も迫りました、都合もあります。

私は之で講演を終り、降壇する事に致します。

拍手……………

途中、紙面の都合上、省畧致しましたが、以上で大體完了致しました。文の成文、並びに構成の上手、下手は論外として少しでも全校の諸君に記憶を辿つて、御参考になりますれば幸甚の至りに存じます。(一九三二・一一・廿三)

## 説 苑



### 秩父織物に就て

賛助會員 佐藤傳次郎

この稿は昭和六年十二月二十七日及び昭和七年二月二十三日の兩日、學校の命により出張、秩父工業試験場及び絹織物同業組合にて調査せし「秩父絹織物に關する調査」より摘記せるものなり。

#### 一、沿革

上代より織物に傳統的堪能であつた秩父の住民は、太古の袴褌の原始織物から絹に變化し、漸く世に知られて來たのは足利時代に於ける根古屋絹。根古屋秩父の時代からである。徳川時代の末期から明治の始めに製造された秩父は世に「鬼秩父」と稱せられる程堅牢であつたが、時代の進化に伴ひ現代人の嗜好に合致し、而かも美術的慾望を満足せしむるため、見て佳く、着て良く、柄がよい」の三要素を備へた理想的のものにまで進化して來たのである。

#### 二、名稱

銘仙の名稱の由來に就ては種々臆説あり。足利時代に南蠻より渡來せる絹物の一種に、間道なるものあり。之を名物切と稱して市場に出すに及び、これが類似品を木綿にて作り棉名撰と云へり。銘撰なる語は之と區別するために附せるものにて銘仙とも記す。撰とは撰絲の撰にして光澤及び質の優れたる織物の意なり。銘は銘茶・銘酒と同じく特別の製法にて作れるものゝ意に用ひらる。又銘仙なる名稱は織物を賣買する商人の附したるものの如く、山の人が製造する意なるべし。その他、目専と書きたる

場合も認めらる。即ち縞目の明かなるの意に用ひられしものにて、從來の銘仙が殆ど縞物なりしを見るも明かなり。然らば「本場秩父」とは如何なる意味かと言ふに、銘仙は經絲も緯絲も共に純玉絲にて織りたる絹布であるが、現今各地より産出せるものは玉絲以外の下級原料をも使用すれども秩父のみは純銘仙産地にして、従つて秩父以外には銘仙の本場はない譯である。本場秩父とは要するに銘仙の本場は秩父であり、同時に他産地製品は銘仙の類似品も含まるるの意なり。

### 三、製造工程

原料の購入より製品の販賣に至るまでは次の經路を踏む。精練、染色、製織、整理、検査即ちこれなり。

銘仙の原料は次第に變遷し、あるが、將來は紡績絹絲即ち絹紡を使用するもの増加すべし。絹紡は明治五年政府の設立にかゝる本縣新町工場に源を發す。之は人絹と同様の操作を経て絲となし化學純絹絲と稱す。故に玉絲のみならず絹紡絲、純絹絲及び人絹を加へたる製品が市場に出づるも遠からずと思はる。然し乍ら秩父にては組合の定款に従ひ夏蠶絲より得る玉絲を、前橋より購入して之を使用するのである。

精練とは布に織るべき原料に附着せる種々なる不純物即ち油、糊、粘土、石灰、膠質などを取去る仕事の意にして、染色の準備工程として必ず行ふべき操作である。

前に述べた美術的欲求を満足せしむる方法として染色、圖案などがある。染色術の目的は各種の纖維に望みの色合を最も正確に、低廉に、而かも堅牢に、纖維を傷むることなく染上ぐるに在り。堅牢の必要條件としては、

- 1 洗濯に耐ゆること
- 2 漂白に耐ゆること
- 3 日光、藥品、熱などによりて脱色、褪色、變色せざること
- 4 摩擦によりて色の剥げざること
- 5 生地之光澤を損ぜざること
- 6 保存中に變色、或は纖維を害せざること

以上は理想の場合で實際には右諸條件の内、その用途及び目的に應じて之を充たすに必要な條件を具備すれば可なり。秩父

にては染色、製織に對する準備工程及び整理なども次第に機械化し、爲めに職工の數は減少するの理なれども、生産高増加するを以て實數に於ては殆どその變化を見ないのである。

製織は之を大別して工場制及び賃織組織とす。前者に於ては廣巾及び並巾の力織機を用ひ、電力或は石油、エンジンにて運轉す。後者に於ては手機（高機）及び足踏織機を用ふれども、時間や能率などの關係により次第に工場制に向ひつつあり。尙ほ秩父には現在撚絲を有せざれども、斯くの如きは生産設備の一大缺陷なれば速かに設立せらるるを望むものなり。

整理は從來生機整理を行ひたるも、糊を落せば柄の變化著しきため近來本整理即ち七分整理を行ふ。これは完全に糊落しせる後に新しく三分の糊付をなすを以て、百貨店は喜ぶも、問屋は品物を持廻す間に糊の少き爲めに品質を害するを以て不興なりといふ。而して秩父にては組合の事業として織物整理の改善發達を期するため、整理工場を設け斯業の進歩に努力しつつあり。尙本縣にて整理工程機械を有するは秩父のみなりと。

製品検査は組合員の製織に係る織物の毎品に就て之を行ふ。次にその方法を記すべし。

- 1 湯通しに對する染色の耐保力
- 2 石鹼、アルカリ等の洗濯に對する染色の程度
- 3 染色の耐酸程度
- 4 日光に對する染色不變の程度
- 5 摩擦に對する強弱の程度
- 6 原料絲の純不純並に組織の適否
- 7 規定に對する尺、幅、量目及び製造者印章の有無

以上の検査に適合せる織物には兩端に所定の標印を押捺するものとす。

販賣即ち取引制度は買織商を中心とする市場制度にして、組合立市場の設置ありて毎週水・土の兩日を以て開市し各買織商の仲介に依りて來客即ち東京、大阪地方の百貨店及び問屋と製造家との直接取引をなすのである。

### 四、織物の種類

今、全國に於て販賣せらるる秩父絹織物の種類は絹物、縮切絹、工風絹、模様絹、夜具地、座布圍地、色無地、白太織、糸好織、本絲織、壁織、風呂敷等十數種なり。大正絹、玉絹雜絹、綾織、袴地などは現今殆ど製造せず。右の種類に就き簡単に解説を記せば次の如し。

絹——色絲のあつかひによりて絹を出す。

縮切絹——括絹のこと。即ち經絲を繰て絹にする部分を絲で括りて機械的に拔染す。染風呂に入れて蒸すと染料が溶け出して絹を生ず、即ち絞を絲に應用せるものなり。之を切つて經絲に用ひたるものなり。又捺染を應用して絹を色で出だせるものも製造せらる。

工風絹——之は括染を行はず、上代の板縮絹のことにて、絹板に一、二分四方位の小さいものを用ひ成型せる枠に絲を堅く巻き附けその上より染料を注ぐ。縦は長いものを用ひ之に横を工夫して絹がよく出来る様に合すものにて、所謂大島絹これなり。

模様絹——解絹或は解銘仙とも稱す。模様絲で假織せるものに括染し成型せるものより解す。

模様物——單獨に模様物といふのはない。何れも白地に模様を配したるものなり。

大正絹——現今は殆ど製造しないが、之は經絲は拔染の出来る藥品にて染色し緯絲は拔染の出来る藥品にて染色し兩者を合して拔染糊を附けて捺染を行ふ。然ると一は拔染に依りて不明瞭の模様を生ず。

夜具地——絹、縮切、模様物などの應用により次第に大柄の品を製造す。

座布圍——絹、無地、格子、額座布などあり。

色無地——經絲も緯絲も共に染色して織る。故に織無地とも稱せらる。之は極めて高級品にして日本人の嗜好である所の手の込みたるものの一例なり。

白太織——經絲は高級の白物となし、緯絲には然りたる太絲を用ひたるものなり。

絲好織——普通の銘仙は其の絲使ひが玉絲、相中、經緯玉玉絲などであるが之は經緯共に本絹絲の練りたるものを用ふ。

壁織——横に壁絲を用ふ。

# 五、織物統計

各種統計の詳細は「本場秩父織物統計表」並に「埼玉縣織物同業組合現勢」を参照すべし。前表により大體の趨勢を窺へば次の如し(昭和五年度末現在)

織機台數——力織機 一、八九一七台

足踏機 一、七九九台

手 機 二、四一五台

工場制の増加すると共に力織機は漸次増加し、手機、足踏機の二種は漸減すれども、銘仙の性質として足踏機は或程度まで必要なるを以て、將來は力、手、足踏の順位とならんか。

生産種類別——(これは異動甚だし)

絹物 三二二、五七八疋

絹物 一三九、〇五八疋

夜具・座布圍地 三二七、一六二疋

模様織 八八、三五八疋

其他 一五三、三七六疋

各地搬出比較——

東京 三二五、〇〇〇疋

大阪 二五三、〇〇〇疋

京都 一四九、〇〇〇疋

名古屋 二五、〇〇〇疋

地方 二五八、〇〇〇疋

最近十ヶ月間産額比較表——

| 年度   | 正 数      | 金額(萬圓) |
|------|----------|--------|
| 大正十年 | 八八〇、〇〇〇  | 一、八二〇  |
| 同十一年 | 七八〇、〇〇〇  | 一、五三〇  |
| 同十二年 | 八〇〇、〇〇〇  | 一、四四〇  |
| 同十三年 | 八四六、〇〇〇  | 一、五一〇  |
| 同十四年 | 九二五、〇〇〇  | 一、五六〇  |
| 昭和元年 | 九四五、〇〇〇  | 一、一四〇  |
| 同二年  | 一〇三五、〇〇〇 | 一、三七〇  |
| 同三年  | 一〇四五、〇〇〇 | 一、三八〇  |
| 同四年  | 八九五、〇〇〇  | 一、〇五〇  |
| 同五年  | 一〇二〇、〇〇〇 | 九六〇    |

右表に就て見るに、大正十年の好景氣時代には金額は最高にして一正約二十一圓なりしも其後漸次低落し昭和五年には九圓四十錢となれり。生産高は昭和二年以來約一〇〇萬疋の常數を上下するも、金額に於ては漸減の道程にあり。市日は一ヶ年約一〇〇日なるを以て毎市日の出品數は約一萬疋なり。

附記 昭和六年度生産調査

九九九、七三三疋

九〇六一、八六二圓 (昭和七年一月二日朝日新聞所載)

#### 六、秩父絹織物の變遷

現今秩父銘仙が我國服飾界に牢固たる地位を占むるに到れるは長い歴史に依るが、その元締たる同業組合の創設せられたのは明治二十七年にて、明治三十三年重要物産同業組合法の制定公布に依り、本組合は翌三十四年十月從來の組合定款を改正して法規所定のものなし、以て現在の秩父絹織物同業組合と成れり。

次に徳川四代將軍時代の寛文年間以降今日に至るまで本絹織物の丈、原料絲、機台種類等の變遷を示さん。

#### 丈の變遷——(幅の變化なし)

- 1 寛文五年より 五丈二尺
- 2 元祿年間より 五丈四尺
- 3 安永七年より 五丈五尺
- 4 明治七年より 五丈六尺
- 5 明治二十七年より 五丈八尺
- 6 明治三十七年より 六丈〇尺
- 7 大正六年より 六丈一尺

#### 原料絲の變遷

- 1 始めは經緯共鬚斗絲を以て製織す
- 2 經絲は特に玉絲を用ひ、緯絲は鬚斗絲とす
- 3 經絲に玉繭撚絲を用ふ
- 4 玉撚絲を經に、蒸氣製玉絲を緯に用ふ
- 5 經に玉撚を、緯に玉絲甘撚絲を用ふ。現今の玉絲即ちこれなり。

#### 機臺種類の變遷

- 1 下機(俗にイザリ機)
- 2 高機(普通手機)
- 3 高機にボタンを取付けて製織す
- 4 足踏織機
- 5 動力織機
- 七、組合の事業

事業概況を記せば左の如し。

組織

一、組合ノ區域 秩父郡一圓

一、組合員數 一九〇〇人(昭和四年三月現在)

一、組合役員 正副組合長各一名、評議員七名

一、代議員 三二名

一、染織鑑査委員 七名

製品検査——製造工程の項に前述せり。

品評會及び縣外陳列即賣會——毎年春秋二季に於て品評會を開催し、縣技術官及び各集散地百貨店、知名問屋各店の審査講評を乞ひ、製品の向上改善に努め、一方縣外陳列即賣會を開催し、若しくは各都市主催の品評會等に出品して製品の紹介をなす。

視察員派遣——各集散地及び生産地へ職員及び當業者を派遣し、嗜好、流行及び販路の状況を視察せしめ其意嚮を組合員に周知せしめて研究に資す。

従業員獎勵——優良職工の獎勵は年々之を行ふ。故に職工は何れも其表彰を期待し常に業務に精勵しつつあり。是が授賞者は毎回約二、三百名の多きに及ぶ。昭和四年四月現在の従業員數左の如し。

男工 一、四〇四人 女工 二、一三五人

織物整理——製品検査と同様製造工程に記せり。

八、研究法

銘仙の研究法は之を分ちて二方面に大別するを得べし。一つは高級品の製出にして、他は大衆向の製出なり。前者は純絹絲織と同様にして高價なるを免れず。後者は木綿程度の價格にして一般大衆の需要を充たすを目的とすべきも、値段と技術の兩方面に於て困難の點多かるべし。而して斯くの如きは銘仙本來の意に反するものと思はる。増量の程は生地の方方に復するを以て限度とすべく、例へば精練に於て二割を減すれば二割の増量を行ふが如し。圖案即ち柄は將來無制限の變化を來すべきも、組織其

他は或限度を以て循環すべし。從つて今後研究すべき事項多々あるも上記諸點は特に留意すべきものと考へらる。染色の堅牢にして洗濯に依り益々その眞價を發揮するは秩父銘仙の特色なればこの方面は愈々理想に近づくを得ん。

秩父山國武甲の麓 横瀬高篠機どころ

機は絹ばた 本ちふぶ

(昭和七年三月記)

和歌 三夕

心なき身にも哀れは知られけり鳴たつ澤の秋の夕ぐれ 西行法師  
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ 藤原定家  
村雨の露もまだひぬ横の葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ 寂蓮法師



## 通信



## 南洋の風物

須永敏雄

左の文章は須永敏雄君より小生にあてゝ送つてくれた書面である。稍々舊聞ではあるが椰子の葉陰、ドリアン薫る南の國の地と人を傳へ得て躍如たるものある故こゝに掲げる。頗る長文なればその一節だけである。同君は昨六年三月の卒業生にて早くより圖南の雄志已みかたく、資性堅實、南洋協會の選拔をうけ同年七月シンガポールに渡り、更にスマトラ島に移り目下雜貨商店に勤む。學校にある大蛇の皮は同君よりの寄贈。(佐藤泰三)

一月十九日のこと主人が(勤務するシンガポール市商會主)が突然「すまないが次のオランダ船でスマトラへ行つてくれ」と言はれた。スマトラといへばシンガポールからはツイ對岸にあたるけれど、國はちがひ、船も二晝夜はかかり、入國税をださねばならず、渡航手續も面倒である。それを「オイ熊谷まで行つてこい」ぐらいにいつてのける主人も主人、蓋し海外に活動する日本人は皆この種の太膽極まる人々である。加ふるに次のオランダ船といへば二十一日出帆のデドレ號より外にない。あすあさつてだ。一週間や二週間の出張旅行ならば格別「マア半年ばかり行つてくるさ、その先は其の時次第だ」と言ふ話、携帯する荷物の整理すら客易なことではない。

愈々一月三十一日午後二時若主人を始め店の同僚にあはたしい當分の別れを告げ、赤道直下灼熱せる太陽の光りに頭髮も焼

け縮れんばかりの中を主人につれられ懐しの上海公司の棧橋から支那人のあやつるサンパンに乗り、強風怒濤の灣内を小一時間もゆられ、(此頃當地は風最も強し)三時廿分沖合遙かに投錨するオランダ船デドレ號に着いた。主人は「シツカリ頼む」と最後の言葉を残して歸つて行かれた。私は汽船の欄干によつて何時までもくも見送つた。私の胸には今までの主人の厚き情、懐しの同僚のこと、又初て足をのせし南洋シンガポールの都市、さては又行くて、あこがれのスマトラの處女地に若人パイオニアたる等次ぎく満ち来る。

シンガポールからスマトラ行きの汽船は東海岸だけでもメダン、タンジョンパレー、バカンシアピア、バカンバル、レンガ、ヂャンビー、パレンバンなどがあり、これ等の地には普通和蘭船の優秀な一千屯以上のものが一隻、支那船の五六百屯のが三隻ばかりあつて、一週間に四回は必ず發着する。共に貨物本位ではあるが、オランダ船は日本の近海航路の如く立派な船室をもつて居る。支那船には船室としてきまつて居るものはない。日本の商人は大低支那船に乗るのだが、主人が賃銀の高いオランダ船に乗せてくれたのは思うにボイコット中の支那人を警戒してくれた好意であらう。誠に有難い次第である。

デドレ號に乗りこんだのはよいが直に船室にはいつたと思ふたら大間違ひ、元來當地には船室に三等のある近海航路はないのである。一等二等及びデツキパツセジャール……(その他に船員の部屋を借りきることの出来る)の三種であり、一、二等の船室は勿論立派なものであるが、賃銀はメツポ一高い。之に反しデツキパツセジャールには船としては唯單にデツキを貸すに過ぎないが、各自は所用の道具は皆持参しなければならぬ。馬來人、支那人、印度人は寢道具、鍋、釜、白米まで山の様に持ちこんで船で炊事して居る。普通の人は大低食堂へ食器を持つて行つて食物を買ひ、デツキでゴザを敷いて食べる。日本人は贅澤でボーイに頼んで盆にのせて運んでもらう。そうすると三倍も高いのです。そこで小生は實のところデツキパツセジャールだつたのである。

ほんどりは日本人はデツキパツセジャールにはなれないわけなのである。ジャワ行きのオランダ船では總體に許さないそうです。デドレ號も勿論喜びはしない。

お神さんの心づかいで手提籠には鐘詰が一ぱいあり、パンも二日分入れてあつた。私は主人が買つてくれた旅行用の寝椅子に横になつて、遠くへ行行く海にならんで居る郵便局、ユニオンビルデングなどの大きな建物を眺めながら靜かに出帆を待つて居た。五時になると菓子やバナナなどを賣りに乗りこんで居た支那人が皆降りる。郵便物を積んだ英國旗を立つたランチも歸つて

行つた。五時廿分愈々出帆である。はやシシガポールの街も夕暗の中に消え、前方には所々に直黒な鳥影が見えだしてゐる。もう蘭領なのだ。船は比較的小さいため、大きい横波のためにとても動揺が烈しい。速力は可なり早い。馬來人が酔ひだした。出帆してから一時間ばかり、オランダ人の事務長が支那人のボーイを一人つれて私の處へやつて來た。乗船切符を賣るのである。切符を賣ると同時に旅行券と入國税百五十盾(日本の約二百五十圓)を事務長があづかることになつて居る。金があれば次の停船場で文句なしに降ろされてしまう。私は切符も買つた。旅券も入國税も出してしまつた。安心して寝椅子に横はり、モルフをかけて休んだ。外は眞暗だ。風は多過ぎるほどあつて、晝間はやける様に暑い、夜は寒い位である。馬來人はゴザの上に集つて手を叩き拍子をとつて唄ひ出したが、その有様は日本の宴會で酔のまわるにつれ、一座各々手を合せて歌ふのと少しもちがわぬ。私はいつしか眠りに落ちて居つた。寒いのとあまりに静かなので覺めたらしい。起きあがつて時計を見たらまさに夜中の二時、目をこすり、欄干に寄り、見渡せば海面はこゝは油を流したよう、左手には四五百米のところに陸がある。嗚呼、月夜なのだ。熱帯の澄み切つた大空、月は悠々として常緑のひろ葉を輝し、黄金の光をなけて天地静寂。

「何處か」と馬來人に聞いて見たが彼等も知らない。棧橋も何もないところを見ると開港場ではないらしい。波のたふないところをみると海でもないらしい。河の入口かも知れない。何としても恐しい静かだ。乗客は皆起きてしまつた。起きては見たものの、唯それだけ、又いつのまにか寢てしまつた。二十二日朝六時いつのまにかスラパンジアンに着いてゐた。港と云つても名ばかり、一本の棧橋が川の真中に出してあるだけ、船上より見て、かれこれ百二十三十戸もあるらしい村である。吹けば飛ぶ様な家だ。こゝで大事な産物は第一はサゴ粉、これは澱粉であつて、天にそびゆる大木の幹を切り倒し、削りくだき、水にひたし、しぼつて、沈澱した粉をとるのである。杉の様な大木の幹から食料の澱粉が山の様にとれる。嘘の様だ。其の外オビ、カユと云ふ木の根のサツマ芋の様なものからも澱粉がとれる。これ等のものは山野至るところに自生し、無靈藏である。

品質は日本の片栗粉よりは稍々堅いが、大人は皆食料とする。南洋の天地は唯食べるといふことに對しては何等の不自由はない。我々は着物をほす場合に糊を用うる。着物の糊ぐらい何でもないと思ふかも知れないが、南洋では一日一枚のシャツとツボンはきまつて洗濯して、それには必ず糊をつける。従つて其需用は大したもののである。

スラパンジアンに着く船はこのサゴ粉を積み寄るといつても過言ではない。何百何千と云ふ山の様なサゴ粉が棧橋近くの小

屋に積んである。船が着くや、何十人の苦力は直に一俵づゝ倉庫へ積みこみ、豫定の俵数だけ積めば直に出帆する。我がチドレ號もシシガポールから來た四五人の馬來人が下船し、これに代つて又外の馬來人が上船し、四五個の荷物箱が降ろされた外は、全部いそがしいサゴ積みこみであつた。それが終ると直に九時五十分出帆である。

第二はスマトラ木材である。昨夜通つて來たランサン島は四十萬ユーカの面積(長さ四〇哩幅二〇哩)を有する大きなものである。そしてその島全部がシシガポールのユニオンビルディングの六階に本社を占むる一會社——しかも日本人のスマトラ木材會社の所有である。即ちランサン島こそは日本島といふてもよい。同乗の馬來人が指して「アレガ日本島だ」といふのは尤もだ。ランサン島の全部は鬱蒼たる熱帯の原始林、海岸線一哩の處々に馬來人が自給自足の自然生活をして居る。木材會社では良材だけを切り出し、工場で製材し、各地へ移出輸出をしてゐる。島内には汽車も走り堂々たるものであつたが不景氣は何處も御同様。會社で當地に於ける製材業が如何に盛であつたことは後で聞いたことではあるが同會社に居つた山崎氏がバカンバルに來て木材業を始めた當時、八ヶ處の土人材木屋があつた。彼等より四分の一の値段で會社の材木を賣つて尙原價より三倍の利益をあげてドン、賣つたため、それ等の材木屋は一たまりもなく厭倒され、今は一軒もなくなくなつた。これも後の話であるが先日知り合の一馬來人の家へ遊びに行つた時、彼は新築せる一軒の家をさして「これは日本の材木で作つたものだ」といつた。「そんなことがあるのか」とよく聞いて見ると山崎氏から買つたものであつた。こんな例は幾らもある。

森林の中には驚くばかりの大木が密生して居る。唯残念なことはこの島が低いため沼澤の様な處が多くて農作物が出来ない。會社では已むを得ず伐採した跡の良いところには椰子、ゴム等を植ゑつけ、悪い處にはそのまゝになつて居る。併し地味の豊饒なことは驚くばかりである。九時五十分スラパンジアンを出帆した。船は湖水の如き海面を午後一時ペンカリスに着いた。ペンカリスはタツタ一人の岡本氏が馬來人を使つて雜貨店を開いて居るが萬里の異境に奥さんも子供もなく營々として働いて居る岡本さんには感心するより外にない。こゝで移民官が船へやつて來て先に事務長へあづけて置いた旅券を見せ百五十盾を拂つた。併しこゝに私を全き閉口させ、憤慨した。大事件が持ちあがつた。一通り書類を調べ終つた移民官が最後に私の日本より持參した旅券にある As a Commercial apprentice of the South Sea Association に目をつけ、サウスシーアソシエーションとは何かとするべく質問する。南洋協會といふ意味を充分に説明するには私の馬來語は未だ極めて貧弱であつたが、いへばいふほど彼

は疑を増すばかり、遂には私のトラング全部あけさせて、新聞紙や書物を一一調べるのである。蜂須賀侯邸で寫した寫眞をひき出し「これは何か、何の學校か、これ等の人は如何なるものか」と一痕にさわる。併し實によつた。とうとう上陸させて同行し役所に引つぱりこみ、大きな書類を出して頻に調べる様子、多分 The South Sea Association を移民官のブラツクリストのうちにはさがるであらう。幾らやつても Nanyo Yokai ならあるだらうが、サウスシ、アソツシェーションはある筈がない。彼は斷然「大國不許可」といふのです。これには實に困つた。しかたがないから「實はパカンバルの三甲商店に花田君といふ人がゐる。私の親友である故今久しぶりに會いに行くつもりである。どうか是非一ヶ月でよいから許可してもらいたい」とウソ八百を並べてやつた。やつとのことで單なる旅行者として三月廿二日までの入國が許可された。

なぜこんなへまな事になつたか。思ふにオランダは日本がスマトラに虎視眈眈として軍事的調査をすることを常に恐れてゐるから學生姿の私を或る意味の調査員と疑つたのであらう。第一日本の警視廳の御役人さんが私の旅券に南洋協會をナマジツカ The South Sea Association などと並べるから小膽なオランダの移民官は「これは怪しい。變な奴は入れないに限る」と責任のかれの不親切をやらかすのであつて、NANYO KYOKAI と其儘書けば何のことはなかつたものを。

私が一ヶ月の短期でもよいから入國許可を願つたのはパカンバルの目的地に着いてからシンガポールの陳列館に手紙を出し和蘭官憲に何とか諒解運動をしてもらつて永住權を得たいからであつた。何しろトラングを勝手にあけ所有品を片はしから見られた時のクヤシサ「このオイボレ爺、はり飛ばしてやりたいと腕がムズムズした。日本人に對してこんな態度に出たのは後にも先にも初めてだと皆に話したらいふでゐた。併し和蘭は表面日本に對しては敬意を拂つて居るが、著しく増加する日本人の來住、着々として發展する日本の經濟的發展につき、警戒し入國法は困難になるばかり、入國税をあげるとか種々のことを常に考へつゝある。

殊に現在ゴム事業の不振から島内に失業者が數多出來たため「スマトラへ行つたら何とかなるだらう」と漠然と入國するルンペンを防止するため立派な雇主の證明のない者はたとへオランダ人すら入れられない。目下オランダ政府の當地方に於ける土木事業を一手に引きうけて、大なる勢力をはつてゐる紀洋商會の瀧澤君が今日五人ついでシンガポールよりやつて來たが、雇主の證明ないため下船させられてしまつた。

船は四時四〇分ベンガリスを出帆して惹ンヤ河を溯ることになつた。スマトラ東海岸は一體に低地であるから、その河川の延長は短くとも幅は非常に廣い。シヤ河にしてもその幅は湖水のようで、船は中流を進んで行くのであるが、右も左も兩岸は唯遙に黒い線が見えるだけである。五時半スングーに寄つた。寄港すると云ふと體裁はよいが河の途中から少し港の方に寄つたと云ふだけで港から數隻の土人のサンペンが本船に近づき、送る荷物があれば船の起重機を使つてサンペンに受けとつて、港に引きあげるのである。港といふも遙か遠くに十數軒の家があるに過ぎない。こゝで一人の馬來人の五十近くの婦人が乗つた。二つ大なる荷物をもつて私の前にゴザを引いて座つてゐる。見ると大きなビースン(バナ、)の房を甲板に投げ出して置いたが、その一本の大きさが一尺五寸もあるかと思はれるほど長い、何のことはない日本のヘチマだ。多分ビースン、タンドだらう。シンガポールにもこの種類は幾らもあるがこんなに長く大きなものはない。私は近寄つて「コレハビースン何か」と聞いた。「ビースンタンドです」如何です」といふて彼女は十五六本ある房のうちから良く熟したやつを一本ちぎつてくれた。つかんで見ると全く偉大なものだ。私は皮をすて、半分を己に親しくなつてゐる馬來人の青年にやつた。半分でも日本にあるバナナの四本分はたしかだ。

六時半御神さんの心づくしのパンもつきてしまつたから、かの青年に頼んで馬來料理を買ふことにした。支那料理の方が良いのだが馬來人がきらうからである。一人で食べるのもつまらないから彼等と一緒に食ふことにした。牛肉の罐詰をあけて「サア如何です」と彼等の前に出した。すると誰も手もつけない。唯ニヤ／＼してゐるばかりだ。やがて彼の妻君が笑ひながら「Bea」といふのです。即ち「豚肉じゃないのですか」といふ譯である。「とんでもない、これは牛肉だ」といひながら、私がその一片を口に入れて見せたら、やつと安心して食へはじめ「ウマイウマイ」と忽にして平げてしまつた。馬來人はイスラム教徒(回教徒)であつて、豚は絶體にやらない。これにも色々の説もあるようだが、何れにして彼等は豚肉は食べないどころか、飼育もしないし、見ることすらも好かないらしい。馬來人の間で「Bea」といふほど悪い言葉はない。日本の「畜生野郎」「糞たれ野郎」などに相當してゐる。イスラム教徒に對して「御前は豚肉を食つた」といふならその人を殺しても良い位になつてゐる。ことほど左様に豚をおそれる。従つて豚肉とはどんなものか全然知らない。夫故苟くも肉であれば如何なる肉であつても先づ「豚肉ではないんですか」と問ふのである。外國の料理で肉のつくものは全く手もふれない。罐詰にしても肉のものは絶體に買はない。ひどい

になるとミルクを買ひに来て「これは豚の乳ではないのでしやうね」と真面目に質問する。全く笑はせる。しかもこれ等の人はオランダの學校を出て税關に奉職する堂々たる官吏である。

シヤ河も段々に狭くなつて、三時間後には六七百米になつた。船員で世界を一周し日本へも寄港したことがあるといふ馬來の青年と食後並んで船尾に立つ。空には十幾日かの月が圓々として照らし、脇に雲が一字に引いてゐる。何といふ美しい眺めだ。水面のさざ波に月影が碎かれては集つてゐる。何といふ良い氣持ちだらう。私は暫くはこの有様に見とれて居つた。嗚呼僅か八ヶ月以前、私は郷里にありて、父の用事で外出した途中、皎々としてさへ渡る月を見て「一年——二年の後は果して何れ地、如何なる時にこの月を眺めることであらう」と希望に燃え夢の如く歩いて居つたが、嗚呼實に今月今日あこがれの南洋の一角、オランダ船上にかくも早く其機會の例來しやうとは。

ボートといふ停船の汽笛に思はず目を覺したのは十一時半、愈々シヤに着く。シヤはスルタン(王様)の城下だ。けれども何といふつまらな。城下町だらう。日本ならたとへ一萬石の城下町でも相當の繁華をなすのに、これはスマトラ第一のスルタンの都だといふに何と貧弱極まるものだ。町といふより村だ。市街は支那人商店三四十軒(これも皆日本の田舎の駄菓子屋のようなつまらないもの、見るべき店はわづか四、五軒)シヤのスルタンは金こそないが領地は頗る廣大にして收入も相當にある。併し馬來人のことであるから常に金に苦しんで居る。スルタンの領地の各部落に寺院を建てるため、イスラム教徒から寄附をつとり、やがて基礎工事を始めたのであるが、その中スルタンが二十萬圓を使いこみ、今では全部仕事を中止してしまつたといふ。夫故スルタンの信用も今は大部落ちて商人は現金でなければ品物を送らない。厄介な王様だ。併し流石に一國の王様故その宮殿の如きは善美を極むるといふ。

王宮から一里ばかり下流に大倉農場支配人飯塚先生の所有である南和公司の大ゴム園がある。これもゴム事業の不振にもれず、今は休業同様で、わづか除草苦力百人足らずしか居らない。このシヤの附近も猛獸毒蛇を以て有名である。シヤ河には居らないがその支流には鱈の大群が居り、川蛇の直径三十糎のも居る。パンカヤンのゴム山は猪の産地で、長谷川氏などはそれを一本の槍でわけなく五六疋は倒すといふ。溝に隠れて居つて、小牛ほどもある猪が五六十も群をなしてやつてくの、土人の槍をしていてあたるを幸ひ突き倒す時の壯快な氣持たら何ともいられないといふ。そして又この猪の若いやつのもうまいたらない。

シヤに着いたので乗客も大分目が覺めた。シンガポールから商品を澤山仕入れて來たホーデコックの馬來人三人が集まつて、うまそうにドリアンを食べてゐたのが、私にどうです一つと出されたので、勿論大好物のドリアシだ「有りがとう」といふて頂いた。實際頗る落ちるようだ。スマトラ西海岸中部のバダンと、その近くのホーデコックは五萬の人口を有する大都會である。汽車も通じて居る。これ等の町の商人の仕入れる商品は愉快なことには、僅少の綿布(イギリス製)と機械類(ドイツ及米國)及特別品(支那人むき)を除いてはその九割までは日本製品である。その第一は綿布、人絹、次で陶磁器、ガラス製品、足袋靴(地下足袋及運動靴等)。試に船の着いた次の日の朝早く行つてごらん、どの箱もどの箱も大抵 made in Japan と書いてある。なければ箱の内側に「○○○製材所」などあるし、これも日本製だ。あれも日本品だと思へば嬉しくて嬉しくてたまらない。

話は元にかへつて船中に於けるドリアンのホーデコックの商人である。今彼等の買入れた商品は綿布であり、地下足袋である。勿論日本製の。そこで彼等は皆いふ「日本品はとても良くて安い、一體日本の工場はどんなに大きいだらう。自分は是非一度日本へ行つて見たい。東京大阪の工場を見學したい、船賃はどの位必要か、入國税は幾らか、自分は馬來語しか話せないが日本で馬來語は通用するか」など、中々熱心である。彼等は東洋の一小國日本がかくも立派な製品を、どしどし當地方に輸出することに驚嘆してゐる。

談たま／＼滿洲事件に及ぶと彼等は集まり來つて戰況を聞きたがる。今日馬來人の日本人に對する挨拶は「いかにです?」我々は知らぬふりをして「何が」といふと、きまつて「滿洲戦争はどうなつたのです」「支那人は幾人位死んだのです」といふ。彼等は戦争の話となると夢中になる。本庄中將がどうの、植田中將がどうのと皆知つてゐる。彼等の中には商品のレッテルや古新聞などの東郷大將や乃木大將の肖像なども丁寧にしまつて置く熱心家もある。今は本庄中將が第一である。中將の名前は知らないものはない。日支事件に於ける皇軍の大勝利は馬來人に帝國の存在をより強く知らしめた。どこへ行つても馬來人は我々に對して「日本は Honor State だ」(馬來語のナン・ハイワンの意)と、それにはオセジもあるうが日本品が絶體多數であること日支事件の大勝利とは必然的に日本を世界第一に祭りあげてしまつた。我々として實に鼻が高い。

シヤとバカンバルの中間から南へ小さな支流があるが、これをサンパン(三人乗りの丸木船)で二日もさかのぼると世界でも有名な猛獸毒蛇の棲むフロハンに着く。先づ第一はマラリア蚊であるが、その大きさはアブから小蟬ほどもあるといふこと、

日中仕事をするにもボブリンや其他立派な布で蚊帳を作る。虎、象、鯨何でも御座れ、大蛇に至つては丸さ一米以上長さ九米のものから丸さ五十糎、長さ二米の川蛇など幾らでも居る。蛇の皮は私の目下在住するバカンバル市の一大産物である。總てパタピアへ送られる。併しなにもプロラハシに限つたことはない、今我々の通過しつゝある兩岸の處女林は皆悉く虎、大蛇などの運動場である。月夜の晩に大倉農場に遊べば對岸の森の中から虎の猛然たるうなり聲を思ふ存分に聞くことは出来るし、ジャワ人の蛇取り屋が丸さ七十糎もある大蛇を賣りに来る。又先日、農場の竹内氏の處に虎がいつ來て、支那人の下男の寝てゐる二尺ばかりの處へ迫つたが犬に吠へられたため、遂にその犬をサラつて逃げてしまつた。それから四五回人家に近づき、犬二疋をくわへて行つた。私の住んで居るバカンバルの町の四、五町先は虎の出沒するところとして夜は人づ子一人通らない。これ等の話は何れ改めて御知らせしやう。

## 武藏高校の印象

湯本聰一郎

暫らく音信絶えて、危ぶく單なる記憶の中の一つとならうとしてゐた熊中生活を此の機會に再び偲び、或る雰圍氣に包まれて筆を取つた。そして又新しい第三者の氣持で過去一學期半の武高生活を想起して次の文を書き記した。

これが幾分とも諸君の高校に對する考へに參考となる所があればそれで満足である。僕は入學から今までは相當物に對しての考へ方に變遷を來してゐると思ふ。入學當時は誰も同じ様に嬉しきで一杯である。自分は人生の一階段を一つ高く登る事が出来たんだ等と考へる餘裕も無い程單純な喜びで一杯になつてゐる。然し今になつてあの時もつと眞面目な氣持で自分を考へてゐたと思つてゐる。僕はどの學校へ合格出来たとしても更に一年中學生活をして置きたかつた。さうすればもつとはつきり中學生活の意義を掴む事が出来たらうに、そして更に深い印象が腦裏に刻されてゐたかもしれない。こんな考へが起ると何時も「進歩的であれ。」なんと言ふ言葉を引出して來て不満を壓へてゐる。入學の喜びの餘波を受けた一學期の半ば頃迄は實にのんなれ生活を

を送つてしまふ。そのうち嬉しい等と言ふ餘裕は無くなつてくる。そして自分の一生の一部分である高校生活を明確に意識した時、今までの實に浮ついた表面的な生活が殘念でたまらなくなつて來る。自分の高校生活をこんな風に過して、それが重なつて行つたならば結局、一人の社會の平凡の人となり終へてしまはねばならない。人の即ち自分の生を得た目的も知らず又考へもしないで死んで了ふ者の不憐さが思はれる。こんな哲學めいた事を自分で解決じやうとした結果、色々の本をあさり讀んだり、又或時は總てを没却して勉強に走つたりする。思想的に確固たる基礎を得るまでの悶えと言はふか、未だに宇宙の自己の小さな存在に啞然とする事が屢々である。

次に少し校内の事を報告的に書いて見たいと思ふ。

本校は尋常科四年、高等科三年の七年制高校である。毎年高等科一年の缺員を補ふのに一般の中學校から六七名取る。そして校内に於て途中からはいつた者と尋常科から來た者との間には色々面白い點がある。先づ前者の方が一般に意氣が盛で、總ての方面に奮つてゐる。それは自分は——中學校を代表してゐるのだと言ふ自確も手傳つてゐるだらう。尋常科から來た者は少しも所謂高校氣質を持つてゐない。丁度中學生と同じ様だ。七年制の爲、大きい者も小さい者も一緒の學校内に顔を會せるので自然さうなるのだらう。

校内には大體二つの傾向があるやうだ。一つは幾分他の高校に對して憧憬の眼を向ける者、他は何處までも實實的な價值ある高校たらしめんとする者、而してこれは決して表面的にあらはれてはゐない。

又文科理科の區別も著しい。尋常四年までは何の區別も無くして來た者が高等科一年になつた瞬間から判然たる區別をつけて自ら任じてゐる。其の問題は文科に屬すべきだと考へると理科の者は頭から取合はない。其の爲に理科タイプや文科タイプが出る位だ。これは更に高處から眺めた時、良くない事は分り切つてゐる。片寄つた人間を自ら求めてゐるかの様だ。如何に分業の世でも人間性にまでは適應出來ない。

試験の形態は尋常科は普通の中學の様に考查制度で高等科は學期試験制度である。臨時試験はあつても一回位である（語學は除く）。そして平生は各自參考書による自由研究で學科以外の趣味の研究をしてゐる者も澤山ある。一般に研究心は盛んである。

學校の設備は略々完全である。本講舎以外に講堂購買部、集會所（食堂）、雨天體操場、尋常科及び高等科の寮、劍道場等が別

々に建てられてある。又本校舎四階目の屋上には天體觀測所があつて其の部員が研究してゐる。運動としては野球を除く他の普通の運動は殆ど行はれてゐる。そして設備も良い。水泳等は目新しいものだらう。一番盛な運動は蹴球、最近籠球が好成績を示して來た。又剣道も強く今年の全國高等學校大會には決勝戦まで行つたとの事である。此の様に運動も相當盛であるが選手制度は無い。これは教頭が極力アメリカ的の應援を嫌ふ事に原因するのだらう。運動をやつてゐる者の中に、學業と運動と何れを主としてゐるのか分らない様な者は無い。そして學校でも許してゐない。あくまで體育の爲の、更に進んでも運動精神を知る爲の運動でなくてはならない。

體育に關しては相當注意も拂はれてゐるし、又月々取る體格の成績統計によつて見ても他の學校に比して決して劣つてはゐないさうだが、途中で休學する者もかなりある。眞面目な自分の體に對する關心を以てやらなければ途中で挫折する恐れがある。之は他の學校も同じであらう。

此の學校には高等科の寮が二棟ある。雙桂寮及び愛日寮が之であるが普通の高校の寮とは全然趣を異にしてゐる。二寮が各々異なつた理想の下に家庭的融合を計らうとしてゐるのが主な點であらう。其の爲の寮生で其の大部分は地方出身の者で占められてゐる。僕も其の一人である爲、通學生との接觸は極めて少ない。其の代りまでお互ひ寮生と觸れる。家を離れても何の寂寥も感ぜぬ位だ。學校で學んだものより、或はより多くのものを僕は寮生活から得たかもしれない。意氣に感ずるものも今だ。若い者同志だけの集りの生活は愉快である。

學校の理想は僕の感じてゐる範圍では日本精神に立脚した英國風の紳士の涵養であると思ふ。これは種々な學校の中でも特色を持つ本校の所以では無い。

以上の如く頭に浮んだ事を取りとめ無く書き記したが勿論之が武藏高校の全體ではない。主觀的な此の感じは又何時變るかも知れないが、特別と目立つた特長のある本校であるから其の一端位は擧ぐ事が出来たと思ふ。

受験勉強の酬、此の文で幾分氣をそがれた者があつたらお詫びして置く。お互に何處にあつても眞に自己の一生の一部として價值づけて行き度い。最後に諸君の奮闘を祈つて筆を擱く。



## 見學

### 府立二中見學記

五 乙 和久井良一

九月十四日、文藝部員及四五年組長十四名は里見先生御指揮の下に東京府立一中を見學した。なにしろ文藝部員の縣外派遣といふのは之が最初の事であり、其の朝の新聞には二段抜きでかゝと報じてあるので聊かくすつた様な氣持である。

幸ひ雨も晴れ、自動車三臺に分乗して急いだが既に一時限は始業中で第二時限からといふ譯で一同應接室で休憩した。すつかり落着いて輕口も出る頃時間割も決定して愈々二時限の修身から授業を受ける事になった。時間割は左の通りである。

修身(岡村)、武道(渡邊・佐藤)、英語(岡田)、化學(大黒)(敬稱略) 修身の岡村先生は甘樂先生に後姿がそっくり。全體の感じは後藤靜香先生によく似て居られる。總て岡村先生に導かれて五年生十名は五甲の教室へ這入つた。簡單明瞭にしてユーモアに富んだ御紹介で後の席に着いた。机は四十八で黒板は一枚きりである。愈々此からと我々は全神經を緊張させて一事も見逃すまい、聞き逃すまいとする。授業は良心(Conscience)に就いてあつて可成深く研究して居た。特に總べての言葉に英語を附し、種々の説明に英語のフレーズを用ひて受験なるものに

對して意を拂つて居る事の非常なのを知つた。そして驚嘆した事に授業中先生の聲が響いて、先生の身體と生徒の鉛筆が動く外は無駄な事がされて居ない。實に靜肅だ。絶対に身體が動かない、私語が聞えない。眞劍味の籠つた授業だつた。然し流石に修身の時間だと見えて後の方ではスタンダードをひいたり、靜肅に幾何の問題を研究して居る受験生もあつた様に見受けられた。が最初の岡村先生の御言葉にあつた様に良い所だけ見て悪い所を見る必要は毫もないのだ。ベルで授業が終つて教室を出た。では休憩時間に過番の事も書かう。一中には組長制度がなく純然たる過番制度である。全體を香の順に大・中・小と三に分けて各一人宛都合三名が一組となる。教室の出入は總べて二人の過番に依つて指揮され、他の一人は常に教室に残る。始業のベルが鳴ると運動場の指定位置に整列し、前後に一人宛附いて教室へ導く。廊下で敬禮して教室へ這入る。終ると始業の際の逆をして解散する。であるから生徒は前記過番一名を除いては悉く運動場なり廊下なりに出る。此の點大いに學ぶべきであると思つた。それに一中の生徒は教室内を除いた總べての時に必ず帽子を被つて居る。運動場に於て教官に無帽の我等を注意されたのは赤面の至りであつた。

三時限が始つた。武道である。勝手が判らない儘に後について武道場へ行つた。皆道衣に更へて居るが、折角一中迄見學に來たのだから唯見るだけでは馬鹿らしいと思ひ武道の先生に御頼みして一同練習をする様道衣の御世話をお願いした。二三足りなかつたが大體間に合ひ、黒帯を借りて練習する事になつた。見渡した所、黒帯が一人、白帯が五六人、残りには赤と紫の帯だつた。渡邊先生は生徒の練習振りを、特に我等熊中生の練習振りをよく見て居られた様だつた。何しろ武道部のチャンといふ譯でなし、平生餘り熱心によつても居ないので危険な事甚しいが、之で熊

中の柔道部の眞價を定められる譯でもなし、授業參觀なのであるから恐るゝに足らずとありもせぬ力を出して奮闘した。僕は二人練習させて貰つたが、あんなに汗を出した練習は始めてと言ひ得る。剣道の方も相當猛烈に暴れた様に聞いた。お蔭で次の英語の時間には汗も乾くし少々睡氣もさして苦しかった。練習中渡邊先生は僕に西村先生の事をお聞きになつた。武道場は熊中のそれより小さい。周囲の壁が、武者窓で育つて来た身には一寸重苦しくも感じたし、又熊中の様に神棚の無いのは實に淋しかった。苟も國技を修める以上、其處に武神を祭るのが正當であると思ふ。英語の時間は前述した様に非常に苦しかった。此の時間感じた事を述べれば其は一中生徒諸君の氣質である。豫定では各人が同じ机で教科書を貸して貰つて細かに見學する積りだつたのであるが、人員の多い關係や其の他の理由で一組に固まつて唯授業を聴くだけであつた。後列の生徒諸君は僕達に、自分の教科書を其の時間學ぶ箇所を指示して貸して呉れた。事は唯其れだけであるが田舎の學校の生徒には仲々之が出来ない。言へば何だそんな事かと否定するが、いざ實行となると何となく氣恥しくなつてもじ／＼してしまふのが僕達だ。如何にも親し氣に動作するのを見ては感服せざるを得ない。讀本は手頃なエッセイ物で或る雜誌の統計に依ると、入試問題出題率の第一の讀本は其の「Popular Essays for Advanced Student」とかいふ本で第二は僕達の「Victory Side Readers」が位してゐる。練習が平均して良くやつてあつて解釋なども熟讀玩味された結果らしい巧なものだつた。見學後岡田先生も、生徒は一樣に良く練習して來るので授業も捗り、其の點では先生に少しも手数を掛けなくて良いと幾分誇らし氣に話されたが成程と思つた。授業は生徒の解釋、先生の解釋、次に先生の後について全部がリーダーイングをやつて居た。質問する者は殆ど皆無で他の授業に於ても其の様に感ぜられた。

勉強したくない者は其の儘置き去りにして進んで行く方針であるとか。英語の授業が済んでから運動場に出る。三方校舎で圍まれ、丁度四角をなしアスファルトである。修身の時間に教練や體操の號令が勇ましく明瞭に聞えたのも其の爲であらう。校舎もコンクリートである關係からか、生徒は皆茶色の運動靴様の物を履いて居た。然し綺麗だ。教室でも鉛筆の削屑一つ見なかつたし、我が校の教室の床や運動場と思ひ較べて雲泥の差のあるのを知つた。教室の整頓はやれば出来るのであるから成る可く清潔にしたいと思つた。

化學の時間には雨が降り出し、我々は實驗室で授業を受けた。八人宛の所に割り込んで斜に先生の講義を聴いた。矢張り其處此處で雨の事を寫眞の話などして居たのは何處の學校でも同じ様だ。金屬の製法の所をやつて居た。もう以前に佐藤先生にみづちり教へられた  $Zn, Cu, Mn, Hg$  等を教科書に述べてある通り説明するに過ぎなかつた。

放課後、英語の岡田先生が、校長先生が文部省へ行かれた爲代つて校内諸設備を案内説明され併せて我々の質問に應じられた。校内諸設備に於ては、先づ一千数百人を收容し得る大講堂を羨しく思つた。理化、博物及び實驗室等完備されてあつた。ガラス窓の破れ目からは新講事堂の雄姿がうかがへた。雨天體操場も立派だつた。我が校と異なるのは便所が教室と接して居る事であまり香しい設備ではない。要するに諸設備は整ひ校舎は如何に立派であつても、自然に恵まれた我が校とは比較す可くもない。文化の中心に在り、便利なる事は非常なものであるが此の點到底及びもつかない。幸福なる熊中諸君よ。君等はあまりにも此の豊富なる自然に浸り過ぎて其の有難味を忘却してはゐないだらうか。惟、遺憾なのは刺戟が少い爲に少々奮發心に缺けて居る事であらう。

一中を見學して我々は幾多の美點を學んだ。而して我が熊中の美點を

もより多く發見した。我々は一中の美點・長所を我が熊中のものとした。そして我が長所は益々發展せしめ度いと思ふ。最後に一中見學諸感を總括しよう。

一、生徒は一般に猛勉する事。大いに學ぶ可き事である。

一、授業中極めて靜肅・謹聴。教室に於て餘に朗か過ぎる我々の驚異とする所である。然し其の一面に濃潤たる元氣を缺いて居る様に見受けられた。我等の質實剛健は大いに誇る可きである。

二、親切で氣が利いてゐる。之は東京の人であり所謂良家の子弟の學校であるから無理もないが眞似しても可なりと思ふ。

一、自然に惠まれざる彼等は十分休みを充分利用する。自然に惠まれた我等は更に利用す可きである。

以上舉げたがまだ美點はあるかも知れない。たつた二日の見學に於て餘り無難作に語る事は避け度いと思ふ。唯我々は此の見學に依つて我々の長所を充分認識して誇らなければならぬ。一中生は四年から高校へ五十人も入學許可されると云ふ。其の努力は勿論賞讃に値するが、單に高校入試合格を以て成功とは言ひ得ない。成程彼等は秀才にして我々田舎者は鈍才であるかも知れない。然し彼等が所謂秀才なる儘に學校を出て就職して、秀才なる平凡生活を終るに對して、如何に我々鈍才が前途有望である事か。鈍才なるが故に英雄にも國士にも將た氣狂ひにもなり得る我々の前途の如何に興味深き。

とまれ、質實剛健を校訓とする我等は、自然に惠まれた好條件の下にある我等は、唯更に一歩精進しなければならぬ。勉學に運動に、縣下隨一、延いては關東第一の榮冠を挂るのも遠き將來ではあるまい。唯努力あるのみである。

### 觀兵式參觀の感想

五 甲 佐川 正 久

東軍の風雲漸く収まり、皇軍の武勳いよいよ輝く昭和七年四月二十九日天長の佳辰を迎へて、意義ある恒例觀兵式は代々木原頭にて舉行された。此の日我等熊谷中學五年生は、柳田先生及び諸先生方の指導の許に兵營宿泊を行ひ、そして榮えある此の陸軍觀兵式拜觀の機會を得たのである。大内山のほとり千鳥ヶ淵に聳える近衛第一、第二聯隊、及び第三、第四、第一師團の精銳、合計一萬四千は青葉蕨る代々木原頭に整列し、我等も一隅に整列し陛下御臨場を御待ち申し上げた。やがて八時三十分囂々たる喇叭の音が教練兵場を壓して響き渡つた。おゝ、その音、我はそれを忘れる事が出来ない。陛下は第二公式園地より御馬車を召れて御臨場あらせられた。九時白馬を御召し英委張爽、天皇旗を先頭我等の拜觀してゐる反對の方から御開兵を始められた。折しも春光さんさんとして地上に流れ、周りの新緑之に映發して見え、カーキ色周りをつつみ、美しき中に遠く囂々たるラッパの音がきこえ、陛下の御愛馬の白きが一點の如く拜された。

南を臨んだ時、おゝ、樹の間を通して名譽富士が青空にくつきりと見えるではないか、その壯麗雄大、いはん方なしであつた。忽ち私の頭には次の句が思ひ出された。

元日や一系の天子富士の山

今日は元旦ではない。併し今日は天長の佳辰である。祝日である。この日に瑞穂の國の誇を、最大の誇りを二つ迄拜む事が出来るとは。

やがて陛下の御英姿は益々明らかに、段々此方へ近づき遊ばされた。畏れ多くも陛下には各聯隊に有難き舉手の禮を賜はつて居るではないか。各聯隊の區分にお出になるとラッパはなり響き、聯隊長の號令がか

かる。それもきこえる様になつた。次第／＼に天皇旗は近づいて来る。その時の氣持、今將に陛下を拜せむとする心の準備、それは何と形容してよいかわからぬ。天皇旗は約我等の三十間前に来た。春風にひらめいてゐる眞紅の中の金の御紋章の威光。陛下を眞近に拜する瞬間、陸軍様式大元帥の御正装に功一級金鷄勳章本綬を御佩用遊ばされ、しづ／＼とお歩みなさる御英姿、あゝ、之こそ日本人のみがもつ感激、我等五年生一同感涙に咽んだ。つづいて皇族方、陸軍の重臣外國武官等が後につづいて御閱兵は終つた。

次は陸軍戸山學校軍樂隊の吹奏輕快なる「行進曲」につれて、近衛歩兵第一聯隊を先頭に、各聯隊とも光輝有る軍旗をかざして御前近く勇壯なる分列行進、我々は唯その歩調の正しさを、整つた小隊、中隊、大隊等に目を見張るばかりだつた。

陛下には御愛馬を止めさせられ又々々々有難い御會釋を賜り、我々否、一萬數千の兵士及び拜觀者は感激の涙を拂ふ事が出来なかつた。

折しも南方上空に、爆音も勇しく所澤飛行隊の甲式四型戦闘機、八八式偵察機、乙式一型偵察機からなる我が空軍の精銳五十機、降りそぐ陽光に銀翼を輝かして飛來、式場上空に於て、見事な空中分列式を行つた。地上には歩兵終り、野砲兵、馬のひいた大砲、騎兵、牽引用自動車、の引いた大砲の勇ましき行進、土煙を揚げて陛下の御馬前を行進し午前十一時、分列行進終了し、陛下にはラッパの音軍樂隊の奏する「君が代」吹奏裡に、十一時五分宮城に還御遊ばされた。

こうして我等は觀兵式拜觀の榮を得たのである。何事も申すのも胸がいっぱいになつてしまつて、水蒸の跡を止むことが出来ない。陛下は一萬數千の忠勇並びなき兵士を御閱兵なされて、どんなに御力強く思召したのであらう。

一萬數千の將兵も又、一身を捨てても陛下の御爲に盡すと各自の心に誓つたに違ひない。

我等五年生は此の軍隊宿泊に際して、かくも尊い經驗を得たのである。

### 兵營見學感想

五 乙 腰塚 武彦

自分は、前々から色々と兵營の事について聞いてゐたが、漠然と頭に残るものは、軍隊とは嚴格なるもの、といふ觀念のみであつた。そしてこゝに五年生として兵營見學を舉行し、少なからず、得る處があつた。「百聞は一見に如かず。」自分は實際に軍隊とは何であるかを知り得た。即ち、前に嚴格過ぎると思像した事が、愉快である、といふ體驗を得るに至つた。

先づ我等一行が、聯隊内に足を一步踏み入れた時、早速先輩等の言はれた、所謂軍隊の敬禮なるものを見た。七八人の兵士が營門の傍のベンチに腰掛けて、談笑して居つた時、我等が隊伍を整へ、歩調を揃へて、營門を入つて行つた。と、「氣を着け。」の號令と同時に、ばつと腰を上げ、皆一齊に丸山先生に對して、舉手の禮を取つた。我等はその態度の活潑にして、嚴肅なのに、思はず驚異の眼を見張つた。

二三人用があつて、營庭を歩いてゐる時も、常に自然と、歩調が合つてゐる。そして目上の者に會ふと、直に不動の姿勢を取つて、舉手注目なす。又コソ／＼と足並揃へて、通り過ぎて行く。敬禮は決して、答禮を求める爲のものではない。たとひ、上官が知らうと、知るまいと、近くとも、近くなくとも、そんなことには一切頓着せず、必ず嚴正な、表裏のない敬禮を、行ふのである。我等はともすれば、答禮を求めんが爲に、禮をする場合がある。それは眞の敬禮ではない。軍隊では眞に目上を敬するの念を持つてゐるから、後姿であらうが、執務中であらうが、

いつも同じ様に、誠意の籠つた敬禮を行ふ。各自が、平生の自分達のなすごまかしの敬禮を取つと共に、この軍人の精神を、見做つたならば、どんなにか學校内の美しさを増すことであらうと、つく／＼感じた。

實彈射撃後、機關銃及び曲射砲の教練を見せて頂いた。その教練の烈しきは、實際に見た者で無くては、とても想像することは出来ないであらう。敏速にして規律正しい事は、いふまでもなく、その態度の眞剣なる、實戰と、少しも違はないであらうと、思はれ、言ひ知れぬ感激と敬禮の念に打たれ、これでこそ、我軍隊が、名實共に、世界無比であるのだと、強き自信と感激に満ちたのであつた。教練見學後の集合は、全く今迄と打つて變つて、秩序整然たるものがあつた。

軍隊の飯とは、どんなものか。種々先輩からも聞いてゐたが、實際に食べて見なくては判らぬ。我等は、一種の興味と研究心を以て、食事の時間待った。やがて炊事當番の連で來た、飯やお茶を、各班毎に分擔して、各新兵が、シャッ一枚で、食器へ盛り始めた。食器の大きいのに驚いてゐると、上等兵の方が、「學生君、食べなさい」と、おつしやつた。腹の空いてゐた我々は、早速「頂きます。」といつて箸を取つた。

と、その瞬間、大聲一番、「一ッ軍人ハ」と御勸諭を拜讀し始めた。「あれが先輩の言はれた食前の、御勸諭の拜讀か」と兵士の態度を見れば、皆不動の姿勢で、確固たる音聲を張り上げ、眞剣味に溢れてゐる。我等は、異様な感激に打たれた。やがて、拜讀し終つて、「頂きます。」の語で、皆一齊に箸を握る。我等も箸を取り直した。飯は、麥と米の半々位で、腹が空いてゐたので、非常にうまかつた。食事中、用事があつて、歸つて來た兵士も、一人で御勸諭の拜讀を、堂々とやつて、而る後箸を取る。食べ切れないと言つて、残したものがあつたが、自分は勿體無く思つて、一粒餘さず、奇麗に食した。食事中兵士から「演習後の食事で

は、この食器で三杯も食べる者が居るよ。」と聞いて、元氣に溢れた軍隊生活を羨ましく思つた。

就寢前になると、點呼である。忽の間に班内は、整頓され、テーブルをさしはさみ二列に並ぶ。整頓後の兵士の番號の活潑で、聲の大きいのに、度胸を抜かれた。やがて班長殿が來られ、敬禮後、種々の命令注意がある。その間、實に靜肅で、動作が總てきび／＼してゐる。

自分は出發前から、少し風氣味で、その上疲れてゐたので、兵士よりも早く床に就いたが、頭が痛んで、どうしても眠れず、明日になったらどうしようと思つた。轉々として寢返りをした。しばらくして、とろ／＼とした時、突然不寢番の兵士と友人とが、自分の枕もとで話をしてゐるのを聞いた。その時自分は、びつ／＼汗をかいてゐた。兵士は、「大分熱がある。」と言つて、首へ巻いて置いた手拭を取り、冷たい水に浸し、それを熱した額の上に、置いて呉れ、「大丈夫か、じつとして寢て居れ、その中に熱が冷めるからな。」といつて、次の班へ廻つて行つた。

自分は、その足音の遠くなるのも聞きながら、有難さに胸が一杯になつて、涙の出るのをじつと堪へて、そのまゝ眠に入つた。思ふに、我が家を離れた時、他人に親切にされる程、感謝の念に、溢れる事はあるまい。況や病氣の際は猶更である。時々眼が覺めたが、その時はいつも、不寢番の兵士が友人が、手拭を冷して呉れたのであつて、一時間交替の不寢番が、皆この様にして呉れたのであつた。友人の計らひで、自分の不寢番の時間になつても起されず、そのまゝ眠り續けた。恐らく印象深い兵營宿泊の、その中でも、あの時の友人と兵士等の親切は、自分一生の、忘れる事の出来ない感謝として、記憶に残るであらう。

翌朝は前夜の雨も、なごりなく晴れて、四月二十九日、天長節、朝風は氣持よく、我等の頬を撫でた。先晩の熱もすっかり消へて、頭痛もし

なくなつた。この良き日に、生れて初めての、大観兵式を拜観出来ると思ふと、すつかり嬉しくなつて了つた。洗面後、同じ班に寝た友人と、兵營の外堤に立ち、將に日輪の登らんとする前の、静かな大東京を俯瞰し、そよ吹く春風に、さはやかな空気を腹一杯吸ひ込んだ時、これが昨夜の自分であるかと疑はれる程元氣に満ちた。

朝食後、營庭の一隅に並び、整然たる聯隊の行動を目撃し、今更ながら、我等の貧弱なる教練を恥しく思つた。聯隊は、光輝ある歴史を以て飾られたる軍旗を先頭に、觀兵式に参加すべく、隊伍堂々と出發した。我等は、飯田橋驛より、電車にて、代々木練兵場に向つた。

以上は大體兵營宿泊の内容である。軍隊生活とは、誰かと言つた様に、「人間を造る所である。」とつくづく實感した。そして兵士の動作は、總てが彼の班内にはつてある。先づ爾より始めよ。表裏なく、眞剣味を以て、輕快に。のそれであり、精神は、五箇條の御勅諭であるといひ得る。盛大なる代々木練兵場の、大觀兵式も、我等の最も記憶すべき事として、これを他紙に記し、かくして我等の收穫多かりし兵營見學も終り、無事歸校の途に就いたのである。

# 一、兵營見學感想

五 丙 吉 田 知 二

營門を過ぎて一步隊内に踏み入るや、我等は一種異様な感に打たれた。何處となくかた苦しい。凡ての事が何一つとして嚴格でないものはない。將兵の舉動といひ、兵令内外の整頓といひ、何となく四角張つてゐて初めは幾分恐ろしい様な感がした。殊に敬禮の嚴重な事は我等の目を引いた。あちらでも、こちらでも、皆眞面目な顔をして舉手注目を行つてゐる。我等はこれを見て寧ろ不思議に思ふ位であつた。上官が見て居ようが、見て居まいが、何の變りもなく敬禮する。我等はその誠實さに感激

せざるを得なかつたのである。

この敬の精神があつてこそ上官は又、愛の心を以て兵卒に對するのである。而してこれ等相互間の愛敬は益々我軍隊の團結の精神を堅固に築き上げるに相違ない。凡て大事を爲すのに團結ほど大切な事はない。彼の目清・日露の雨役に於て、我軍の優勢なる敵軍を撃破せし所のものは、果して何であらうか。實にこれ大和魂の團結に外ならないのである。苟くも營門をくぐつた以上、軍隊の團結の精神の如何に大なるかに驚歎しない者があらうか。此の精神があつてこそ、眞に日本帝國の軍人である。實に此の美點こそ世界に誇つて恥ぢないと思ふ。

我等は之を手本として、愛敬の精神を涵養し、いよく團結を堅くして以て校風美化の大事に當らうではないか。

# 二、觀兵式拜觀

前夜の小雨も名残なく晴れて、木々の緑は一入色あざやかである。我等は雨後の爽やかな空気を肌と感じながら、代々木原へと向つた。式場に着いたのは八時過ぎであつたらう。最早愛列大將の指揮する近衛、第一兩師團の精銳約一萬四千は列を正して今や遅しと式の始まるのを待つてゐる。

やがて九時頃になると、陛下は御愛馬白雲に召され、薫風にひるがへる天皇旗を先頭に、各兵科の御閱兵をお始め遊ばされた。雪白なる陛下の御馬は一層その御威嚴をお増しになるかの如く思はれたのである。

下の御馬は一層その御威嚴をお増しになるかの如く思はれたのである。間もなく我等の前に御英姿をお現はしになり、我等は目迎目送を申し上げた。その時おそれ多くも陛下は御會釋を賜つた。これを見た我等は、その有難き御心に唯感激に咽ぶばかりであつた。陛下は御閱兵を終へさせられ、玉座の前に愛馬を止めさせ給ふと、勇壯な軍樂隊の行進曲につ

れて愛列大將の指揮の下に各部隊は名譽ある軍旗をかざして分列行進を開始した。この時陛下には有難くも一々御會釋を賜つたのである。さぞかし參加の將士は感激に咽んだ事であらう。傍から拜觀してた我さへ次第に首の垂れるのを覺えた。

我々の如き草莽の臣に至るまで陛下は愛して下さるのだ。我等はこれに感激して、いよく忠君愛國の精神を固くし、以て陛下に立派なる御奉公をしなければならぬ。

# 愛國號命名式參觀等

五 甲 長 島 芳 雄

六月十九日早朝、校長先生以下七名の一行は熊谷より命名式の式場所澤へと向ひました。途中原宿に降りて明治神宮に參拜致しましたが、時間がありましたので東京日日新聞社參觀にと圓タクを拾ひました。新聞社では色々見學致しましたが、之は簡単に記します。先づ地下室で巻取紙を見ましたが、その一本の長さは一里三十七町、新聞にして二萬五千枚、重量百四十貫との事でした。

次には輪轉機を見ましたが、生憎日曜日の午前だつたので廻轉してありませんでした。それから三階で印刷された新聞の上つてくる處を見、寫眞を寫眞板にする説明を聞きましたが、鋳鉛板を腐蝕させてするとの事でした。又日日新聞社で使用してゐる紙型はドライマツト即乾性紙型といふのでしたが、一寸見た處、觸れた處護謄のやうな氣がしました。そして此の乾性紙型の原料は日本では出来ないので、獨逸から輸入するのだと云ふ事でした。此の事を聞いて私は残念でした。私達の任務は此の狀態を逆轉させるにあると思ひました。それから傳書箱・スカイサイン等を見ましたが、新聞社の事は此れ位にして置きます。最後に記念撮影をして頂きましたが、新聞社は個人でも歡迎するのですから、機會があつ

たら行つた方がよいと思ひます。

次は命名式ですが、僅に人の間から見ることが出来た位でしたから、此の事を簡単に記します。式は一時十五分頃、賀茂神社の宮司が祭主となつて始められました。第一に修辭をし、次いで降神。獻饌祝詞の諸儀がありました。祝詞は始ど聞えませんでした。國防獻品取扱委員長の經過報告が終ると、やがて荒木陸相は各獻納者より獻納目録を受納してから、命名しました。荒木陸相の命名の詞もよく分りませんでした。愛國第二十三號中學生號と命名す。と言ふのはよく聴きました。次に文部大臣・東京商工會議所會頭の祝辭、祭主・探險者代表・愛國少佐の禮拜撤饌・昇神の諸儀があつてから萬歳を三唱し、愈々飛行機の離陸となりました。

此の時命名された愛國機は六機で、向つて右から第二十二號愛國生命號・第二十三號我等の中學生號・第二十四號・三井鐵山號・第三十號女學生號・第三十一號兒童號・第三十七號小布施號で、其の二機は九一式戰闘機でした。私はこれを見て我が空軍の新精銳を喜ぶと共に、我が空軍の弱勢なのを思はずには居られませんでした。

やがてプロペラは之に廻轉力をつける自動車によつて、兒童號のから廻轉し始め、五番目に我等の八八式輕爆擊機のプロペラも廻轉し始めました。するとその後から九一らしいのが一機、あまり注意を引かれずに急角度に飛び揚りました。さて間もなくしてプロペラの廻轉力は加はり、のろ／＼と兒童號からでしたか、動き始めて百何十度か廻つて尾翼を私達に向けて一列に並びました。勿論草はずつと靡いてゐます。六機は揃つて滑走始めました。砂煙りを上げて、遂に我等の愛國機は揃つて飛び揚り、彼方の空を目掛けて見る／＼小さくなつて行きました。

すると急に頭上で爆音が聞えました。目を見張りましたが見えません。

可成り高空で先刻の九一式が何かやつてゐる様でした。仕方なく再び愛國機の方に目を轉ずると、間もなく廻り始めて、遂に私達の頭上に来ました。八八式四機を中にした飛行振りは一絲亂れず實に見事でした。と九一の二機は他からさつと分れ、再び互に今迄の航路から別の方向に同じ角度に分れました。愈々愛國機の高等飛行は始まりました。又先刻の一機も漸く見えました。此は可成りの高空と光線の具合によつて薄くしか見えませんでした。然し維條を始として色々な事をしてゐるのが見受けられました。兎に角三機が別々にやつてゐるのですから、仕方なく一機を中心として見ました。ひら／＼と落ちてくる維條・空中滑走・背面飛行・横轉・反轉・急角度の上昇・宙返り・斜宙返り・垂直旋回・逆宙返り等自由自在にやる様は何とも云ひやうがありません。此を自由自在と云はなくては他に云ふものがないと思ひました。

此に就いて圖書部に航空の驚異がありますから、参考にされたいと思ひます。間もなく三機は入り亂れの形となりましたが、此も見事でした。くわしく述べたいのですが、連も私のやうな者には出来ません。さて、愛國機は九一から始まつて、やがて全部着陸しましたが、私達は飛行機を見にと中央格納庫の方に行きました。格納庫の前に六機並んでありましたが、此は八八式偵察機で、私達のと違つてゐるのは、一寸見た所ですが、機首の方でした。私達のは圓いのですが、此等のは丁度自動車の前の方だと思へばよいです。それからこの日の六機の方に行きましたが、九一式には布が覆せてありませんでした。次に私達は乙式一型偵察機を見ましたが、此はもう廢機に近い型で、木製布張りのやうでしに。次いで甲式四型戦闘機・乙式一型練習機を見て中央格納庫を一巡しました。

こゝで特筆すべきは、校長先生と浦中の校長先生とが八八式偵察機に

乗られた事です。愛國機には誰も乗せなかつたのです。私達が中央格納庫を見てゐる時、何機か入り亂れて飛んでゐましたが、その内の一機に乗つてゐられたのでした。始め離陸の前私達が八八式偵察機を見に行つてた時手を舉げて合図されたのださうですが、氣が付かなかつたのでした。何でも離陸の時を除いては墨の上に居る氣持で飛んでゐるやうな氣はなく、又村山貯水池の上空を飛んだ時などは逆も氣持よかつたこの事でした。

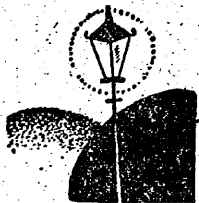
さて終に述べたいのは時間に就いてです。時の記念日去つて未だ印象深い時ですが、この日は全く奇蹟的でした。行きもさうでしたが、歸りには所澤では、電車が既に止つてゐてそれにやつと乗り、高田の馬場に着くと、すぐ池袋行きが着きました。池袋では二三分待ちましたが、赤羽では汽車と電車が同時に着いて、危く間に合つたのでした。全くこの日程有効に時を使つた事はありませんでした。時といふものを頭にしみ込ませて利用する事は必要だと思ひます。

これで筆を指します。

## 趣味

### 趣味の養成

五甲 本山 正三



「文明を進める爲に學問をするのだ。」と聞いたが本當だらうか。果して眞であつても、今になつて見れば自分は何も爲さず、只漫然と日を送つたのみ、云はば日月閑あり過ぎた位。長い様で過去を現在回顧して始めて、時日、年月の経つのが早いと云ふ事を痛感する。決して来る可き將來の機會を豫定せず毎日々々務めるのが本當だ。少くとも今日の仕事は、その日に完了し度い。

今になつて自分の過失が、無駄に過した、若い時代が、中學校の生活が恥かしく癢に障る位だ。

然しながら、勉強を全然しなかつたとも云へない。少しはしたが、その時々の學年に應じての努力が他の諸君に比して、爲す仕事の量が少なくて早く云へば、勉強の眞剣さを知らない。自分の存在が此處に披瀝されて了つた。自分は恥かしい。

然しながら、その反面に於いて餘り趣味方面に走り過ぎた。まあ風流心とでも云へよう。實に多趣味で同僚も、知己も驚嘆する位だ。自分程何も學生として趣味を持ち度くはない。而し、誰もが全然趣味を養成してはならん。等と云はうとは欲しない。自己の心に少くとも對稱する位

の一つ、二つの趣味を養つて勉強の餘暇に、一つの慰安方法として講じて欲しいものである。

第一に、自分は老人臭い様だかも知れぬが造園的趣味にかられてゐる。木をいぢる、樹木を植え込む、石を配置する。後に山を造る、川、池を掘つて魚を飼ふ。極く平凡な事だが、仕事を始めて一日と築き上げられ、而後自分の最上慰安となる便益を自分の暇に、勉強に、もの倦い時にどの位までに心を晴せ、喜ばせるか。石を運ぶ、木をいぢる、單なる事の様だが小さい趣味の養成だ。

第二に、自分は植物栽培。今は仙人掌の栽培を行つてゐる。決して専門的地位までは行かぬ。けれども夏を過して秋、冬を迎へ寒い季節を温室の中で思ふ存分に暖氣を攝取させて一年を過し、春を更に迎へて自由に延びるが儘に育つ。始終、この事が繰返されて、加水、加肥等の努力が積んで立派な花をも咲かせられるに至る。あのグロテスクな仙人掌も人に依つては嫁はれものだが、中々の愛好家も少なくはなく、自宅で南国情緒を知らず／＼の中に満喫出来ると云ふ具合。自分の交友達にも中々斯界に有力なる人も多数おいでになつて趣味養成法を味はつてゐる。他の草花も同様植物栽培としての趣味養成である。

第三に凡ての物を蒐集する。自分はついでに此の事をも述べ度い。當時のものを特に参考になるもの、印象深いものを自分で蒐集して後世に残してゆく。過去の思ひ出になつて當時の愉快な努力の汗を知るのである。例へば、極く手近なもの、マツチのレツタルを蒐集して宣傳、廣告に對する一般への魅力を感じさせる爲に嶄新なものを考案する。一つのマツチそのものが参考になる譯であり、中でも箱やマツチ棒は不要で、レツタル、ペーパーのみが第一の要件附きとなるのである。他に、切手、切符、スタンプ、等の如き廣範圍に亘つてゐるもので此の僅少なもので

りいからでも趣味方面、特に蒐集が云ふ事は實行され得るものだ。

號外!! おの極度に吾々に鈴の音に依つて心を引かれる號外等を蒐集して過去の歴史に對する參考の一つとして後世に残すのだ。中々近時の世相に訴へて甚だ面白い。氣の利いた仕方であると云ふ可きだ。一寸號外の事でいいだが、明治廿七、八年の日露戦役の當時、發行された號外を後程高價で買ひ戻したと云ふ逸話、實例がある。

決して私は此の紙上で去る滿洲、上海事件の號外が値が騰るから蒐集しろと云ふて諸君に勧誘する者ではない。

以上で自分の現在までの體験並びに類例を大略的に説明して、趣味の養成法への一端とした。

近頃、學生間でも趣味の養成が大分盛んになつてゐるのを見る。嬉しい事だ。特に我等若い者は蒐集方面に氣を入れ勝である。必ずしも趣味の養成が金をかけるものだとは思つてもいいけない。

金に依つて趣味養成とするのはそれは我等のする趣味養成ではない。無費用でいくらでも立派に思ふ存分に、自分の好きな通りに趣味の養成は實行し得られる。自分は斷言する。決して過言ではないのだ。今五年の長き生活を營んだ熊中を去らんとするに當り、懐しい我が家を離るゝに當り、聊か何が最後の筆を採り置く思ひ、斷然意を決して、文筆を華々しく最後の幕の中に奮つて、此處に體験談として私の眞相を發表した次第である。

後輩諸君への趣味の養成として少くとも一資料に供せらるゝならば幸である。

人間、少くとも終日學課に追はれて、勤勉の日を送り、多忙な生活を行つてゐる學生に取つては極く僅かな時間を利用して徹底的に趣味の養成の實を挙げられん事を切望して已まない。つまらぬ愚見を思ひ切り長

たらしめ披露して予ひ、貴重な紙面を汚して了つた事は御詫びする次第。自分の諸君への希望、後輩諸君へ、自分は之にて擲筆する事とする。

## 切手 雜 話

五 甲 長 島 芳 雄

切手は誰もが使用してゐて、あまり注意されないものです。今茲に種々な點に就て述べて見ませう。

第一に日本で始めて公式に發行されたのは、明治四年三月朔日のであつて、龍切手と云はれてゐます。種類は錢四十八文以下四種であります。

次で櫻切手・鳥切手・舊小判切手・新小判切手・菊切手・大正白紙切手と續いて、今日の大正色紙切手に至つてゐます。最近の關東震災の時には震災暫時切手が發行されましたが、今は稀にその使用されてゐるのを見ます。又現在使用されてゐる切手の中模様の新風景切手と、富士や鹿のあるのは富士切手と呼ばれてゐます。今日迄に、最近の飛行切手を入れて普通切手には約百五十種發行されてゐます。

さて次に現在の壹錢五厘の切手を手に取つて見ませう。先づ透して見ると波型の模様が有り、又着色された纖維が混入してゐます。此は贋造を防ぐ爲になされてゐるのです。即我が國一般の印刷術の進歩を物語つてゐるのです。圖案も細く見ると興味あるものですが、幾何學的圖案なものと、永年使用された爲とで、切手趣味者には既に飽かれ、こゝに昭和切手と待望されてゐるわけです。此等幾何學的圖案に比べると、新風景切手や富士切手は更に面白い所があります。

次に御大典や國勢調査の際に諸君に注目された紀念切手ですがこれは明治二十七年以來約五十種の發行を見てゐます。この方は普通切手に比較して、圖案にも型にも着色にも總ゆる方面に於て變化に富んでゐます。

其の他朝鮮や支那で、明治末年から大正初年にかけて、日本の切手に「朝鮮」「支那」の文字を添へて發行されたものもありますが、この方は私達素人には大して面白くありません。

次に切手に關聯して、スタンプも面白いです。これには紀念スタンプと風景スタンプとがあります。紀念スタンプは一時のもので歴史的であり、風景スタンプは地方色が濃厚で地理的であります。風景スタンプは現在内地だけでも二百五十種程あり、尙續々と發表されるやうですから、一寸した旅行にも二つや三つは集ります。

切手の歴史は古いもので、千八百四十年に英吉利で發行されたのが最初であります。以後今日に至る迄、世界中では六萬種から七萬種位發行されたと聞いてゐます。各國とも頗る特色あるもので、専門家は一寸觸れるだけで、又裏から見ただけで、何處の國のか分るさうです。

米國の大統領の肖像入れ切手を並べるのも、英・佛等の屬領の動植物切手を並べるのも面白いです。眞然と集めるのは興味なく、金もかゝりますから、私達趣味者は、國別か特殊物別に集めます。前者はその國の歴史や地理が分つて面白いですが、特に支那では地方切手の發行が夥たしいものですから、特に興味あります。又後者の例へば地圖切手、船舶切手、動物切手、飛行切手、女神切手等と一部のみに集めるのも格別なものです。

恐らく大概の切手は、一枚だけで、逆も多くの内容を有つてゐると思ひます。此等の研究は、歴史・地理は云ふ迄もなく、語學その他總ゆるものを含んでゐます。今手近かな日本の四錢切手を手に取つてみませう。菊花御紋章・富士・鹿は何を表はしてゐるのせう。更に細かくみれば、限りありません。一寸見た眼に興味ない切手も、その背後に隠れた歴史を知り、地理を知つて見れば、非常に深遠なものがあります。清の

切手に中華民國の添字のあるのを見れば、愛親覺羅氏の末路に一掬の涙を唆らせられ、滿洲國の切手を見れば、溥儀氏の繁榮を祈らずにはゐられません。埃及のスフィンクス入りの切手を見れば、古代文化の偉觀を、マサリク博士の切手を見れば、チエッコ・スロバキヤの成立に至る迄の彼の奮闘努力を、佛國女神の切手には、その藝術を、獨逸の高額切手には、マルクの慘落を、ルーマニヤのミハエル幼帝の切手には、その複雑な王室を思はせられます。

こゝに至つて、切手の趣味は慰安を與へる事から、一歩進んで、慰安と共に知識を與へてくれ、研究心を喚起してくれものと私は信ずるのであります。

## 演習の夜の空の偉觀

五 甲 長 島 芳 雄

午前二時半、大井小學校々庭に、冷やかな夜の氣に浸りながら立つてゐた私は、その夜の空の壯觀に驚かずには居られなかつた。月の光もさる事ながら、天狼と云はれ、「ナイルの星」と仰がれた、全天隨一の光輝を持つシリウスは、プロキオンやカストル・ポルクスの雙兒の二輝星と關連してゐるかの様に見えて、空高く輝き、別に自己の率ゐる大犬座の諸星を以て南に連なつてゐるかの様に見えた、又そのすぐ近くには五人オリオンがブレイアデスの姫君を追つて、満天至上の美を見せてゐた。希臘神話で美しい勇士、或は上手な獵夫として仰がれ、或はヘルシンの名と、又ナポレオンの名と結びつけられようとしたオリオンは、又現在私をして恍惚の境に導くに充分な美を有つてゐた。眼を北に向けると、又こゝには北極星が、その指針となる天の大時計北斗七星と共に姿を見せ、北極星に對して北斗七星と對照の位置にある世界第一の美女と會つて自慢したカシオペヤが、そのW型の形を見せてゐた。舉げれば限な

い秋の澄み切った空の諸星を見、神話等を思ひ出してうつとしてゐる時、何時しか集合の三時となり、夜明け方にはさしも壯観であつた、天空も全く雲の覆ふところとなつてゐた。

### 熊谷町沿革

五 甲 塙 田 勝 次

熊谷の地名は鎌倉時代の武士の鑑たる熊谷直實又は櫻堤によつて當地方の人口には勿論日本全国の人口には普く膾炙して居ると思ひます。

然し乍ら燈臺本暗しの諺の如く、當地の人ですらその沿革等に付ては殆んど何らの智識を有して居ない人が多い事と思ひます。故に淺見を披瀝して、その稍微に亘つて述べて見ます。

熊谷町は中古時代に熊谷郷と稱せられた所で、その熊谷なる名稱は何時代の頃から唱へられたかは、明瞭ではありませんが、或一説によりますと、「鎮守府將軍平貞盛の四代の孫、上總介維方の次子左衛門尉盛方、武藏國大里郡熊谷郷を領して勢を振ふ。源義家奥州征伐に従ひて武名あり、長子直光、次子直貞共に熊谷に住して熊谷二郎太夫と號し、依つて熊谷氏と稱す」とあり。又熊谷寺所藏の熊谷系圖によりますと、熊谷は姓丹治、左衛門尉盛方は嘗て北白河院の北面の侍なりしが、罪ありて誅せらる。時に直貞未だ年幼くして乳母直貞を抱きて、夜に紛れて都を後に武藏國に落延び、私市黨の小澤太夫の許に身を寄せて直貞を養育す。直貞長ずるに及んで同黨の成木太夫の婿となり、膽勇最も勝れたり。恰も其頃此地に獐猛なる荒熊出沒して、住民爲に一日の安きをを得ず。相約して熊を殺す者は、立てゝ黨の旗頭となし、熊谷三百町を知行すべしと。直貞時に年僅か十六歳、住民の難儀を見るに忍びず、烈風強雨の日山に入りて熊を射殺し、爰に私黨の長となり、熊谷氏と號して馳名四隣に聞えたり。熊谷郷の地名も即ち此より起る」とあります。

### 四〇

以上述べた説の眞偽はともかく、源頼朝に従つて、一の谷等て有名なる熊谷次郎直實は、乃ち此の直貞の次子であります。そして又直實が熊谷の地頭であつた頃、久下村の地頭久下直光との間に荒川流域の移動に基く所領の境界問題で論争を重ねましたが、此では此位にして、次に直實の没後、其子小次郎直家此地を傳領し、曾て父直實に従つて、宇治川一の谷等に平家と奮戦し、勇名を馳せましたが、其後奥州征伐の軍功により、熊谷郷の外、安藝三入庄をも授けられ、後承久の役に北條時房に従つて瀬多に討死し、其子平左衛門直國も亦、父に従つて討死したので、其子直時家を繼ぎ、父祖の遺領を傳領して子孫に及び、室町時代の末期に至つて、關東一圓全く戦亂の巷と化したので、子孫其領を保つ事が出来ず、熊谷を捨て、安藝三入庄に去つたと言はれて居りますが、此時代の文獻殆んど見るべき物なく、従つて漠然として其事蹟を考へる事も難かしいが、熊谷氏累代熊谷を所領經營する事大約二百餘年に及んだ事により、此間に於て熊谷郷の相當發達した事も推察出來ます。

降つて戰國時代になりますと、成田氏の勢力漸く振つて、北武地方に號令するやうになりますと、熊谷郷も亦成田氏の兼併する所となつて、それから徳川家の天正十八年江戸入府に及びました。

そして其當時迄の熊谷郷の民戸は、新篇武藏風土記稿に、昔の道路は熊谷寺裏門の方にあつたと記してあるやうに、現在より少し北方にあつたのを、徳川家關東總領後、仲仙道の開設されたと同時に、即ち文祿四年三月今の所へ宿驛を設け、從來の郷稱を廢して熊谷宿と稱せられるやうになつたのであります。此が今日の熊谷市街の起原で、地方都市としての熊谷町は此時より始まつたものと思はれます。

そして徳川家入府後元和七年、大河内金兵衛の檢地により、二千二百四十三斗七合の石高となり、始めは天領でありましたが、文祿元年松平

下野守忍城主に封ぜられてから、代々忍藩の領地として、宿内六人衆と云ふ者を置き、之を又町年寄とも云ひ、宿内に於て最も家柄の良い者六人之に任じ、交々宿内統治の任に當りました。

寛永十年松平伊豆守代つて忍藩主となり、又同十六年阿部豊後守代つて藩主となつて、阿部侯忍在城百年の祝典を舉ぐるに際し、其領内の住民より書上を徴した事がありましたが、其書上に依りますと、當時熊谷住民の多くは、大體三四代の者許りであつたさうです。此に依つても熊谷の住民も多く徳川家入國後四方より移住して來た事が分ります。

爾來仲仙道の交通發振を極めるに伴ひまして、熊谷宿は本陣、脇本陣、旅籠屋等の所在地として、旅客の來投、人馬の繼立等年々發達を進めるやうになりました。

又石原は獨立した一村で、熊谷宿と同様に忍領廣瀬郷に屬し、始め城和泉守の領地で、其陣屋を置かれた地でありましたが、正保年中より忍領となりました。

明治維新の際には同六年入間縣廢止され、熊谷縣設置さるゝに及んで縣廳所在地となり、同九年熊谷縣廢止され、埼玉縣の所屬となつても、大里郡衙の所在地として、郡に關する一切の行政機關裁判所、聯隊區司令部、稅務署測候所、又は教育機關としては本校始め三中等學校等設置され、又交通上に於ては高崎線、秩父線の主要驛となり、交通上頗る便利な地形にあり、又産業上に於ては製絲、製粉等の諸工場續々として設立され、異常の發達を遂げました。

明治四年の記録に依りますと、戸數千四百四十二戸、人口四千四百七十七人、外に寄留人員五百人と記してあります。此を人口將に四萬人、市に垂んとして居る現在に比ぶれば、其間の發展進步の如何に急速であつたか推察出來ます。

前に戻りまして明治二十二年町制實施の際、石原と合して熊谷町と成しましたが、舊石原村の住民之に服さないで、常に紛糾絶間なく起つて決しませんでした。郡内有志の斡旋調停の功成り、全く融合合體を見、今日の隆盛を致した事は誠に喜ぶべき事でありました。

### 奈良村郷土誌斷篇

四 甲 島 田 諦 信

易きより難きに進み、簡より繁に入り、近きより遠きに及ぼすは、教授上の原則なり。近來、教授は郷土より始むべしとの説盛んに唱導せらるゝ所以も亦此の原則に基因せるなるべし。殊に愛郷の念は郷土を知るの深きによつて、其の度を増すものなるべし。然れば愈々郷土研究は深く進められるやうになつた。模倣性に富める日本人の一人として、自分も時々、古臭い郷土史等を見るやうになつた。今余が奈良村について、最も興味を生じた事柄を二つ三つ簡単に述べん。

「奈良」といふと、びんと頭に響くのは「青丹吉奈良の都」の事である。何だか、此の村もその奈良と關係でもあるかの如く思はれるが、さうでもなさうだ。是は奈良神社の祭神が奈良別命であるによりしなるべし。次ぎは、此の村には非常に澤山の寺院のある事なり。惡口にも「別府ベラホー。奈良ドーシン」といふ言葉があるが、是も此の事柄より生ぜしなるべし。今寺の名、宗派とを列舉せば左の如し。

| 名 稱 | 宗 派      | 本 尊   |
|-----|----------|-------|
| 妙音寺 | 新義眞言宗智山派 | 大日本如來 |
| 大乗院 | 新義眞言宗智山派 | 不動尊   |
| 觀音寺 | 新義眞言宗智山派 | 正觀世音  |
| 利永寺 | 新義眞言宗智山派 | 阿彌陀如來 |
| 長慶寺 | 古義眞言宗    | 地藏菩薩  |

勝軍寺 眞言宗醍醐派 不動尊  
東光寺 眞言宗 藥師如來  
醫王寺 眞言宗 藥師如來  
西福寺 眞言宗 阿彌陀如來  
蓮華院 眞言宗 大日如來  
集福寺 眞言宗 釋迦如來  
常樂寺 眞言宗 釋迦如來  
國性寺 天合宗 阿彌陀如來  
以下佛堂  
中芝原堂 地藏尊 千體地藏尊  
地藏堂 地藏尊 如意輪觀世音  
藥師堂 藥師如來 桃木堂  
此の外、佛堂は尙數箇ある。此の如く堂の多いのは、昔相當の財産のありし家では、墓地の傍に此を建て、墓地を守つたものらしいが、それが今猶残つてゐるのである。

右の内、二、三の寺につき由緒を簡単に述べん。集福寺は萬頂山と號し、永仁年中(約六百三十年前)由良法澄國師の開創なりと傳ふ。當時は臨濟宗なりしが、其の後天文年中(約三百六十年前)領主成田下總守親泰特に永平道元禪師十四世の法孫、桂室秀芳和尚を請ひ、爾來曹洞宗風を擧揚す。慶長九年德川氏より朱印高二十石を寄せられたり。境内三萬六千餘坪、諸堂十四棟に及び、禪風の寺格を嚴にす。又明治五年六月一日より、學校として、上奈良、中奈良、下奈良、奈良新田、四方寺、田島、西野、玉井、東別府、上須戸、西城、日向、八ツ口、江波等十四箇村の區域より通學し、學業の中心となりしが、同年十一月區域廣きに過ぎ是等を三區に分け、尙一區の學校となり更に明治十七年八月郡區町村編制法により、

下奈良、中奈良、上奈良、奈良新田、四方寺・柿沼の六ヶ村聯合を以て奈良學校となり、後同十九年四月小學校令の改正により、尋常小學校奈良學校と改稱し、更に同廿二年四月町制實施の結果、柿沼を分離し、同十二年二月廿日新築工事竣功まで三十五ヶ年教育の爲に使用せり。

妙音寺は、建久年間の開立にして、開山は奈良三郎藤原賴尊なりといふ。本尊の傍に如意輪觀音を安置す。觀音は古の本尊にして、行基の作なりといふ。慶長三年八月四日御朱印高拾五石を賜はる。賴尊の墓は、自然石にて表には「開山觀音院賴尊」左の方に「奈良三郎藤原賴尊」右の方に「建久六乙卯年現住鏡岸」裏に「助成主藤澤氏」と彫せられ、寺側に建つてゐる。然し往古の碑は崩壊せしにより、此の碑は村民外記と云ふもの享保の頃に再建せしなりと傳ふ。

長慶寺は、神佛合體の當時奈良神社と併し、數多の修驗者によつて、治められしが、後別れて今はその傍に獨立してゐる。他の細い事は分り難し。他の寺も大した由緒は解らず。

次ぎは、明春熊谷の市制實施につき、熊谷神社と稱し、吉田市右衛門一家を農民の神として、祭神するとか、言はれてゐる奈良村の譽、吉田家についての慈善事業等を述べん。

吉田市右衛門は植村八郎衛門知行の名主なり。市右衛門は幼名を市十郎といひ、郡中四方寺村名主吉田六左衛門が弟なり。享保十一年六左衛門所持の田畑六百石餘のうち、四町四反を與へて分家せられしより、刻苦艱難し、農業に勉勵し、大なる富を作り始めたのである。

明和年中その男久彌は父の家業を繼ぎ、市右衛門と改名す。之二代目市右衛門なり。氏は本家六左衛門數代の家業酒造株のうち、十五石を譲られ、同年より酒造米三百石を譲り享和三年久保島村の民三右衛門といふ者の酒造株を買ひ得てより、年々米七百二十石を使用するに及んだ。

斯して次第に家財を整へ、幾回か酒を獻上して褒賞された事もあつた。天明三年信州淺間山の噴火せし爲、中山道熊谷宿近郷、當村等は頗る窮するに至れり。そこで、日頃貯へし金百五十兩を上納して熊谷驛に贈りたり。又其の後、寛政元年利根川通り御普請所組合四十七ヶ村の民、庸役に苦しむを以て、再び金五百兩を上納して年々の費用に充てんと請ひ、時の勘定奉行久保田佐渡守指揮して其の願の儘に免されしのみならず、此の二事父の志と繼ぎたる孝道にかなひ且衆民を救へるの奇特をもて褒賞せられたり。文化十年に及び、熊谷宿助郷の村々、猶も苦しき困窮するを歎き、金三千兩を上納して、之を假貸して利息により、宿驛を助け貧民の苦を救はんことを請ふて免されたり。尙此の外、文政元年郡中日向・四方寺・當村の三ヶ村困窮に落入りたるを救ひ、同九年忍領荒川分水路の組合入費援助に、同十二年備前堀改修に、又は天明三年淺間山噴火に備む、利根川通り四十七ヶ村の民を救ひ、己が本家六左衛門の家の衰微せしを再興せしめたり、村内の捨子・老病者等にてよるべき輩には、親疎を論せず之に施し、熊谷近傍の橋敷所を造營したり、村内の助となる事は、大小を厭はず、速に之を行へば、近隣の民知ると知らざる

と、市右衛門三代の事業を稱讃せざるはなし。

尙之に嗣ぎ、四世市右衛門は天保十二年父の職をつぎ、嘉永六年アメリカ人始めて來航し、我が國民の膽を冷し、時、廿四斥、十八斥、十三斥の長砲を鎗彈藥を併せ、植村左近を經て幕府に獻上し、又近傍人民に恩惠を興へし事項擧げて數ふべからず。

五世市右衛門は安政年間父の職をつぎ、後市十郎と稱す。明治二年十一月岩鼻縣より組合十一ヶ村の名主に申付けられ、尙父祖の志を繼ぎ、近傍の村々の水災・凶事等に際して私金を投じて之を救助せるなど一方ならず。明治三年祖父宗敏、畢生の苦心を以て改良せし、人氣風俗の逐

年頗廢するを患ひ、疾病・婚嫁・祭典・納租・勸業等民間諸般の交際に關する約束書を作り、岩鼻縣を經て、之を村内に行つた。縣廳大いに之を嘉す。同十一月郷長を申付けられ、武藏國幡羅郡・榛澤郡・秩父郡・上野國邑樂郡の二十組合、二百四ヶ村、高十一萬三千三百石の地の取締りをなし、且縣治の議事に參與すべき命あり、辭する能はず、又他に種々役を申付けられ、ついに明治七年一月「數年以來、民務に盡力し、殊に議事其の他、縣治に功績ある旨」を以て熊谷縣廳より金拾圓を賞與せられたり。市十郎氏は尙も慈善事業を怠らず、明治十四年五月九日太政官より銀盃一個下賜せられ、又十七年三月十七日群馬縣管下・町村貧民救済並びに道路・橋梁新設・修繕費等として、埼玉縣管下・群馬縣管下に各、千圓づつ寄附せられ、賞勵局より銀盃下賜せらる。

君は明治十年内務省御用掛を申付けられ、これより内務省少書記官、同書記官、大藏少書記官、同書記官等を経て、同廿六年十一月會計検査官に任ぜられ、廿九年十月高等官四等に昇敘され、同年十二月從五位に敘せらる。在官中は誠實以て、公務に盡されしが、三十年五月故ありて退官せり。三十九年正五位に敘せられ、此月病を以て歿せり。尙此外に吉田家は、四十三年の大洪水の際、多大の私金を以つて、遭難地方に義金を與へ、又當村の被害も頗る多く、これまた一方ならず恩惠を授けたり。又、遠く静岡縣方面の饑饉の時も無名にて、使用に充分だけの麥種を寄贈せし等眞にその事業は數ふるに暇あらず。

吉田家の市右衛門といふは代々の家名なり。又、同家の流儀は、事業をなしても、なるべく名を表はさない様に致したのである。

吉田家の墓は、果代の魂とも集福寺境内にあり。

(奈良村郷土誌參照せり) (完)

「今ゴッホの水彩が美術館に出てゐる。」こんな噂を聞いた。渦巻く雑草の地と過巻く雲、そしてその中に焰の舌を吐くサイプレス。でなかつたら紺碧の天空へ悪魔のやうな黄金の手を不気味に伸ばす向日葵。剃刀を握つてゴーガンの背後から飛びかゝる時の眼。オーヴェルの木立の中で心臓へ銃口を押し附けた彼の顔。私の頭の中にはこんなものが浮び想像されるのだつた。無理もない、この天才に興奮させられてゐたのはいつも複製の上だけで作品に接するのは切めてだつた。私の頭があの曲りくねつた幹の上に天空に向つて伸び狂ふ青葉のやうに亂れてしまふのは何とも云へない憧憬とでも云ふものがかうさせるに違ひなかつた。

真夏の午後の陽は天井の曇硝子を透して人々の足下に影を印してゐた。

みると……有る！

正面に。

親しみ深い見る者を引き込んでしまはずにはおかないやうな、だが押つけて来るやうなコンテの色。前方の竈に片足かけて、シヤベルを握つて、――石炭でも投げ込んでゐるのであらう――作業してゐる陶工。背後の幾段もの棚に並べられは艶々光る堅い壺。美しくかゞやいてゐる腕、額、シヤベル、窓から流れ入る外氣。そして情熱――彼の個性がキアラクテールが息づいてゐる。

だが私の豫想は完全に打破られてゐたのだつた。それに直ぐ気がつかなくなつたのだつたが。

「繪畫に對する色彩は生に對する狂熱だつた彼の作品の多きに似合はしからぬレアリスチックな態度である。目前にある物體を精確に描かうと追求するのではなく力強い自己表現を爲すために色彩を自由に氣まゝに驅使したゴッホの初めはかうしか見えなかつたのだ。

――それからだん／＼考へてくると頭が亂れてくる。ひしひしと押し附けられて来る。

眼がいたい。

力強い「自己表現」を爲し遂げることがまだ出来ないであらうけれども、「眞晝間炎天の下にあつて灼熱した鐵のやうなガラ／＼輝くオレンジ」の情熱の溢れに壓倒されて。

又、芽生えかけてゐる混亂とも言へる彼の法則の無視(？)寫實の否定(？)に現在の自己に驚怖を感じて、おののきつつ急いで畫面の顔を離れた。

私はいつかこんな初期の畫で「草刈る人々」といふのを寫眞でみたことがあつた。そしてその畫の説明を薄く覚えてゐる。

始めに畫面の外面の説明があつて次に「サインがなかつたら誰が之をゴッホと信ぜよう。題材から筆致から純粹の和蘭風景畫である。」と。

そして最後にかう云つてあつた。

「自分は畫家らしい傍の長髪の青年に思はず聲をかけた。

「これがゴッホですね。……すると、

「さうです。けれどもほん／＼のゴッホではありません。

私はあのゴッホのサインがあつたかどうか思ひ出さうと試みた。だけれども、その時、私は南佛の強さと明るさと思はせる日光を空腹に透めつゝ美校の角を谷中の方へ曲つてゐた。

たしか一週間前の一八九〇年の日が彼が自殺した七月二十七日だつ

た。多分オーヴェルもこんな赤い陽の中だつたらう。こんな深いコバルトの夕空の下だつたに違ひない。

### 秩父と其の特色

松本傳之助

秩父について先づ郡名の起り、歴史地理風俗等に關して少し述べて見ます。

此の地方は大昔銀杏樹の古名「ちちの木」が澤山茂生して居つたから知々夫と書くといふ説と、大昔の國名より起つたもので國造本記に「八意思金命十世孫知々夫彦命定賜國造拜祀大神」とあり、此の事は人皇十代崇神天皇の御代國を開き給ひし天下奉命の御孫であるから其の名を以つて國名に稱し知々夫の國と云ふ一國となつたと云ふ説とあります。其れから三百餘年の後武藏國と號する一國が定められ知々夫郡と書く様になつたが、和銅年間に「國郡邑里の名は佳字を撰び二字に定めよ」と云ふ勅があつて秩父の二字に改めたと云ふ事でありまゝ。

次に歴史について見ますと「原始時代出雲族の發展は知々夫から始められ、原始時代の勢力を支配する語部の國津神は南へ南へと進んだ。後年日本武命が比較的容易に東夷征討の實果をあげられたについては此の國津神の後援に俟つものがあるらしい」と今藤澤衛彦氏は論じて居ります。景行天皇の御代日本武尊の蝦夷征伐の歸途秩父を通御あらせられた。又和銅猊納で元を改めて和銅としたと云ふ事は有名な事で萬葉集にも二首でてをります。上世に於ては貢馬を奉りし牧馬であつたが治承養和の頃武家の世となつて之も廢止され、又桓武天皇の御子葛原親王の猶子恒望といはれる御方が左遷せられ恒望明神がある。其の後平良文が上州から秩父に移り孫將恒が此の地に來住し六代を経て重忠公に至る。公右大將頼朝に仕ふるに及び城を畠山に移し、其れから畠山次郎と云つたので

ある。それから北條氏の所有となり信玄の十代の祖なる武田氏が少し領して居つたが信玄に至り侵略してしまつた。もともと武藏國は足利家より上杉家に賜はつたもので、守護代或は城代を置いて守らせた。而し上杉家が衰へ北條家が益々威を振ひ、天文年間河越軍に打ち勝つて北條の麾下となつた。それから後は藤田氏の守護となつて明治維新を経て現今に至るものであります。

次に本郡は西南部に高峻なる山岳多く中央より東方に秩父盆地があつて荒川が流れてをります。地質研究には最良の所で、岩石鑛物は云ふ迄もなく本邦唯一之を學ぶ者で長瀬の名勝、上長瀬の紅簾片岩及び蛇紋石を知らない者はありません。

次に神社佛閣については三峯神社、秩父神社、寶登神社、寺には西國と並び稱せられる卅四番の札所があります。三峯神社の祭神は伊弉諾尊伊弉冉尊の二柱で、景行、文武聖武天皇を配祀してをり、創立は景行天皇四一年日本武尊が奉祀し、又四三年天皇行幸せられ三峯山と云ふ名號を賜つたのであります。秩父神社は八意思金命・知々夫彦命・素戔鳴命・大國主命の四柱を奉祀して本殿長押に彫刻せる龍と拜殿長押に彫刻せる虎は左甚五郎の作だと云はれ、本社例祭日十二月三日の夜の光景は關東に比類がないといはれる程の美觀を極めてをります。卅四番の札所は元正天皇の御代に始まるので坂東西國の札所より一箇所多くして百に充つようにしたもので今に至る迄巡禮はたへません。又國寶の長一丈六尺七寸幅三尺三寸二分厚四寸の綠泥片岩の板碑があります。之は花園天皇の御代に出來たもので我が國最大のもので私の村に在ります。

次に風俗について見ますと東都より二十里しかはなれてをりませんが昔は随分奇抜だつたやうです。言語は非常に面白く秩父がこれ程だから、他の土地はいかに變化してゐるか想像されます。茲にあげるのは方言の

一部です。

名詞 げろ、べつとく、げつとく「蛙」とばう「家の入口」

動詞 へーる「催促」、だんどう「詐欺」

形容詞 へーる「啼く」、やれる「叱られる」、のす「走る」、ふやかす「浸す」

副詞 につて「苦し」、むちつこ「可愛らし」

副詞 めつためつた「益々」、からつきり「漸く」

以上は方言の代表的なもので今ではあまりには使用しません。又諏訪神社の獅子舞は古代其の儘で秩父が産んだ民土藝術中最高なものであります。

秩父はあらゆる方面から察して最文明の進んでをつた所に違ひはありません。まだ澤山ありますが茲で打ち切ります。

文藻

努力

五甲 長島芳雄

我等は努力あつて始めて何事をも敢然として出来るのだ。人生の眞の意義を味ふ事が出来るのだ。努力即専心に奮闘する事の永續こそ我等が寸時も念頭を去つてはならない金言である。我等はこの金言を戴いて勉めようではないか。

聖人

根岸忠雄

凡そ生あるものは必ず死あり。人は死に臨みて眞に自己の赤裸の姿を見、眞に自己を評し得る。

聖人の心清くして恥づるなければ従容として逝く。平々凡々たるの士、心重くして寸時も長く生きむ事を望む。遠き哉。士の聖人に及ばざるや。

鍛練の時

常見善策

「鐵は熱き中に鍛へ乾草は日中に乾せ。」我々にも心身の鍛練をすべき時がある。同じ鐵でも鍛冶の如何によつては名刀ともなり鈍刀ともなる。又一度乾した草は永久に保存し得る。我々は此の時代をのがさず全力を盡して心身の鍛練をしよう。

英雄

村上 鎬助

偉大なる物は人間の心をとらへる。巍然として立ちだかる山には怒れる英雄を見、ゆるやかなる峯には睡れる英雄が在る。一度山中に入れば靈氣直に至り、雲座に坐して遙かに下界を望めば、自身英雄の心を得る。嗚呼偉大なるかな。

理想

石橋克己

理想とは何であるか。其は吾々青年の生命である。理想なくして青年の生甲斐は無い。吾々の日常は理想を離れては何物も無い。冒險や未知の世界への興味かうした物が積極的に一つの目的となつて人生の意義をつけるのである。

苦

齋藤 勢七

苦を味はなくて、眞の樂みは味はひ得ない。何事でも、苦んで苦みぬいた揚句、出来上つた仕事なり作品なりは、何時見ても、そこに表面的でない、即ち、内容的深さを感じ、永久の生命を感じる。この苦に當面する毎に、人間は新しい進歩を得る。

赤根

大谷 清一

竟に時雨始めぬ。かたへの木陰に身をよせつ。

ふと見るかなたの斷崖に紅葉の二三枝、なつかしくてその斷崖に歩みよれば、ふもとにめぐる小川何草とも知れぬ赤き細き根をすべりて冷たげに山霧に入れり。

讀書の後

佐川 正久

湯の盤の銘はいはく、  
「誠に日に新にし日にあらたにし又日に新なり。」と。殷の湯王は毎朝湯を使ふたひの縁に、右の銘をしるし、日に身の垢をあらふ時に、こころもその如く、舊く染みし汚れを戒めたと云ふ。實に有難い事ではないか。

勉強

大島彌太郎

勉強とは何か、我々人間を練磨し有爲な人格者所謂古の君子に僅なりとも近くせんと修養を教ふる爲の方法なり。其の方法如何。其は克己努力の二道のみ。  
吾無過人者但平生所爲未嘗有不可對人云者耳の温公の言の如く實行すべし。

天才

加藤 重行

「予は天才にあらず故に偉業は成じ難し」と言ひ、何の努力もなすことなく自我を放棄して醉生夢死する者あり。嗚呼謬見の甚しき哉。古來努力せずして天才偉人となりし人は果して幾何ぞや。蓋し天才は努力の結晶である。

修養

橋田 勝次

人格の達成には修養を要する。かの西郷南洲の言に「命も名もいらす、官位も金もいらぬ人は始末に困る者なり。この始末に困る人ならでは艱難を共にして國家の大業は成じ得られぬ。」とあるがかくの如き人格は修養なくては得られぬ。

質實剛健

新井六三郎

荷しくも學徒の間一旦浮華放縱の風生ぜんか。其の國家は眞に深く憂ふるべきにあらずや。先づ第一に服裝より吾校の質實剛健を標識し其の眞値を辨へ、自己の修徳の道に強く正しく而して明るき意氣と熱とを以て慕進すべし。

汗

本山正三

天空に迫る様な高山を仰ぐ時、人一度は驚く。だが間もなくその頂上を極めんと欲する心情が油然として起る。その氣持が努力即ち汗に依つて後日實現される。私は強調し度い。「汗は吾等青年の元氣の表徴である。汗で生きよ。汗を知れ。」と。

誠の力

五味周太郎

誠の力は大い。彼の三勇士は何でかく壯烈な死を遂げたか。否何が彼等をあゝさせたか。唯誠一字のみ。彼等は唯誠を盡したに過ぎない。彼等の誠は彼等を軍神たらしめ國民尊敬の的たらしめた。至誠よく人を動かすとか、嗚呼誠の力は大い。

霜

富田實

山の紅葉はすでに散りて、田面の稻はまさに熟し萬物淋しき時、我等は始めて霜の美しさを知るなり。春の野にたなびく霞、冬の林に降りかゝる雪、いづれも一種の趣ありて美しからぬにはあらねど霜の美しさは又一しほなり。

質實剛健

小久保周治

人間として此の世に生れた以上は、生存の二字が最大必要條件である。然してそれを保持する爲に、竟には國家間の大争闘となるかも知れぬ。吾人が此の勝利者たらんと欲するならば、歴史の證明する如く質實剛健の氣風が大切である。

人生

石井晋量

遙か彼方に丘あり、前には小さき流れ靜かに流れ、後には林こんもりと茂り、春は梅、桃、櫻咲き亂れ、夏は葉緑にして秋は紅葉に染り、冬は枯木と變化す。此の丘に來りし詩人は、この様子を見てどう思ふだらう。人生の無常を深く感じるであらう。

希望

植野芳雄

秋は實に面白い。常緑樹の他を抜き青々としてゐる如きは我等青年の希望に燃えつゝあるに似たり。青空の高く涯無く續けるは我等の希望たる理想の境地を象徴してゐる様だ。

嗚呼我等の希望は無限の理想に向つて燃えてゐる。

時計

五甲大野禮次郎

時計は常に怠らない。人間が怠らせるからだ。時計は何物をも要求しない。然も人間には無くてならぬものを與へる。

時計はたとへ、身が黄金にて覆はれようと、鐵で包まれようと同じ様に動く。私は時計の心持がほしい。

汗

岡田慶一

汗の後に得られる快感そは何人も経験し、又經驗し得られるものであ

る。汗こそ我々青年にとつて、否人生にとつて缺く可からざる要素である。誰かが云つた。「汗無き人は暗黒なり。」と。されば我々は愛汗の精神を心に刻み邁進しよう。

趣味の寫生

吉岡辰雄

自然を描く、其所には慾も野心も無い、眞の無我の境に入る時である。必ずしも上手に描けなくともよい。いや一筆も描かなくとも自然と對して居る時に必ず其中に小さいながらも何ものか見出す。其れが寫生する者の最大の樂みだ。

努力

中庭尊祥

エネルギーは不滅だ。努力して消耗するは怠惰のみだ。我等五年間の後の中は努力の源泉なのだ。我等は青春の血に燃えてゐる。それは努力の血だ。我等は希望を抱いてゐる。それは努力の結晶だ。がんばれ。これだ。鬼神も三舍を避くるは。

親友

秋篠恭三郎

數多き花の中から數多き草の中から、一つ秀でた花、草を見出すのは困難な事だ。それは丁度多くの友の中からヒツタリと自分の性格に「致した友を見出すのと同じだ。然し一度見出したらその花や草は、斷然他にぬきんでて見える事は、友の場合も同じである。

花

多田六郎

花は人生の慰安である。高尚なる思想を人生に適せしむるの目的であ

る。之れ有るが爲に人は煩悶を感やし、私憤と利慾との雜念忽焉として脱却するを覺ゆ。あゝ俗臭紛々たる社會は如何に花によりて淨化せられつゝあるかを知れ。

星

島野正一

萬象の中で最も清淨で神聖な物は星である。星の輝きは悠久であり、愛の泪の光である。ある時は冷くある時はほほえむ。見る人の心の儘に星の光は變る。あの神祕な夜の世界で星は靜かに瞬いてゐる。星はおごそかに清淨を表示してゐる。

神國

田部井一郎

その昔神武の帝權原に御即位ありしより茲に二千五百有餘年神國瑞穂の國は皇統連綿として、御稜威愈々輝き、國威益々四海に振ふ。嗚呼此の光輝ある神國に育ちし國民よ、黎明の鐘は鳴る、起て、祖國を守れ。而して己の多幸を天に謝せ。

快樂

飯島秋

眞の快樂は何によりて得られるか、云ふ迄もなく汗だ。汗無くして得られたる快樂これこそ虚偽の快樂と信ずる。吾人は汗なくして自己の快樂を求む可きでない。眞の努力は、眞の汗を、眞の汗は眞の幸福を否眞の快樂を與へるのだ。

運命

清水三郎

古人曰はく「人は奮勵努力に依りて自の運命を開拓すべきである。」と。財が何だ、富が何だ、吾等青年の進む所唯々努力の二字あるのみ。

働け。努めよ。然して最後の榮冠を得よ。再び云ふ。人は奮勵努力に依りて自己の運命を開拓せよ。」と。

## 名

小新井徹雄

名は文章によりて後世に残るとか史記にある。蓋しその作者も世に知られる人物である。其の作者自身かくして名を得たか。こゝに二つ議を提し度い。名は己の得意とする所を磨き努力した結晶であると。實に文章の推稱ばかりでない。

## 努力

野中龍三

努力すれば如何なる難局も打開する事が出来る。亦如何なる大なる希望も爲し遂げる事が出来る。故に吾人は希望が大なれば大なるだけ多大の努力を拂はねばならぬ。此所に於て自分は努力すれば何事か成らざらんと強調する者である。

## 愛の力

松本博吉

社會は偉大なる愛によつて構成される。故に我々の間に温き愛の精神が漲ぎつてこそ始めて社會の治安は完全に維持され眞の平和が齎されるのである。故に愛の面前にありては冷めたき法律や規則は全く無用のものとなるであらう。

## 劍道

新井源三

心身を鍛練すべき最上の運動は劍道である。酷暑嚴寒も恐れざる自若たる身體、事に臨みて沈着、事を處するに果斷、大敵に遇ひて動せず、長に對して謙。之等の徳が知らず知らずの中に得られる。此程貴き修養

のなされる運動はあるまい。

## 歴史の意義

神沼眞佐次

歴史は單に過去の事件に付いて物語る學問ではない。過去の事業の成功の原因失敗の理由等を物語つて我等に處世の道を教へ、忠臣義士の出現は我等の國民精神を彌が上にも鼓吹する。實に歴史たるや國民精神と處世の道を教へる好教育である。

## 理想と現實

中島半七郎

理想は誰でも有する本能である。青年はこの理想に燃える時代だ。高い理想を描いて此を現實化せんと努める間が人生の興味あり且つ最も苦難の秋だ。誰が此を現實するか？努力家。此だ。言ふは易く行ふは難し。理想を現實せしもの此れ世の成功者だ。

## 人生

吉田規春

人生とは何ぞや？人生とは快樂を求め或は極樂淨土に行く手段方法にあらず。又辛苦のみを望むにあらず。たゞ自分の目的に對して自己の全精力を以つて努力して初めて此の世に生れいでたる甲斐があるのである。

## 音楽

大屋與四郎

音楽!! 音楽!! 和やかな樂の音、それは萬物の心を慰めるかとなるべきものである。吾人は樂の音によつて總てのうさを忘れ様とする。人間より心なき草木に至るまで實に音樂はそれ等のものに取つて慰安者としての最良の友である。

## 團結

坂田庄作

社會は團結を尊ぶ。團結なくして社會は向上發展は勿論秩序を維持することすら不可能である。

團結!! これは力だ。力は恐喝誘惑何物にも挫けぬ忠誠なる精神の發露だ。

吾人は社會の一員たる精神を養はねばならぬ。

## 努力と成功

天田正義

我等は目の前の成功を望むな。努力せよ。成功は努力にある。努力して破れた者を誰がけなす。

人であれば同情の念起るは當然である。蛙でもあらゆる努力する。して成功する。我等人間は蛙に下るな。そして遠き將來の成功を目指して進め。

## のぞみ

阿部俊雄

樂聖ベートウベンはあらゆる食困と戦ひ勇者になる様な悲惨な生涯を終つた。彼といへども行手に輝きの日即ち、望みを持つてゐたればこそ音樂士にあれだけの貴い仕事を残し得たのである。

## 秋の淋しき

山田忠満

秋も大分深くなつて來た。秋と言へば誰しも、物のあはれを感じるものだが、僕は誰よりも深く秋の淋しきを感じる。それは母の死である。僕が尋常六年の時、秋もやゝふけゆく頃母は淋しく死んで行つた。僕は

秋が来る毎に、何とも形容し難い淋しきに襲はれる。

## 艱難

井桁瀬平

「艱難汝を玉にす」と諺にある如く凡そ艱難なくして事業に成功した者が幾人あらうか。エヂソンの大發明も、ナポレオンの大帝國建設も艱難の賜ではなからうか。現代の青年よ。桃源の夢を貪り艱難をさける如き考へをすてよ。そして諸難に打勝つべき精神並びに肉體を養成せよ。

## 努力

堀池忠夫

努力!! 努力!! これぞ吾等青年人生に於て缺く事は出来ぬものだ。萬事を決するは努力だ。

努力なくして何等の成功なし。理想に燃え且つ人生の歧路に立つ青年諸君よ。理想を實現せよ。

努力せざれば單なる空想に過ぎず。努力せよ。而して奪へ、晴の榮冠を!!

## 社會に對する報酬

森芳郎

職賤しくも、此れに就きて社會を利し益すれば吾等の社會の恩に對する報酬となるなり。

又職貴くも、此れに就きて社會を利し益すれば之社會の恩に對する報酬とならざるなり。

吾等いづれを選ぶ、必ず前者を選ばん。

## 吾等の覺悟

矢島光詮

「盛年不重來」といふ。一度去つた年は復と還らぬ。人生の春である青

年期はまたとない。我等はどうしてかゝる貴重な時を徒に費す事が出来ようか。空しく後悔の跡を噛まんよりも今よく學問修徳に勵み將來社會に立つて活動する時の十分なる準備をせねばならぬ。

努力

原 林 藏

努力なくして何事が成るべき。努力、それは成すを得べくも挫折せざるは難し。始終一貫努力を以て、成功を得るの最上の手段と思はずんばあらず。成就是努力の連鎖なり。時として精神集中せば努力すべし。若人よ！是れを日々忘れざれ。

意氣

五 乙 和 久 井 良 一

「我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ。功名・不覺も紛れぬ様に只一人いかにも強からむ方にさし向け給へ。」とは鎮西八郎爲朝の言である。壯なる哉、渠！何たる自信！「雖千萬人、我往矣。」の氣概溢れたる痛快なる一言。持たん哉我等、此の意氣。

静動

清水 介 良

秋空萬里、打てば響かん三萬里とでも云ひたい紅葉の十月、清流荒川の岩頭に立つ。風あるや否や、水面に浮ぶ影動かず。音なく流れる水の行方、始めて知る紅葉一枚。時に小魚浮んで紅葉を追ふ。あるかなきかの波紋、秋の静寂をつゆ破らず。

武

角 田 孝 典

明治大帝御製  
弓矢もて神のをさめし國人は

ことなき世にも心ゆるすな  
皇祖皇宗の建國なされてより以來幾千年、我が國人は一日たりとも勤儉尚武の精神を忘却しなかつた。内に確固不動の大和魂を涵養し外に外敵の侵略を禦ぐ。それこそ我が國武士道の歸趨でなくてはあらう。

趣味

武 井 弘

趣味は人間に潤ひと奥ゆかしさを與へる。彼の馬肥ゆる蒼空を去來する行雲に愛憐をやり、或は庭前に芳香をたどはする菊花に、又は樹梢にたはむる雀の聲に、又は袂をひるがへす秋風の樂の音に心を慰め耳を傾く。

人生多事多難といふと之等花鳥風月流水行雲に心をやる底の餘裕は持たないものだ。

人の世

青 木 庫 之

寝る、食ふ、それ丈でこの世を終りたくない。人生は五十年だと言ふ。だからこの短い五十年を有意義に終りたい。人生は誠にはかないものと言ふ、だから一寸時をも忽せにすることは出来ない。短い人の世であるからこそ努力發奮もせねばならぬ。

立志

岡 崎 博

「男子一度立志出郷關、學若不成死不歸。」志を立てて百夫の雄ならんと誰しも望むが結果如何。一難去つて又一難、遂に悄然果さず。これ確固たる志なきが爲なり。志なきは能くして大洋を遡る舟の如し。吾人志を立て、邁進せん。

栗

森 清 治

萬果競うて其の美を世に街ふ、獨り栗のみ其の實をつむこと何ぞそれ強き。然れども秋風一過落葉ひら／＼天地に舞ふ候至れば自ら美果を地上に落し以て稚兒を喜ばしむ。あゝこれ吾等生物識の深く心に止むべきものにあらざるや。

スポーツ

長 野 正 雄

人生は身體が強壯で明るみを持たなければならぬ。スポーツは、身體を強壯にし、人生生活を明るくするものである。若しスポーツなかりせば、人生の明るみは失はれ、闇となるだらう。それ故スポーツは人生になくてはならぬものである。

使命

佃 久 雄

吾等學窓を巣立つ青年の使命、それは一體何であるか。曰はく、「責任を完全に果たすことなり。」と。責任を完全に果たすこと、これは處世上最も大切な事柄なり、殊に學窓を巣立つ青年に於て然り。吾等青年の使命、それは責任を果たすことなり。

工夫

小 根 山 秀 敏

人間、働けば、必ずその結果は得られる。然し、其の巧拙によりて、同じ努力、時間を費ひ、其の結果に大と小とを生ず。「日永くとも、事業を爲し得るに非ず。頭によりて爲し得るなり。」と。生存激烈なる現時、「著手せる前に、先づ工夫せよ。」と叫ばざるを得ない。

機會

曾 我 宗 三

機會!! 機會とは何であるか。それは實に機會こそ成功の寶庫たる扉を開く所の鍵である。この鍵この機會無しには到底物事は成就し難い。西洋の諺にも「機會はその發見せし毎につかめ」と。我等は之を念頭に置きその目標に邁進しよう。

人生と社會

鈴 木 正 夫

「人生と社會とは老人と杖の如し。」とか古人は言へり。誠に然り。人生なるものより社會が成り、社會よりして人生は成る。夫故に人生は社會の向上を計り、社會又人生に幸福を齎らす。思ひを此處に及ぼす時、「自他共榮」「相互扶助」の言、又宜なる哉。

時間

田 島 一 男

吾人は時を重んずべし。ネルソン或時軍艦に乗らんとす。前夜御者來りて「明朝六時に馬車を廻すべし。」と彼は曰く、「それより十五分前に來るべし。一定の時より十五分前にあるは予が予たる所以なり。」と。時間を大切に守るは勤勉精實、責任を盡し、義務を重んじ、身を立つる基なり。

青年

柿 沼 忠 次 郎

青年の最も尊ぶべきものは意氣と努力である。或る人曰はく、「一國の興廢は青年の意氣に有り」と。是れ誠に然かりそれ若し青年にして意氣なくんば其の家は亡び延いては國家の滅亡である。故に吾等青年は進む所皆意氣と努力を以て最後の榮冠を得よ。

新聞

寺崎三郎

新聞は社會の木鐸である。現今の世相は消々として流動してゐる。しかも現今の社會は一秒刻の停滯もない。桑田變じて滄海となる世の中だ。此の變轉の激しい現代の社會に處し世相に倣へない様に指導してくれるのが新聞の使命だ。

斷行

野口秀男

すべて物事を行ふに其の困難の大部分は着手する迄にあるは勿論であるが、たゞ徒らにためらつて居るより先づ始めよ。着手斷行努力すれば自ら何事も成就出来ると思ふ。成らぬは人の爲さぬなりけりと古歌にもあるではないか。

夕の静けさ

野村龍雄

正應寺の鐘がゴーンと鳴つて萩の葉がゴロ／＼と散り居酒屋の掛行燈が村の夕を松の下から淋しく照してゐる。豆腐屋も既に歸つてしまつて、世の中が急に薄暗くなつた様な氣がする。不意に何とも云へぬ夕暗の靜かな感に打たれた。

落日

關根正

太陽は今西山に沒せんとして白壁を赤く染めて居る。それは畫家が一息で畫き上げた如き景である。紺青の山を赤や黄の林にうき出して居る。晩秋の風は森に行つて異様な音を立てる。日は沒した。落日。落日。黒き夜の帳は下された。天地唯寂寞!!

雪辱

新堀政一

若し吾々が不幸にして、「敗北」といふ位置に置かれたならば、又當然に、時を同じうして味はねばならぬ事は、「雪辱」の二字だらう。其處に燃ゆる若人の意氣があり、眞價がある。其の意氣こそ勝利に導く何よりも大なる力ではなからうか?

意志

石川辰男

青年は高尚な希望を持ち、堅い決心を抱く、然し長年月の人生の進路に於ては、其の決心をかく亂させる誘惑、困難、苦辛等様々ある。そして弱者を地下に落さんとしてゐる。此んな時こそ、其れを蹴散らす意志強く、明るく、然も正しきを持つべきで希望に到達する原動力となるものである。

樂の慰安

塚田秀雄

古代よりあらゆる手段により口に手に足に結びつけられ樂人生の慰安にあらずと云ひ得るか、山野より響く生物の聲四季の愁をそゝらしめる音聲により感情と支配す樂の慰安それは五濁惡世の奥に眞善美を發見す。

親の有難さ

腰塚武彦

世の中に、親の有難さを本當に感じてゐる者が、何人あるだらうか。たとへ、自分の親を憎んでゐる者でも、親の無い後、きつと、親程自分を思つて呉れる者は、一人も無いといふことを、知るだらう。どんな親でも、親程有難い者はないといふことは、親のない者でなくては別らぬ。

戦と平和

中村夫一

戦は殘酷だ人道上最も悲しむべき事である。併し思へば人生は長き戦である。宇宙は競争場だ、競争は戦だ。人は平和を欲する。平和は人類の理想な生物の理想であるかも知れぬ。惡戯に平和を欲する勿れ。誌せ平和の女神は武器の上にのみ寝むる事。

榛名のきり

神沼清三郎

秋色いよ／＼こまやかな霜月六日。二度たづぬ、榛名の山、きり深くして染もなく、谷もなし。唯々落葉の一すじ道をかきこそと登る同行の者。烈風一過我一人居て、體をどるも心ふるふ涯上の道。木の葉鳴りて、頬を打ち過ぐ榛名のきり。

行路難

野原英四郎

「人生行路難」と古人も語つた如く、目的の彼岸に到達するには幾多の難關がある。陽春三月の候、百花爛漫として開くのも、實に嚴冬の誠練に耐へたからである。人も亦幾多の難局逆境に逢つてこそ初めて、眞に鍛練され、成功するのである。

美の憧憬

金澤桃太郎

人間すべからず藝術美を鑑賞せよ。その瞬間に我等は全く、利害得失の念から遠ざかり、恍惚として無我の境地に入り、美妙なる理想の天地に遊ぶ事が出来るのである。人が美の理想を憧憬するのも此の境地に入り、天地に遊ばん爲なり。

趣味

松本恵三

「張つた糸は切れ易し。」とは絶対不變の眞理である。張つた心の糸を弛めるのは、趣味である。然るに吾人は誤る勿れ。下卑た趣味は眞の價値がない。且つ高尚な趣味は人格の向上に偉大なる助力を與へるものであり、趣味なき人は人格の不足を生ずる。

我等よ、若人であれ

江原武吉

社會の變遷は漸くに人心に動搖を來たしぬ。されど我等に堅固不拔の大和魂あり。人心の動搖は我等の試練にあらずや。諸子徒らに環境に支配される勿れ。聞く、世界大動亂の前兆を。されば強く、明るく生きんが爲に、我等は常に若人であれ。

青年

森田壽一

青年とは何ぞ、それは理想に生くる者なり。されば一生を無方針に送る者、二十と雖も老年なり。赫々として自己の理想に邁進する者、六十にして尙青年なり。されば我等は高尚なる理想を以て生くべきである。之即ち與へられたる使命である。

青年よ

小暮十九三

人間が裏切られたと言ふこと程口惜しく、又淋しいものはない。僕は或る時、裏切り者が、それを目のあたりに見せつけられた時殺してもと言ふ氣になつたが、冷靜に考へると、彼の行爲が淺ましく憐れでならなかつた。人間は特に青年は、この冷靜なるものが大切である。

尊き使命

新井 清

えんえんとして續く鐵路、其の蔭に立つてこれを支持する「びよう」を考へよ。僅か此の一本の鉄の爲に、幾百の生命を奪はれることがないとも限らない。斯の如く此の世に存する物で如何に少なる物でも尊き使命を有することを考へたい。

人事を盡して天命を待つ

永沼 資造

吾人は自分で自分の運命を開拓せねばならぬ。須らく人事を盡して、然る後天命を待つべきである。故に吾人は如何なる運命に遭遇しても、日常自分の力の根限りを盡して居れば後悔なく、所謂安心立命の心境に達する事も困難ならずと信ずる。

自己の發見

吉村 章

エドワード・ホックは言つた。「汝自身既に偉大なる力の所有者である」と。  
此の一言こそ實に、我々の凡てが天より賦與せられた、或る偉大なる力の所有者たる自覺なき、即ち、確乎たる自信なき信念なき、人間への「コンパス」たるものと信ずる。

人

福田 正保

「人間とは二本足の羽毛のない動物である。」とプラトンは言つたさうであるが、自分は「人間とは靈氣の魂である」と考へたい。人體は種々な元素から出来て居るが靈氣あつて始めて、元素も有機的統一を爲し、立派な人間となつて来るのだ。

自然の感化

柿原 忠

山は平野よりも強く大自然の形を表して居ると思ふ。昔から偉人は山間僻地より生ずると言ふ事があるが、實際それはあの深山の雄大なる自然の形を見、平和と静寂の中にあつて、大いに大自然の感化を受けるからであらう。

秋の夜

山田 玄光

寂寞とした秋の夜、満月を待つ。月は雲の裂目より皎々と冷い光を蒔田と桑畑を分つ細道に投げて居る。  
蒔田の水は薄暗く反射し、宿れる月は瞬く間に消え入らんとす。有るか無きか分らぬ風に、からから散る落葉。歩む我が影。下駄の音が一層秋の趣を深める。

強く正しく明るく

村岡 彌市

修養の途にある我等には堂々と邁進し得る信念がなくてはならない。「強く、正しく、明るく。」これは質實剛健に次ぐ本校の校訓であり、我等の信念である。我等が心身共に強く、正しく、明るく學業に勵む時、我等の前途に何の妖雲があらう。

登山崇拜

柴田 政輔

初夏の陽光を浴びて、リムック負ふ背に、ちつとりと汗がビツクルを握る手先にも汗が。一本のザイルに身をたくす。頭づき登るカレ。其の苦心、其の旅程に登山なるものの意味がある。トップを極めた時に自然の

會者定離

江袋 文男

夢の歳月五年大原の野の學窓に會せし者浮世の例にもれず早離散の時に至らんとす。懐しき友よ師よ母校よ。然れども徒に悲しむ勿れ。離愁の絆を斷ち雄々しく集れたん若難よ、而して理想と希望に燃えて進まん。會者定離とは悲しみの話に非ず。

成功と失敗

細沼 靖

世は人の富貴、貧賤によりて、成功、失敗を定む。然らば帝位を驚かせ奉つた入道淨海は成功者にして、はかなく武藏野の露と消えし松陰は失敗者なるか。否、然らず。  
眞の成功とはその結果を謂ふに非ずして、人としての使命を果せし意なり。

材料の向上

栗原 二夫

或人曰く「現今の學校教育は安價な工藝品工場でその製品は安くして實用向ではあるが、逸品なる物は出来ない。」と。成程さうかも知れない。併し其の材料が非常に優秀ならば材料自らの光りて逸品にならざるとは限らないだらう。

達人と凡人

宮下 清

南洲翁曰く「位や金や名や命さへ要らない人は始末に困るが、この人こそ國家の大業をなすのだ」と。  
翁は餘程始末に困る男だつたやうだ。金、位等を得て嬉しがつて始末よくなるのが凡人だ。實に翁の達人たる所以は始末に困るといふ點にある。

美が、天然の雲が、我等登山家を慰めてくれる。

菊の花

近藤 禮一

秋も暮に近づいた。度々の時雨に色を變へた樹木の落葉がしきりなく冷い土に降り注ぐ。香の強い花を持つ木を好んで植ゑた庭は近頃手入れが行届かない爲か、廢園の様に荒れはててゐるが、菊の強い花の香が、蒸される様に濕つぽく漂つてゐる。

努力

大澤 佳郎

努力、何と力強い言葉ではないか。  
「叩けよ！然らば開かれん。押せよ！然らば鐵門も開かれん。」鈍才の努力も遂には秀才を凌駕する日が来る。努力なき眞の成功はない。努めよう。遂には我等の關門も開かれるであらう。

成功は唯努力あるのみ

村山 命八郎

「牡丹餅は棚に在り、運は天に在り。」と寝て果報を待たんか。起つて之を取らんか。蓋し成否の端緒之中に存す。  
牡丹餅棚に在りと雖も、取るは人なり。運命天に在りと雖も、成功は人に在り。理想あり、努力あり、進取不息の存する所、成功の到來すべきとは因果にして、千古不磨の大法則なり。

敗者の涙

高木 正三

堤の櫻の綻びはじむ頃、幾多の若人が花に憧れ笑ひさんざめく時、烈日地を焼く眞夏の頃、幾多の青年が海よ山よと梓を運ぶ時、黙々として練習に精進した吾等ナイン！！

天運遂に吾に利あらず、一敗地に塗れた。只涙流るるのみ。而し無益とも思はれじ。

## 雨

本間 壽夫

雨が二三日降りつづくと、誰しも憂鬱にならざるを得ない。然し此の雨に對して、私はある教訓をあたへられた。此の雨雲の彼方にはあの太陽が赫々と照り輝いてゐる。

此れを思ふ時憂鬱はどこかへ消えて、或一つの希望が浮ぶ。故に人はすべからず、

bright side を見よ。  
dark side を見るべからず。

## 努力

齋藤重之助

人生は力の戦場、然り。奮闘努力なくして何が出来よう。男子の本領。謂はずと知れたこの四字。此れが又どんな小さな事に於ても、缺くべからざる物であるとは、誰か知る。誰か其の偉大さを感じざるを得まい。成功は人の才、不才に依ると言ふ。努力なくして如何に才ある人でも、己の才に許り依頼して居たら、「蝸牛富士にも登らば登るべし。」

## 自然

五 丙 吉 田 知 二

自然は偉大である。碧空に聳ゆる山巖、その山麓を流れる大河。何れも我等に偉大なる感じを與へる。然し顧みれば足下に咲いた一輪の花、その可憐な花もやはり大自然の恵みを蒙つてゐるではないか。自然は雄大にして而も微細である。

## 鍛錬

福島好文

人の體力を磨り減らすものは、労働ではない。怠惰だ。人の精神は、使用する事によつて疲勞するしかし逸樂によつて消盡する。

それはちやうど挽白のやうなもので、夢を入れれば粉を挽くけれども、夢を入れないと、それは磨滅してしまふ。

## 自覺

鯨井正雄

現今我國は國事多難興亡の岐路に立つ。思想に經濟に又重大問題の滿洲事件に、而し我等は我日本人なりと自覺を以て邁進せば國難の叫びは自から氷解せん。それ即ち神勅の旨を守り明治大帝の大御心にそひ給ふ所以である。

## 感

松永義司

時代は常に變轉してゐるが、今、ゆがんだアメリカニズムの變質な世相が近代色であるのか。それは刺戟的で殺伐だ。正に若人の理想はそれから攪亂され様としてゐる。此に於て吾人は強く確たる意志の所有者たらむ事を絶叫してやまない。

## 秋

磯部 昂

コバルトに澄んだ空に漂ふ浮き雲も黄金色に輝いて、紅葉の山は夕日に映えて一入紅を増してゐる。柿の真赤なのが目に付く。小嵐が庭の落ち葉を追ひ散らして行く。櫻の葉がやつと小枝にしがみついてゐるのも、何んだか物寂しい。

五八  
松村辰男

平和論者は多數ある。吾等も亦平和を好む。併し世に闘争は絶えない。敵對味方、果ては味方對味方。斯くして世は崩れ且つ進歩する。平和は好むが闘争は避けられない。且つ闘争に依つて總べてのものは生れて来る。闘争は萬物の文である。

## 泥棒事件

若山 力

「泥棒が外に居るぞ。」と兄を呼び起した。外は雨と風だ。寝ぼけ眼でクラブを握つて、スイッチをひねり電燈をつけた。おそる／＼カーデンを開けた。窓越しには居ない。窓を開けたが居ない。さつと風が窓をうった。「なんだ風だ。」と二人はつぶやいた。

## 意志

新井六郎

人は鞏固な意志の保有者たれ。基督が榮華の都を脚下に眺めつつ高山の頂にサタンを叱たせるその確固たる意志ありてこそ萬事達成される。「サタンよ退け」人間の一生の運命は此の瞬間に定まる。我等。いざ戦はん。牢たる意志の力を持つて。

## 三猿公

高澤晋之助

三猿公が目、耳、口に手を當てゐる。是は謙讓の美德を表はした精神だ。然し今の世相に是で善いか。否此の三猿公に顕微鏡、受信機、マイクホンと與へねばならない。則ち人が社會に立つによく見聞き、又最善の自己發衛表せねばいかんのだ。

## 敗れた者

齋藤 博

敗軍の將は兵を語らずとか。野球、庭球、卓球にしろ、敗れた者は、云ひ譯がしたい。實際、そこに體驗せる者でなければ味は、れぬ苦しみがある。そこをがつちりところこにこたへて、黙々と雪辱の意氣に燃えるのが、現今青年の取るべき道だ。

## 若人と趣味

根岸 松三

趣味のあるものには餘裕がある、餘裕があれば志も自然大きくなる。従つて悠々としてよく勉強し、よく楽しみ、一步一步と理想を實現して行くことが出来る。故に希望に燃る若人は何か一つの趣味により、心に餘裕をもちたいものである。

## 努力

椎野節三

春!! 菫郁爛漫なる花を咲かせ、秋!! 多美美味なる實を結ぶ樹木も、四季時に缺を入れ根に培えばこそ花實共に、愈其の美を増し、其の量を増すなり。美を増し、量を増す。それは何者ぞ。努力だ。我等學窓に在る者は努力を置いて他に何物もない。努力、努力だ。

## 登山と人生

澤田光三郎

登山の快味は何か、種々な困難險峻を征服して頂上に達する事だ。峻嶒で無い山は頂上に達しても面白くない。人生も亦、此の通りだ。平々凡々と暮すよりは、大きな困難の中に巻き込まれて、其れを征服して行く所に、人生の快味があるのだ。

隨感

佐藤 正次

政治家實業家等の人々が自己の歩んだ成功への道を、我々に、眞實に、偽りなく吐露してくれるだらうか。

昨日の眞理が今日の誤謬となる現代の社會に、老人にとつて「榮える道」であつても、果してわれ等青年にとつて「榮える道」であらうか。

實力養成

元島 政晴

成功!!それは我が最高の宿望だ。最高の宿望を遂げるには如何にすべきか。實力を養へ。昔の世の中は腕力に左右された。然しこれからの世の中は腦力に支配される。

諸君よ!!専ら實力養成に突進しようではないか。それこそ成功への近道だ。

團結

持田 高良

我々團體に於て一番大切なことは何か? 團結である。我等の先輩が日清・日露の戦に勝ち得たのは何の爲か? 團結の力だ。我等は一瞬もこの心情を忘れてはならぬ。團結の力がゆるめば滅亡の深淵に落ち込む。團結せよ。團結は我等の力だ。

野球生活より

小久保 正美

「勝てば官軍負ければ賊軍。」

何んでも勝たねばならぬ。不正の勝利でなければ、

「勝敗は兵家の常なり。」

意氣!!熱!!自信!! これさへあれば勝利は得られる。

成功は努力にあり

矢島 邦雄

努力と成功とは重大なる關係を有す、努力ありて始めて成功なるものが生れる。その成功たるや眞の成功である。努力なき成功は何等の價值なし。前途ある若人よ、努力せよ。成功は吾人の最大目標である。努力せよ。若人よ。成功せんと欲せば。

苦有れば樂有り

石井 甚市

苦しい登り坂に遭遇すれば必ず其後には樂な下り坂が来る。人は生涯此の坂を登つたり下りして居る様なものである。彼の難關と言はれて居る入學試験も其一つである。苦しい登り坂を越し得ない者は永久に樂な下り坂を得る事は出来ない。樂ならんと欲する者は宜しく苦しむ可し。

獵

毛呂 政雄

太陽も笑ふ秋晴れの日、今日こそはと思つて銃を持つて山へ行く。突然羽ばたき激しく鳩が飛び出す、瞬間ドカンと銃の音さしもの勢激しき鳩もすりと落ちる。何と快よい事ぞ、此れは如何なる金銀にても買へ得ざる快感である。

松に寄す

日野 庸夫

「松は男の立ち姿、意地にや負けぬ。吹け吹け風、枝は折れよと根は折れぬ。」で辛い自然の暴威にもめげず、巖頭に聳ゆる汝こそ、若き血と熱

「苦しい時は敗戦の日を思へ。」  
倒れたならば立て!! 倒れるまでやれ!! さうして最後の勝利を得よ。

晴天曇天

倉上 榮一

あらゆるものが美しく見え明るく見える。これは晴天の日だ。いつも心の中は唯ほがらかに唯愉快である。あらゆるものが陰氣に地獄の奥に迷ひ込んだやうに思はれる。いつも心は暗く唯不愉快だ。これは晴天と曇天に感ずる私の心情である。

秋

神沼 新十郎

秋は萬物に存する。一年のうちの四分の一ばかりが秋ではない。もう五年生の一年間は、中學生としての秋だ。十一月も半ばになると、田の畔に立つて、今年の收穫豫想する農夫の様に、五年生の心は過去四年間の收穫を省みるに忙しい。

秋宵

小川 正典

夕食後庭へ出た。熱した頬を冷風が撫でて快い。森羅萬象悉く暗の中に靜寂を守り、自然は限りなき眠りに落ちた。忽ちにして靜中動あり、時を忘れた百舌のけたましましい一聲に、はつと我に返れば、冷氣懨然として身にしむ。お、秋も暮だ。

希望と努力

笠原 満

「おほぞらにそびえて見ゆる高嶺にものぼれば登る道はありけり」と明治大帝の御製にある。我等の希望は多種多様であるが、それに向つて、

野の人

青木 三郎

秋晴れの夕、疲れた身體を自轉車に託して田舎道を歸る。左右は只見る一面の黄金の波、その間で人も馬も一心不亂、いまわの際のやうな太陽の慈光を受けて、營々として勞働にいそしむ。お、此の勞苦、此の努力、まだまだ御國は萬歳だ。

至誠

小池 辰男

天地神明と言へども、人間の至誠を以て動し得る。誠は何人も修養の第一に置かねばならぬ。畏くも軍人に賜つた御勅諭に、「一の誠心こそ大切なれ」と仰出されて居るが如く、日夜至誠精進するは、軍人延いては國民精神の發揚である。

山村の夕

須藤 健次

大地の上に夕靄が下りて來た。黄昏の山も森も疲れた呼吸を靜かに吐いてゐる。村の夕暮、白い煙が漂ひながら軒から林へ山へと流れて行く。そして茫々と連なる武藏野の豊かな大自然に育まれて村は今靜かに眠る。今宵も早や暮れる。

晩秋

志村 典

秋風梢を鳴らす晩秋の候。一葉落して秋を告げし桐も早や二三の葉を残すのみとなつた。澄みきつたコバルトの空は何處迄も高く何處迄も廣し。潮湧きかえる相模灘、沖に漁小舟の漂ふを見下す薄紫の富岳も紅の

波の上に浮いてゐる。

### 面白きは人の性質なり

原 常 雄

言つてならぬ、行つてならぬと言はれた事は、言つて見たく、行つて見たいのが人の性質なり。唯吾人には良心ありて惡を抑へ、善を進めるに過ぎない。もし此の性質無くせば世界は平和であらう。併し發展は望めない。面白きは人の性質なり。

### 科學の進歩

高 野 光 臣

科學の進歩—それは飛躍すべき未來性を多分に包含する。永遠の宇宙—人類を永劫に存在させるもの—これは科學であらう。翹望!!それは現實に轉化する。然り、科學最高の理想は—死なき宇宙、懷疑なき萬物の存在—を具體化し、實現するものならん。

### 勇 氣

萩 原 貞 二

事業に、試験に、失敗したと言つては自殺する。現代人の通弊は勇氣の缺乏にある。見よ!!「我に七難八苦を與へ給へ」と念じた戦國時代の大丈夫の氣魄の凛烈さを。英氣の發する所、向上の前途は潤然として開ける。起て!! 進め!! 我等の前途には光明ある許りだ。

### 順 應

黒 瀬 靖 一

時計が狂ひなく時を示すとき信頼される様に、人間も生活の上に正しく歩む時信頼されよう。規則ある生活は學ぶ點なり。然し必要に應じてハンの運びに連れて流れ出るインクの様に—臨機變に應ずる事の出來得るの必要ではないか?

### 反省心の根據に就いて

六二

西 木 正 孝

自己を正しく認識し得られる人は偉いと私は思ふ。或る動機に誘發されて其結果の悪い行爲を私が遂行したとする。此の時後でそれを批判すると屹度私の心持の働き方が變化するのに氣付く。此の働き方が自己の良心に依るのが反省である。

### 凋落の秋

柿 沼 正 夫

一風毎に木葉は振り落され、時、正に凋落の秋である。春風と共に萌へ出で、花咲く春に華美を競ひ、炎熱の夏に豪壯を誇つた、萬木千草も遂に此の悲哀の時に遭遇したのである。想へば路傍に散る一葉にも人生の流離轉變、諸行無常の理を覺るのである。

### 秋の雨

金 子 博

ざあと降る雨の音に、はや晩秋の氣分が現はれてゐる。そしてそれが白く煙つて居る様に見える。戸外のは、みんなじよんぼりとした姿でただ雨滴に打たれてゐる。道行く人には笠を斜に淋しうに念いで行く。道端には何ももの音もしない。

### 憶 が れ

井 桁 宇 一

青年は憶がれの世界に生きなければならぬ。呪咀・嫉妬・羞恥・倦怠を乗り越えて明るい憶がれの世界が青年の住家だ。憶がれの日常は極めて淋しい生の歩みである。燃ゆる希望をいだいて眞の憶がれの世界に生きよう。

### 音

戸 田 俊 夫

秋の感覺は音に誘はれる。紅葉凋落の音、洩れ来る農家のいねこきに、秋季演習の蹄、小銃のいさましさ、すべての諧調は思はぬ感覺を生み、死の静寂に吐息する如く消えなるとして小川をたどり、野をさまよひ林を渡つて宵にふるへる。

### 國 難

鈴 本 辰 雄

今や我が國は第二の明治維新とも言はるべき國難に遭遇してゐる。現代の社會人は正義を守りとして事件を解決せんとしてゐる。我等は斷じて滿蒙の權益を放す勿れ。滿蒙は我等の生命線である。故に現代青年は舉國一致して國難を打開すべきである。

### 人 格

清 水 保 則

人格!それは流轉變化の極まり知れぬ我等人世の旅行者に、人間的苦悶を解決し、眞に人間的價值を知らしめるものなり。故に我等は最も高尚なる人格所有者を理想とし、日一日とそれを確實なるものにすべく努力を要す。其れが我等の命だ。

### 若 き 農 夫

會 原 康 夫

見渡せば天涯遠く、耕せば無限の荒野。日暮れて道遠し苦き農夫の行途。あゝ葉落ち草枯れて荒蕪たる學びの曠野。一振り、二振り、鋤が光る。希望に燃へて力一杯耕す農夫の顔に月が射す。あゝ僕等は春待つ若き農夫だ。強い感激を待つ若き農夫だ。

### 勞働への憧憬

關 田 桂

朝早く星の下を野に出かける。大自然に接して働く大百姓さんは實に何とも言へな尊い姿である。働きながら詩歌をつくり、詩歌を作りながら作物を取る。古人は言ふ「勞働は神聖なり」と。吾人は言ひたい、「勞働は常識なり」と。

### 魚 釣 り

島 山 豊

「魚釣る人は馬鹿だ。あの廣い海河に糸を垂れて待つてゐる。」と言ふ人が居る。併し釣る人はその糸を、水加減を調べ、場所を調べた後垂れるのだ。人が此の廣い世間で自分の行く道を選ぶのと同じだ。そこには多くの努力が拂れてゐる。

### 理 想

加 藤 正 之 助

理想は高ければ高い程我々人生の歩み、一步一步を最も眞剣に最も高尚に導くものである。古今東西の偉大なる文明文化は何に依りて生れたるか!! 此れ尊き此の歩みの結晶に他ならず。故に吾人は高遠なる理想を瞬時も頭から離す事は出来ぬのである。

### 既成宗教は没落するか

長 谷 川 重 正

既成宗教は、現今の時代思潮に耐へず、没落の運命を辿ると言ふ説が増した。果して没落するか。過去幾千年人心を感化し、糾合した宗教が思潮に流されるか。宗教は根本精神と、背景道德に依り、總べての關を突破し、必ず永久不變であらう。

### 人 生

松 本 磐 雄

雨一滴一滴も壩となり、山人の飲食に餘る泉も谷となる。谷壩集つて

廣き利根川、荒川となる。我が人生も而り、磐岩に遮れてやう／＼落ちる谷、小石を押し流す流れ、それは皆大海を目指してゐるなり。廣き流れに突進せよ。如何なる艱難をも打破つて。

### 他人の批評について

小林 政夫

「夜目、遠目傘の中」見方見る場所に依つて醜女も美しく見える。どんな人間でも善い所もあれば悪いところもある。だから他人を評する場合には種々な方面から種々な方法で見なければその人を損ひ自分をもそこなふ事になる。心すべきことである。

### 利根の四季

五 乙 村岡 彌市

どこまでも長く續いた堤を越えて、畑を越え、更に草原と砂原とそして、小さな流れを越えて、漸く利根の本流に到る。北から西にかけて、那須火山脈に属する山々が走り、その間に越後連山が茫然と白く輝いてのぞいてゐる。磨鉢をふせたやうな男體山が東北に聳まつて、麗かに晴れ渡つた小春日和になど東空にやさしい姿の筑波山が浮いて見える。春は爛漫たる紅や黄の花に埋もれ、夏は茂れる草々の翠に潤され、秋は招く尾花に飾られ、そして冬は皓々たる積雪に蔽はれる利根の川原である。堤にちたほらと若芽が萌えはじめて、桃の節句が近づくと頃から利根の川原は愈々趣を添へて来る。籠を手にして餅草摘みに友を誘つた可憐な子供達の歌聲が堤の其所此所から青い麥畑の中に静かに流れて、聴て水の音にのまれてゆく。枯れたやうに草原を匂つてゐる茨の節々に緑の芽がみづみづしく萌えはじめる。その草原の間を流れてゐる小川に白く美しい猫柳のび／＼とした姿をうつす。對岸に亂れ咲く櫻花は風に動かぬ雲のやうに流水に匂ふ。春も酣となつて、堤も草も紫雲英、菫、蒲公英

英、月見草などに蔽はれて、片々たる胡蝶の陽炎の中に舞ひながら消えゆく頃は、利根は陽氣な樂の音に閑眠を食つてゐる事であらう。空からは天人でも舞ひ下りさうである。小川の蘆荻の間に囁く小鳥、空に歌ふ雲雀、眠むさうな野牛の鳴き聲、網を操る舟子の姿、それらが楽しい春の利根川原に繪のやうに展開されて行く。霞の中に釣竿を撐いで消えゆく姿も、そぼ雨降りて、晝顔のほのかに匂ふ野を追はれ行く牛の姿も、ふさはしく春の利根にうつりゆく。

蛙の聲が遠くきこえて来る頃は堤も草原も凡て緑に蔽れて、畑のみがカーキ色に輝いて、實つた黄金の波を漂よはす。筏舟が長閑な船歌と下つて行く。釣する翁が知らずに眠つてしまひさうな心地よい初夏も、間もなく極暑の盛夏となつて、毎日毎日水泳の人々がやつて来る。彼等が日にやけた黒い肩に夕日をうけながら過ぎ去つて、夕闇が静かに襲ひ、涼風の肌ざはりよい夜となると、音もなくすだく青白い螢の光を慕つて、人かげが幾つもあらはれる。村ではお盆の寺の鐘が長く餘韻をひいて響く頃、利根はすつかり夏姿となつて、珍客を迎へるのに違がない。下風に送られて、帆かけ舟が三三五五上つてゆく田舎風景は多感な詩人の眼を潤さしめる。緑の丘に見えがくれする、あでやかな都人の姿は清涼な河風に蘇生の思ひをなし、砂原を彷徨ふパラソルは水上に跳ねる魚に見とれ、無心な子供達は渡守の陽氣な晴れやかな歌聲に睡氣を催す。

鎮守の森の蟬の鳴き聲が漸く衰へる頃、川原には初秋の風がそよ／＼と薄の穂に音づれて、黄ばんだ草原が寂寞たる姿に變つてゆく。秋の三夕暮の情景を残して日が西山に没し、廣い薄原が夕闇に静かに包まれて、穂のみが空に白く浮いて見える。遠くからだん／＼近づいて来るらしい尺八の淋しい音が十五夜の月が徐ろにあらはれる。青白い光が薄原一面にふりかゝつて、その根本から澄みきつたコホロギの音がゆれ上つて来

その平凡なるふるさとの美。  
それは懐かしい自然の聲であり、目に見えぬ其姿である。力強い自然の氣魄である。

未だ水のつめたい小川のほとりにゆら／＼と然ゆるかげらうを見る時、或は暑い夏の夜にくつきりと浮かんだ月見草を見る時に、そして秋は風もないのにほろ／＼と散る木の葉を見る時に僕は其所に潜んでゐる強いふるさとへの愛着の心をはつきりと意識する。

ふるさとならば味へぬ美を見出すのだ。

何時の夏だったか僕は信州街道を香掛から輕井澤へかけて旅行した事がある。

美しい夕方だった。

紫色にかすんだ澄んだ空氣の中に山國特有の懐かしいにほひを吸つて歩む足元に名も無い美しい花が咲いてゐた。黄色い花だった。その蔭にちえる／＼と鳴く蟲の音がたまらないさびしさを僕の胸に與へた。

それは美しい自然だった。併しそれは單なる美しい思ひ出に過ぎないのだ。あの雄大な自然につつまれてゐた僕の心に蟲が與へて呉れたさびしさは矢張り懐かしい故郷の想ひだった。やるせない旅愁だった。永續の美。飽かざる美。それは單調なるふるさとを除いて他に求める事は出来ない。

どんな楽しい生活をして美しい所に住んでも故郷を離れた生活は矢張旅の延長に過ぎないのだ。  
結局落ち着く所は懐かしいふるさとだ。

烈しい生活に絶へざるうるほいと懐かしさを與へるものは平凡なる彼等のふるさとを置いて他にない。  
支那の語に「錦を着て歸る」といふ言葉がある。

る。堤に立つ人々は廣い川原を眺めて、遠國の友を思ひ、薄原にコホロギの音をきく人々は蝶、螢の過ぎし季節に立ち返り、水邊にうつる月を眺める人々は純情な心を洗ひ清める。砂原に彷徨ふ人々は堤を眺め、薄を眺め、水邊の月を眺めて、胸懷にしみわたるまで月光にひたりながら「うちむかふ、月は一つのかげながら、浮ぶは千々の思ひなりけり」の歌人の心情を今さらのやうに味ふ事であらう。

秩父の峰に日が沈んで、野を焼く煙がだん／＼に枯れゆく薄原に棚引いて「俺は河原の枯れ薄、同じお前も枯れ薄……」といふ敗類的な淋しい氣がうかがはれる。が落花の舞ひ、蝶の繭へるやうに降りしきる雪に川水だけ残して大きく二色に分別された銀世界の利根には全然異つた生きた趣がある。花の春、緑の夏、月の秋を總合し、超越して展開された冬景色は眞に人目を眩せしめる。人かげもなく、獨り跳ねまはる小犬に、驚いて飛び立つ小鳥が日に輝くのも美しい。お静かに御座れ、夕陽いまだ残んの雪」と故人のうたひし夕暮も獨りには惜しい感じのする、秋にもまさる情景である。除夜の鐘に年が暮れるやうに利根の雪の日の夕暮は淋しく、そして愉快のやうな感じがする。

四季のめぐりにつれて趣の様々にかはりゆく兩岸の美しさと、いつも豊かな水を洋々と湛へてゐる利根は我等の友であり、師である。我等は常に利根を思慕してやまない事であらう。

### ふるさと

五 丙 曾原 康夫

コバルト色に明けて紫色に暮れる連山を遠く眺めて單調なる歩みを續けてゐる武蔵野に僕は心からの讚美を惜まない。  
平凡なる自然の中に生を受けた平凡なる自然の子は矢張り平凡なるふるさとを愛するのだ。

併してこの錦を着て歸る本人は自分の出世を人に見て貰ふ爲にのみ歸るのだらうか。人にほめられたい爲に歸るのだらうか。

僕はそれのみでは無いと思ふ。

烈しい業務にともすれば忘れ勝になる自分の心に懐かしい愛着と新しい思ひ出を與へる爲に歸るのだ。

ふるさとの自然は其雄大なる翼で彼等をつつみ、彼等を元の純真なる自然の子に返すだらう。

純情に戻つた彼等の心には新しい希望と強い躍進の意氣が宿されるのだ。

ふるさとを失つた者は淋しい。

ふるさとを忘れた者は悲しい。

ふるさとよ。

お前はいつ迄も僕をその暖い両手でくるんで呉れる。

淋しい僕に嬉しい生の歡喜を與へる。

ふるさとよ。

お前を思ふ時僕は強い。

お前を慕ふ時僕は楽しい。

完

## 小針沼の自然

五 丙 小林 政 夫

我が搖籃の地の四季を彩るもの、一つは何とも言つても小針沼だ。春が朝な夕な薄霧に誘はれて日一日と平和な農村に近づく頃、周圍一里餘の沼の水はゆるやかに満々とたゞへられる。岸一面に伸びくした葦の芽が紅色の根から吹き出すと、小さなめだか水面に浮び出して目に見えぬやうな波紋を畫きながら遊び廻る。

そして長いすみや陽炎が岸の木々、小高い丘、黄色な菜の花の畑、黄白入りまじつて咲くたんぼ、これらの上に立ちめぐつて、雲雀は高らかな歌を歌ひ始める。

此頃日當りのよい沼の岸でぶん／＼たんぼの花から花へ飛び廻る蜂のうなりを聞きながら、可成り離れた里からの鶏の聲を聞くのは格別長閑で眠氣さへも催はす程である。

數年前までは忍の城下で打出す時の鐘を此のほとりで聞く事が出来たが、今はあの抹消的なサイレンに變つて餘韻を長く引くあの鐘の音、鐘の音が沼の水に溶け入るのか、それとも沼の底から幽かな音が浮び出して来るのか分らないやうなつかしさはとうてい味ふ事が出来ない。

初夏は岸も沼も一面に薄緑に覆はれて、岸の葦間からも沼の眞菰の間からも、萬化のメロデーを持つたよしきりの聲があたり一面に満々て岸を繞つてあちこちに繪を畫く人々がぼつ／＼と見え始める。

夏は沼一面に菱が繁り、鬼蓮の大きな葉が並び、眞白な野生の睡蓮の花が無数に咲く。

此頃の自分達は小舟を泛べて遊ぶのが常であつた。

陸地では耐へ切れない夏の日中も、流石に舟の上は冷しい。サラ／＼と鳴る眞菰の葉ずれば萬金の風鈴にも優り、水中に自由自在に遊び廻る小魚達にはまだ見ぬモナコの水族館もかくの如きものとさへ思はせられる。それと分らぬ岸のパラソルも、此頃でなくては見る事の出来ない風情の一つである。

然し舟に乗つて雷雨に逢ふ程恐ろしいものはない。

夢中になつて遊んでゐた頭上に、何時の間にか一團の黒雲をみつけて、ス／＼と岸を目差して潜き出す早く、バリ／＼と鳴り出す雷鳴には、生きた心地さへない程に思はれる。

然し動かぬ手を無理に働かして岸の番小屋に辿り着き、濡れたシャツをしばる頃、東の空高くハツキリとした七色の虹を見るのは何とも言へぬさわやかさである。

秋近づくにつれて、何所からともなく大鳴小鳴をはじめ、種々様々な水禽が集まつて来る。

そして銃を肩にした人達が犬も一緒に舟にのせて、あつちこつちを漕ぎ廻り、枯れた葦間から突然耳元に銃聲を聞くことがある。

此頃は空も水も眞青に澄んで、太公望の天下でもある。

そしてこれ等は柿の葉の色づく頃から、曉の庭に眞白な霜をふむ頃迄續く。

冬近い長雨の後には水嵩ました沼面から、一丈近い土手迄も氷のやうな氷を吹き上げる。

更に冬が深み行くにつれて、次第に水量は減じて遂に黒い底土さへも現はれて来る。

そして魚をとる人々の焼す眞菰の焼が寒いよどんだ空氣の中に立登り、岸の葦も刈りどられるのが例である。

「がいつが笛吹くやうな」さうした風がびゅーびゅーと武蔵野一面に吹き荒ぶと、此沼は狐が棲むとか、數年前沼の藻屑になつた人の泣き叫ぶ聲が聞えると言つて、夜など附近の道を通る人さへもない位である。

斯うして、自然の變化に富み、傳説に富む小針沼は、春から夏、夏から秋へ又更に秋から冬へと變化しつゝ、永久にあることであらう。(終)

## 上野の夜

四 甲 長谷川 精一

省電を降した僕たちは、御徒歩町の驛からはき出された。松坂屋は今日日は日曜なので、開いて居ない。通りを横きつて上野の山の方へ歩き出

した。まだ日は暮れきらないが、電氣裝飾の光りが美しく輝いて居る。

岡野の前を通つて、登り口へ着いた。上へ登つて夜の大東京を見下ろせば見渡すかぎり光の波だ。松坂屋の屋上には花王石鹼の廣告燈が點滅して居る。圓タケの目玉が無数に動く。夏のことだから相當人出が多い。

辨天様を拜んで、貸ボートに乗つた。僕たちは三人づれだつたので四人乗りにした。はじめてオールを握るんだが、さ程むづかしいものではない。舟が多すぎるので、時々衝突させてしまふ。目じるしの赤いカンテラが、ずう／＼と氣持よく滑る。サーチライトが時々、空を這ふ。上

つて電燈の下でよく見ると、スプラツシしたせいか着物がしめつて居つた。入口にはまだ人が押し合つて居つた。

公園の廣場には、やぐらが立つて居る。揃ひ浴衣の人々が、男や女が、揃ひの手拭を頬かぶりにして、まわりを、踊つて居る。夜の更けるのも知らないかのやうに……。

晝の暑さに苦しめられる都會の人々は、夜が何よりの極樂なのだらう。僕はかうして上野の一夜を味はつた。

蟋蟀

四 乙 田中 敏雄

はからずも私は野原にさしかゝつた。柔かい秋の日光が一面に野山を照してゐる。紅葉と變つたあたりの山々は美しく燃えてゐる。私は自然の美景に恍惚として酔ふたが如くあてもなく野路を歩み續けた。ふと氣がつけば踏みしめてゐる大地からは絶えず限りない妙音が聞えてくる。蟋蟀が鳴いてゐるんだ。やさしい呼びかけるかのやうに。彼等はこ

の大地を自分達の家のやうに思ひ、惠まれたものと考へてゐる。

彼等は鳴くことが野邊を賑はかすことが使命であるかのやうに思つて歌つてゐるのであらうか。寸時も休まず自分の使命を果さんと鳴き續け

てゐる。勿論彼等は死といふことは考へないであらう。一瞬々々を歌つて過して行く。次には来る死を宣告する寒い冬の襲來などは少しも考へないであらう。唯歌ふことのみに考へてゐるのである。

かう考へて自分をふりかへつて見ると淋しい氣持もして蟋蟀の身にもなつて見たいと思つた。

彼等はたゞ一向に歌つてゐる。死や寒い冬の襲來などといふすべての觀念を越して、たゞ歌つてゐる。まつたくこれを見ると如何に蟋蟀が自分の使命に熱心であるか眞剣であるかがはれる。

かう思ふと薄命な蟋蟀といふ秋の蟲に過ぎない單なるものも私に眞剣といふことを教へてくれた。

ふと氣がつけばいつの間にか夕方となつてゐる。空はすみきつて山の端の片雲が黄金の色から紅の色とうつて行く處だ。あたりは淡紫となり、だん／＼夜の帳はおりて行く。まだ餘光が中天に明るさをのこしてゐる。ねぐらに歸るのであらうか、鳥が二三羽北の方へと飛んで行く。大地からはまだ蟋蟀の鳴聲が聞えて来る。

## 光

四 乙 藤 井 浩

机に向つてゐるとき一寸の光が蒼白い心に自ら壯嚴を思はしめる光がやや縁がかつたテール掛けの上に落ちてゐる。四角なテール掛けの上に光を受けた部分だけが丸く浮きでゐる。それを見ただけで満足する人間は少ない。ある物を見たとき誰でもその原因を調べやうとして好奇心に操られる。私もその光の落ちた點から次々に光をたどつて行つた。たどつて行く目は蒼白い光に包まれた空氣の中を通る、行くに従つて益々光の世界は縮まつて行く、約二、三尺行つたと思ふ頃、目は光の世界を脱してゐた。

六八

光の世界を脱した目はなにかの一點に來て留つた、勿論それが光の世界を支配してゐる。それは障子の破れたつたと思ふ瞬間外を見やうと言ふ好奇心は遂に總ての自己を覆つた。突如障子をひらいたときも早や木枯に近い秋の風が身一つ出し得る程の間を逸早く目がけて來た。その後を追へはいつの間にか這入りこんだか同じ蒼白い光の今度は四角な世界を生み出してゐた。又前の如くその光の世界をたどらうとしたときそれは餘り世界が大き過ぎた、止むを得ず一度に外にうつした目は更に更に大きな言ふことのできない光の世界を見た。それは月光だつた。

何處の屋根もその中には新らしいものもあらうが古いものもあらうが皆一様な恰も古城の屋根に射す月光を見たときと同じ感あるを想像した。仰いで大空を望めば光の持主である月は走り行く雲間に黙然と控へてゐる。夏に比して餘りにも貧弱なる月に哀れを覺えざるを得ない。然しその投出す光の壯嚴さを比ぶれば月は春にあれば夏にあればこれに及ぶ物はないと信ずる。

時しも肌をつんざく冷風に月に對する欲望も好奇心も惜しくも覆れてしまつた。やがて障子を閉めれば月光は元の如く丸い世界を造つてゐる。

## 余の人生觀

四 丙 神 田 晴 雄

力強い、心も身體も思ふぞんぶんに伸び切り、眞に青年の活動と思はせる夏が過ぎ去り、秋も中半と成つた。庭の木木にさへ秋が一面にはびこつてゐる。さあ俺達の活動も濟んだ。これから嚴しい冬が來るのだ。來るべき運命が來たのだ。靜かに冬の神が迎へに來るのを待たうと、ささやいてゐるやうに、オブラの木木がザリ／＼と黄金色の葉を淡い日光にきらめかしてゐる。ヒラ／＼／＼一つ、二つ、三つ、次から次へ

と木の葉が残り惜しさうに地面に舞ひ落ちると、バラ／＼／＼と吹き去られて行つた。嫌だ／＼もう一度お家へ返しておくれ。木の葉達は悲しさうにわめいた。然しその次には雨あがりのぬかるみに落込んで何時までも動かなかつた。その木の葉はもう永遠にオブラの木には歸る事が出來ないで人に踏まれ、雨に打たれ、終には土と化してすつて、人から忘れられて了ふのだ。然しその中の一葉はヒラ／＼と舞落ちて行くと、ふはり何かの上に降した。突然、「まあ、可愛らしい葉と聲がした。少女はにつこりとほ／＼えんで膝の上のオブラの葉をそつと、つまみ上げると、開いてゐた本の間に挟んだ。そして坐つてゐた階から立上ると、小鳥の様に家の中に消えて行つた。かくて此の一葉は長く少女の本の間に残つた。

人生も此の様なのではないか。母の胎内から生れ落ちて、無邪氣な楽しい幼年時代が夢のやうに過ぎ、希望に満ちて生長して來る時、名將ナポレオンの様な、シーザの様な、或はダンテや、バイロンの様な血が誰の身體にも流れてゐるのだ。そして、人生の最高潮青年時代が來ると、今までの一本道は、澤山な細道に岐れて了ふのだ。此の人生の岐路に立つて、青年達の烈しい、目覺しい活動が展開され、鎗を削り、火花を散らし、今まで氣の附かまかつた霧が次第々々に濃くなつて、やがてすべての物を全く包んで了ふ。その中で青年達はあちらへ迷ひ、こちらへよるけて暗闇が續けられる。

やがて、すゝと霧が音も無く消え去つた後の光景を見よ。或者はナポレオンの道を、或者はバイロンの道を、或ものはミレ、或者は孔子の道を、いづれもばつと桃色に頬を染めて、希望と、幸福に満ちた眼を輝かして進んでゐるのだ。あゝ然し眼を轉じて見よ、其處には何と、戦に敗れた青年達の多くがもだへ苦しんでゐるではないか。誘惑の道を、貧

苦の道を、或は情欲の道を悶悶として一步よろけては倒れ、二歩進んではおちめしさに、勝利の道を得々として歩む者をじつと見詰めるのであつた。そして突然、悲痛とも絶望ともつかぬ聲で、大空に向つて阿阿として大笑した。此の如くして何十年か水の如く流れ去ると、青年達は一人、二人と減びて行つて了ふのだ。然し彼等の中には後の世まで長くその名をうたはれる者もあらう。

然し君よ見給へ、勝利の道を行く青年達の中には、數人の友に取り巻かれて嬉々として行く者もあれば、青年達に嫌はれて一人不平等に黙々と行く者もあるではないか。又、敗北の道を歩む者青年達を見よ。世をうらみ、人を惡み、天に向つて呪罵する者のにも樂しく語りながら行く一團を見受けるではないか。

人生の岐路に到達したる青年は勝利の道を得んものと、種々苦悶煩悶する。青年は人生の一番楽しい時であり且又一番苦痛な時だ。そして彼等の願ふのは天下に名聲を博す、大なる富をきき上げる等だ。然してこれを以つて人生最上の幸福なりとしてゐる。けれども如何なる高位、高官、名技術家、富人とならうとも決して幸福なりとは斷言出來ない。眞の幸福は人に愛敬せられる事だ。例へば君が有名な學者であるとする。君はその學術に於ては何人にも劣らない。然れども君は世間との交際を知らない。人と談笑し得ない。その爲に人々は君の學術に對しては驚異の眼を見はるけれども君自身に對して決して親愛の情を懷き得ない。君は常に一人ぼつちだ。それでも果して君は幸福であらうか。富貴であらうが貪賤であらうが人に愛敬せられる事は可能だ。人は平和を好む。互に愛敬する事が出來得るならば、如何なる困苦に身を置いて居らうとも、その人は生き甲斐のあるのを感じてゐるであらう。然し人に愛敬せられるにはその人自身が常に快活に、無邪氣に、しかも人格の向上につとめてゐる。

なければならぬ。なぜならば、試みに両手で壁を静かに押して見るがよい。その作用に對する反作用として必ず靜かに押し返へされるのを感じるであらう。次に強く押して見よ、諸君は強い反作用を受けて押し返されるであらう。人の感情も此の如し。我が悪い感情を相手に與へたならば、相手は眼を怒らせて我を見返すに異ひない。然し、につこり微笑んで快活に「今日は」と挨拶したならば、相手は必ずや、思はず喜悅の情の禁ずる事が出来ないで「今日は」と答へて呉れるであらう。

要するに人生を幸福に送るには名利を得るではない。人に愛敬せられる事だ。人に愛敬せられる手段として、我等は快活に無邪氣に且も人格の向上につとめなければならぬ。

人生の岐路に立ちてなやむ我等青年は、此の精神を保持して進むならば眞に希望に満ち／＼て目的に突進する事が出来るであらう。

#### はじめて水を泳いだ男 四 丙 木 島 工

昔、まだ、世の中の人が誰も水を泳ぐ事を知らなかつた頃、はじめて、人間の泳ぐ姿を想像して、自分が泳ぐ事が出来たら何んなに愉快だらうと考へた男がありました。

彼は早速神様の所へ行つて、熱心に「泳ぐ力」を乞ひました。彼の願ひがあまり熱心だつたので、神様は遂に之をお聞きとゞけになつて、手にして居られた羽扇から一本の羽を抜き取つてから申されました。

「泳ぎたいと思ふ河なり、湖なりの中に、先づ、この羽を投入せなさい。さうすれば、おまへは樂に泳ぐ事が出来るであらう。それから今後泳ぎたいと思ふ時は、何時でも、わしの所へ來れるがよい、いくらでも羽を遣らう。」

彼は、大切にその羽をポケットに入れて歸る途中、惡魔の心を持つて

居る。一人の、侏儒に遇ひました。侏儒は、其の狡猾な、小さな軀に較べて馬鹿に大きな顔を、石垣の崩れから出して、彼に斯う呼びかけました。

「貴方は今、其の羽の効力を顯はさない場合の事は全然考へて居りませんね。神様だつてさうは信じてよいもんぢやありませんぜ。わたしは貴方を溺死から救ふために一應注意するのですよ。」

「要らないことだ。」彼は、さつさと通り過ぎました。

やがて、彼は大きな河の畔に來ると、例の羽を其の流に投げ入れると、殆ど夢中になつて水中に躍り込みました。すると何うでせう。五尺の軀は、輕々と浮いて、手足を動かす度に、すいすいと氣持よく進みました。何しろ、其の前は、一人だつて、人間が泳ぐなんて事は考へた事は無かつたので、この事は忽ち大した評判となつて、遂に王様のお耳に迄這入りしました。王様は早速彼をお召しになつて、王様の前で、泳ぐやうにとお命じになりました。そこで彼は、一日の猶豫を願つて引き退り、直ぐ神様の所へ参りました。神様は、彼の、斯ういふ譯ですから羽を一つ下さい。といふのを聞いて、お、左様か。と直ぐさま羽を下さると思ひの外、「わしは知らんよ。」とそつぽを向いて了ひました。彼は仕方なく、王様にもう一日の暇をいたゞいて、また神様の所へ行きましたが、矢張り、「わしは知らんよ。」とそつぽを向かれて了ひました。

斯うして、一日一日と延びて行く中、遂々、王様はお怒りになつて、三日以内に泳がないならば、斬首の刑に處して了ふと申し渡しになりました。彼は愈々窮して了つて、最後の、ありつたけのお願ひをする決心をして、神様の所へやつて來ました。神様、何卒もう一度だけ羽をお遣しになつて下さい。一度だけで結構でございます。私は二三日以内に是非とも泳がなければならぬのです。でなければ、あの重い、冷い斧は、

私の頸に向つて打下されるでございませう。」

「また來たのかこの強情者め。わしはそんな約束をした覚えはないのぢや。おまへの首が刎ねられようが何うしようがわしは知らん。おまへの事はおまへの事ぢや。さつさと出て失せい。」

彼は萬策がつかはれて、憎々と歸る途中、またあの侏儒に遇ひました。「愈々大變な事になりましたな。へッへ。君は私の忠告に少しも耳をかさないからですよ。何しろもう打首と定りましたな。君は王様の斧を見た事がありますか。何なら、斧の切味を説明いたしませうか。」

「やかましいつ」彼は怒鳴りつけました。「泳ぎ損つて溺死する方法だつてあるんだ。」

彼は、この三日間に、出来るだけ泳ぎの練習をしてみようと思つて考へたのです。そして非常な決心をもつて河に這入りました。

彼は何處深い深い河底へ沈んで行つたことせう。併しその度に彼は必死の力を罩めて、河底を蹴つてやつと浮び上りました。そして其のたびに、柳の根に縋つて、飲んで居た澤山の水を吐き出さなければならませんでした。

斯うして其の日も暮方に近づきますと、また例の侏儒が惡辣な顔を出しました。「ずい分苦しいでせうね。これで泳げる見込があればですがね。」

「苦しいたつて仕方がないや。やれるだけやるんだ。」彼は柳の根から離れて、また深い水の底へ沈んで行きました。

「へッへ。御苦勞さまだ。明後日の首斬りが見物だわい。屹度赤い血が出なくて、水ばかり出るだらうよ。」侏儒は、水中から出る泡に、嗤つて何處かへ立ち去りました。

次の日も暮れようとなりました。するとまた、侏儒が來て、「大分お疲れ

のやうですな。皆神様の嘘つきのせいですぜ。私の——」

「少し黙つて居て呉れ。」彼は前日の如く、柳の根を離れて沈んで行きましたが、今度は沈むまでに、相當の時間、浮いて居る事が出来たのです。

次の日、愈々王様の申された期間の切日です。彼が、柳の根につかまつて、息を入れて居る所へ、彼の侏儒がやつて來ました。

「いよいよ今日ですね。君も神様とあんな約束さへしなければ、こんな苦しみは知らなかつたらうにねえ。」侏儒は柳の根を多分に含んだ同情を寄せました。

「おれは、神様との約束がなかつたならば、恐らくこんな愉快は知らなかつたらうと思つて居るんだ。」彼は柳の根から、つと離れると、すいすいと、難なく泳いで行きました。彼は立派に泳げるやうになつたのです。「やつ。これは偉い。全く驚きましたね。貴方は實に神様以上ですね。遂々自分の力でやり遂げたんですね。私は毎日あなたの奮闘ぶりを見て、こんな嬉ばしいことはありませんよ。」侏儒は仰山に言ひました。

「いや、三日の間に神様が教へて下さつたのさ。退いてくれおれはこれから直ぐ、王様の御殿へ行かなければならぬのだ。」彼は玉のやうな水をからだから拭きとると、愉快さうな足どりで、すたすた歩いて行きました。

#### 亡き弟の追憶

四 丙 小 林 正 男

秋の夜は靜かに更けて行く。今や何の物音も聞えない。青白い月光が天井裏の窓を洩れて、しめやかに、夜霧の様に、私の方にそろ／＼と這ひ寄つて來る。私は何の氣なしに勉強に疲れた頭を上げた。前には亡き弟が淋しく私を見守つて居りました。清く澄んだ月の光を受けて其のに

つくりと微笑んだ弟の無邪氣な顔が一段と青白く浮立つて見えたのでした。私の眼は弟の無邪氣な顔を追ひながら私の心は遠く過去の追憶に走るのでした……。

九月四日。其れは私に取つて到底忘れる事の出来ない日でありました。私は未來の輝かしい希望に燃えて受驗の途に着かんとして居りました。その時は最早弟は胃腸の爲に大層重態でした。親族一同皆弟の幼なき體を取巻いて何となく不安の空氣が漂つて居りました。けれど私の登校の聲を聞くや私を枕元に呼んで「兄さんもう試験も直ぐだね。今度の試験には屹度合格しておくれ。兄さんの將來を定める試験だからね。」弟はこんな事を言ひつゝ喉の渾を醫する爲に藥を飲んだ。僕もこんなに悪くなかつたら一緒にいきたい。弟は靜かに瘦衰へた目を輕く閉ぢて吐息をついた。私は悲しきで一杯になつた胸を抱きながら言つた。「敏男そんな事心配するな。一生懸命やつて這入るから。」「きつと」「あゝ」と石の様に固い決心を抱いて氣笛と共に車上の人となつた。弟あ可愛らしき弟は私の事を心配しつゝ幽明境を異にしてつたのでした。秋は未だそぞろに暑い長月の始め矢車の花の一輪二輪と淋しく散り行く頃でした。悲しき中に翌年私の成功を告げたのでした。可愛らしかりし弟。微笑せる弟。心靜かに永眠してくれ。そして大原の墓に。雨よ霧の如くに靜かに降れ。風よ我が呼吸するが如くに靜かに吹け。而して我が弟の永夢を覺醒させる事勿れ。

私は一人机に凭れて限り無く流れ落つる涙と共に淋しくかく眩いたのでした。

## 冬の想念

四丙 坂上辰夫

私は自己自身の姿の一面を判然と視つめ得る様に感じられる點に於て

冬の季節を熱愛する者の一人である。一日と秋の日が深まつて行き、やがてうすら寒い初冬の日が近づいて来るにつれて、私は他の季節のそれとは著しく異つた冬の想念が次第に頭を擡げて来るかの様に感じられる。それと同時にこの二つの全く別種の想念が相交る數日、或は一週間にわたつて、この二つの想念の間の差異を何等かの方法で埋めようとする努力が、私としては笑ふ事の出来得ない大きな矛盾を持來す事さへある。併しその間に、自然の斷斷ない變化は徐に進んで、四方の景物は總べて木枯の吹荒ぶ蕭條たるものと成り、遠い山の頂には白い雪が見え初める頃になると、この矛盾は急速に消失し始める。

何故かく散々自分を苦しめて居たものが急速に消失して行くか、事實私はその事について考へる前に、私の矛盾を解決する何物をも與へられずして、そのまま冬の世界に放り出されて了つた様な氣さへする。何だか自分の欲する世界を、遠く持ち去られて了つた様な氣さへする。併しひるがへつて私の考其の物に、大なる缺陷があつたのに氣づく時、或はそれより少しく前、小くもあるであらう私の矛盾等には、總べて知らぬ間に無形の解決をあたへて、その中に把握して行く大自然の偉大な力に思ひを及ぼす時、私は思はずあらゆる雜念をなげすめて、この偉大な力の前にひざまづかずに居られない。私は今まで自然の偉大さの僅にその一面を、しかも幻想的に視つめて居たに過ぎなかつたのだ。その幻想たるや飄々として更にとりとも無く、非常に間違だらけのものであつた。

此所に於て私は愕然として、足本から火のついた様にはつとせずには居られない。同時に餘りに小さな存在である私自身に、強い反省をさし向けずには居られない。自分の知識は全く紙一枚のうすつべらなもの。それだけ考へただけでも、私は最早、一刻も怠惰にジツとしては居られ

ない様な氣持に成る。しかも鋭い強い反省の追求追撃はそれのみでは止まない。自分の弱點を眞正面に次から次へと視つめさせられる事は、相當に苦しいものに感じられる。

併しこの所を切りぬけて行けばやがて、苦しむ者の幸福を痛感する結果がやつて来る。私は漸く眞に内省的な、落ちついた、正しい生活が行ひ得られる様に成る。自分の一面を安らかな心持で、まともに視つめ得らるる様に成るのは此の時に、實際は始まるものなのである。眞に内省的な冬の想念は又生活は、反省的な爲に一見消極的に似て積極的なものである。恰もそれは明鏡の如く明瞭なもの、正しいもの矛盾無きものなのである。その間には現實的神祕の力が流れて居る。この力によつて私は現實の世界により良き能率をあげる事が出来る。

一方私は外物そのものに何等捕はれる事なくして、外物に鋭い批判と觀察とを向け得られる様に成る。冬の氣魄は私達の心の何處にか清新の氣をふきこむ。此の故に冬の氣魄に長い間、或は永久に觸れぬ事の出来ぬ人は、年一年とその精神の何處かに沈滞の氣を見る様に成るに相異なる。

夏薄暮の空に懸る星の光と、荒涼として人無き雪原の上、漠々たる闇の彼方に永遠を暗示して輝く星の光と、その神祕なる點に於ていづれが勝るか。私は冬本來の持來す鋭い觀察の上より、むしろ後者をあげるに違あるまい。山の雪の語る神祕、木枯の響に覺る神祕なるものは常にいふ神祕とはいちぢるしく異なるものである。それは私達に自然科學的な感興を更に呼び起すか、深い教訓乃至宗教的な觀念までも呼び起すものではあるまいか。又一方冬はこれ等反省的な觀念に相關聯し或は全くその反動として、私達の心に或る特殊な温かさを附與する。冬に於ける人情の濃かさ乃至人間の淳朴も、この邊の理を意味して居るものであら

う。

## 月

四丙 古郡英治

俺は机にもたれて教課科書の頁を繰つて居たが、何とはなしにとろとろと眠くなつて來た。柔道の試合があつた夜の事である。ほつと氣が付いて、無理に目を開いても、少しも頭へは入らなかつた。俺は無難作に閉じた本の表紙をじつと見つめて居た。俺の心はしきりに俺の眼をせめて居る様であつた。俺の心には色々の雜念が浮んで來た。恰度其の時東の梅の木の間から、そまつな窓を通して月が白い光を机の上に這つて來た。

俺の心の總ての雜念は一時に和げられて、唯月光を浴びて感慨無量であつた。物音一つ聞えぬ更けゆく夜の靜寂の中に時計のセコンドだけが絶間なく耳に入るのみであつた。

俺は堪へかねて、ふらりと戸外に出た。そして皎々と湧へて居る月を拜む様に仰いだ。紺色の夜空には銀の盆かと紛ふ明月の外には、一片のとぎれ雲をも見えなかつた。

俺は何時の間にか歩き出して居た。廣くもない庭を逍遙して居た。何かの蟲がとぎれ／＼に鳴いて居た。一步また一步、殆んど無意識に歩いた。俺は月を仰いで大空に幻想の翼を擴げてゐた。柿の葉が一枚かきささと音をたて、落ちて行つた。是に於て俺は、心に迫る、或神祕を感じずには居れなかつた。

「寒いではないか」父の注意に氣が付いて、急に慌しく家に入つた。朗かな氣持で。

## 登校

二甲 室田進

朝、家を出た。初冬の朝の風がすうつと撫でる。毛穴が立つて耳がちぎれさうだ。今朝は晴れてゐるから餘程温度が低いのだらう。

間もなく公會堂の少し向の建物の前を通る。時計を見ると、七時二十五分だ。少し離れた家の傍で火を燃してゐる人達を見た。あたりたいなあ。僕は斯う思つた。が其の儘通り過ぎて表具屋の角を曲つた。

學校に行く生徒に會ふ。喋べり乍ら行く者、カバンを振り乍ら歩く者等がある。櫻町通りに出た。中學生が彼方に一つ、此方に一つ固まつて来る。何としても寒い、足の先が靴の中で凍つて了ひさうだ。

菓子屋の所を曲る。中學生は餘り見えない様だ。右の方を見る。百姓が田を鋤で掘り返してゐる。手袋をはめずに鋤を握つてゐる。寒くはないのだらうか、いや寒いのをちつと耐へて我慢してゐるのであらう。僕は只でゐてさへも寒い。まして鋤を握つてゐては尙更のことである。僕は何とも言へないやうな心持が襲つて来るのを如何ともすることが出来なかつた。遠くに眼を遣る。電線には雀が幾羽も止つてゐる。見るからに冬らしい感がする。もう學校も直ぐだ。

### 昔を語る跡

二 甲 福 島 菊

初冬の風に枯葉は最早日穂を東へ東へとたなびかせて居る、今は昔、そこに水防小屋といふ、幅二間長さ三間位の小屋があつた。その東北にあたる地に石尊山と呼ぶ小高い丘がある。子供達の演習遊びをする時陣を張るによいといつたやうな所である。其處には今より二十年前石尊神社といふお宮があつて、毎年七月二十八日になると祭典が行はれ村内は勿論近から参拜者が集つて、非常に賑つたと、家の祖母は語る。併し今は村社と合併されて居る。

水防小屋には、三年前物貰ひが宿つて、十二時頃焼きはらつてしまつ

七四

た。其處へ行くと、今まだ残灰があつて何となく淋しい氣分に満たされる。時々其處を通る物貰ひを見て居ると、自分の仲間が焼いたのかなと思つて通るやうに見える。

石尊山へ登るには、帯の幅位の道を曲り曲つし頂上に達する、其處は一坪位で中に一つの石碑が立つて居る、それに石尊神社之跡とかすかにほつてゐるのが苔の間からのぞいて居る。

僕は一月十五日には、必ず其處へお参りに行く、そしてその處を見る。昔の賑はしさを想像せられる。

### 未 明

二 甲 村 山 恒 房

今朝は何とも言へない明るい朗かな氣分で私の心は包まれた。今日は僕等にとつては一番楽しい日曜日だ。

起きて廣い庭を眺めると、大きな／＼酒桶が黒く並んでゐる。僕のお祖父さんの家は酒造業をやつてゐるのだ。その大きな桶を洗つてゐる若い男や、中年の男が数人薄黒く見える。お祖父さんはその監督をしてゐる。桶の中でギョーコ、ギョーコ音がする。湯煙が濛々と立ち、白い生暖い空氣の中に僕の體は包まれた。包まれたと思ふと又白い空氣からぬけ出た。すると急にひやりと寒さを覺えた。

空には未だ星が輝き、月も照つてゐる。ゴーンゴーン、お寺の鐘が鳴つてゐる。一番鳥が鳴いた。

夜は白々と明け離れて行く。空に輝いてゐる星は一つ、二つ、と次第に消えて行く。西の空には今尚残月が淡く弱い光を放つてゐる。

### 遠 山

二 乙 長 島 英 一

自轉車のハンドルを握つてゐる手に、つめたい朝風がひや／＼と當る。

しめつぱい路を走つてゐる自分の自轉車から、北の方に眼を轉じて驚いた。更にふりかへつて、西方の秩父連山に眼を向けて見た。もう雪が遠山には降つたのだ。再び北の山々を見た。一面に廣々とした田の果の、幾多の小さな森、その間々の人家等を過ぎて、もつともつと彼方に起伏してゐる薄青い山々の、中程より頂までの間にもつともつとある眞白い銀の様な雪が、上の廣々とした青空に對して、くつきりと浮き出た。

もう路の兩側の草に霜を置き、山の頂に雪を載せる時侯となつたのか。曉の日光を浴びた一きは高い山は、何と云ふ山だらうか。眞白ないたゞきは他の山々を従へてゐるかの様にぐつとつき立つてゐて、他は全くうすら寒いやうな感じがする。東の方にはちぎれ／＼になつた綿雲が漂ひ、眞赤な太陽は、雲間にだん／＼と遠くの山々を照し出して行く。此の間の風もあの北の山々の頂から、吹き下したものであらう。

今、太陽はきら／＼と輝き、山々はばつと明るく、朝露にしめつた四邊の景色や、眞青な空の色に比べて、何とも言はれぬ清々しい氣持になつて、その景色の中を自分の自轉車は快い音を立て、走つてゐた。

### 静 寂 の 夕

二 乙 三 浦 佐 久 治

「ゴーンゴーン」と静寂の音波を湛へて村寺の鐘が夕暮の空氣を押し切つて鳴り始めた。「ふ」と時計を見ると四時半、日は最早寺の敷蔭に落ち入つた。百姓のお爺さん達は手拭を頬拭りにして手首を縮めて寒い秋の北風を切つて家路に急ぐ。稻を車に山程積上げて挽いて行く百姓も見え。自然に四邊が暗くなつて来る。晝の間を楽しく遊ぶ小鳥達も、皆めいめいに巢に着いたとみえて一羽も見えない。

家の者は皆火を懸しがつて火鉢に燃えて居る火を圓く取圍んで離れない、私は臺所を見ると未だ自轉車が入れて無い。裏庭へ出ると滿々たる月

は何時か紺藍色の空に昇りて照り輝き我が家の物置のトタン屋根が人工でも磨き掛けた様にテカテカと光りを受けて居た。満天の星はキラキラと光り庭先の木の葉が絶え間無くかき音を立て乍ら落ちて居る。此の時私は秋の黄昏の寂しさを感じた。自轉車を家に持入れて火鉢の側に坐つた。表通りも全く静かになつた。

### 窓 の 彼 方

二 乙 根 岸 信 雄

夕暮の日光は勢よく机上を照した。薄白い雲は去つては来、来ては去る。行去つた後は、あくまでもよく晴れ僕の心を清々しくして呉れる。

檜葉と檜葉との間を、ぼんやりと眺めてゐると、不意に一羽の鴉が窓を掠めて飛んで行く。近くの大木からは絶えず椋鳥の喧しい聲が聞えて来る。

今はや日は西山に入らうとしてゐる中を黄金の様な稻を馬の背につけて通り行く。垣根通して向ふの田は今やもう黄金の波は汲み取られ、一ぱいに湛へられた水に赤々と薄黒い西山と共に寫つてゐる。

葉を落した大木は、空高くうなつてゐる。窓際の菊の花は今盛に美を競ひつゝある。

四邊は夕闇に包まれた。唯時々木枯の吹き行く音が唯一つ聞えて行くのみである。

ああ、いよいよ冬が来るのだ。眞白な粉雪が、こんなと降つて、人は皆家の中へ閉ぢ籠る冬が来るのだと思ふと、何だか僕の心は寂しくなつて行く。

### 嵐

二 丙 明 石 道 雄

その朝、眼を醒ましてみると、何となく四邊が騒々しい。

七五

垣根越しに見える前の河は、濁流流を増して後五六寸で溢れさうだ。普通も餘り透んでゐる河ではないが、それでも水が少ない爲に底の物が見える位だが、今は見えるどころか土色に濁り、流も餘程早い様だ。「この暴風雨では遠くから自轉車で通學する人達は随分困難であらう。」と風と戦ひながら自轉車を進めてゐる人々を頭に浮べてその人々に同情した。

とその時不圖空を見上げると薄鼠色に曇つた空に、小さな點の如くに  
見える雀が、風に向つて翼を力の限りに振はして、飛んでゐるのが眼に  
寫つた。

が小さな可憐な姿は、動もすれば大空を馳せ廻る惡魔の如き風に吹き流されさうになる。

右に走り左に飛びつゝ、僅かに進んでゐる姿を見ると、全く前の人々と同じ様な境遇にあるので、今更ながら彼等の努力に敬服した。

二丙根岸仲次郎

「嗚呼！ひどい風だ。」とつぶやくと共にぶると言ふ身ぶるひを感じる。昨日より昨夜にかけてあれほど降りに降り、彌吹きに吹いた風雨は今朝となつても雨こそ止んだが、風は一向に止みさうになく益々威を帯びたやうである。

小身な自分はともするとこの強風の爲どつかと腰を据えて、感覺を失

國旗にそむかぬ善良な國民となり御國の爲に盡さうではないか。

二丙小泉廣

近く秋の影を飾つたボブラも、今は殆んど枯落ちて路傍は眞黄色い。ひからびた枯葉が土も見えない迄に埋つてゐる。そして、今では見上げの高い梢に少しばかりの葉影を止めて居るのみである。まろくなつた雀が、一羽中程の枝に止つて、淋しうに鳴いて居る。折から冷たい木枯が、悪魔のやうな唸りを立てて、残る梢の葉を五六枚、もぎりとして行つた。木枯の通つた後はボブラは身ぶるひをして寒空に高くたつてゐる。森の間から遠山白衣をつけて冬を告げて居る。

あゝもう冬は遠山に來たのである。充實した秋、靜かな秋、樂しかつた秋は此のポプラの一葉一葉に暮れて行くのであらう。

二丁 黒田 健次

九月二十二日。今日こそ待つた野外演習だ。朝からどんよりと曇つた空は雨を交へた。

八時整列。全校生徒は東・西兩軍及び見學隊・自轉車隊に分れた。東軍は三年・五年。大隊長西村先生。西軍に二年・四年大隊長丸山先生。帽子に白帶を巻いた。見學隊は一年生。自轉車隊は身體の具合の悪い者によつて組織された。やがて柳田先生が、「今日野外演習を斷行する。」と仰言つた。この「斷行」といふ言葉が異様に僕の頭に響いた。

八時四十分、元氣に出發。しどろ／＼と降る雨に濡れながら行軍して大  
麻生河原に着いた。我等四軍は石のごろ／＼した所へ整列した。丁度雨  
が止んだ。丸山先生が「命令。熊谷方面で不利の戦闘を交へた我軍は熊  
谷の荒川鐵橋も爆破され、この橋を渡つて退却せんとす。依て大隊はそ

つた手でハンドルを握りしめてゐぬと振りおとされさうになる。手足は冷くこびえてゐると言ふよりも、痛いと言ふ方が適當かも知れぬ。道の両側の田と言ふ田は見渡す限り一夜の中に大海原と化して、波は通り行く道をめがけて押寄せては返す。處々に川水が道を縦横に押流してゐる。その中を自轉車は風の勢で走る。

水を分けてばつばと言ふ白いしぶきと、しゅしゅと言ふ軽い音を立てて自然に走る。それが實に速い。まるでモータボートの様。素晴らしい勢で走る。走る。愉快愉快。かくしてすべるやうに風の舟に乗せられて學校まで送られる。

その中を自轉車は風の勢で走る。

水を分けてばつばと言ふ、白いしぶきと、しゅしゅと言ふ、軽い音を立てて自然に走る。それが實に速い。まるでモータボートの様。素晴らしい勢で走る。走る。愉快愉快。かくしてすべるやうに風の舟に乗せられて學校まで送られる。

二 丙 松村德治

國旗!!國の譲りの日の丸の國旗。我等はこの日の丸の國旗に對して、敬、愛の念にたへないのである。

これ程國といふものをよく表現してゐる國旗であらうか。今しも太陽が東の空からしづ／＼と昇る様、文化の進歩、發達、これが朝の太陽の如く／＼と昇る様を表した我が國旗は世界に又とない國旗である。又「日の本」といふ國號にそむかぬふさわしい國旗である。

又これ程國民のたよりとなる國旗はないであらう。或ひは日清戰爭に或ひは日露の役に戦ひつかれた、わが兵を力づけ勵ましたことが何度であらうか。

外國に行つてゐる者など、たま／＼この日の丸の國旗を見る時は何年も會はずにゐた親にでも會つたやうになつかしくなり涙をこぼすこともあらう。

敬ふべきは我が國旗である。愛すべきは我が國旗である。我等はこの

の退却を授けんとす。」と仰言つた。我が大隊の行動は全軍興亡に關するといふ事を痛烈に感じて皆緊張した。其れから散開について命令は雨のやうに下つた。皆位置に着いた。僕等は豫備隊として後に居た。丸山先生及び第一線の者は絶えず前方を注視して、今や遅しと敵を待ち構へてゐる。空には雲が低く垂れ、生冷たい風が頬を撲つ。小鳥は偵察機のやうに縦横に飛び廻つて敵の迫つた事を知らせるかのやうであつた。我軍の打出した銃聲によつて、戦の幕は切つて落された。銃は耳をつんざく許りに叫え、口から吐き出す白い煙は濃濛立ちこめ、硝煙の匂が鼻をついた。僕等も第一線に出た。すると四年生の吉松さんが、「打つて見ろ。」と言つて銃を貸してくれた。あゝ、生れて初めて持つた銃。生れて初めて撃つ銃。恐る恐る引金を引いた。轟然一發。白煙で向うが見えなくなつた。敵も猛烈に立ち出した。「もう一發。」と彈をこめて貰つた。今度は度胸が定まつたので落着いてよく狙つてうつた。敵はどん／＼近づく。銃聲は次第にとぎれて來た。皆四年生はつけ劍をした。「突撃に前へ！」號令と共に突貫した。刹那休戦ラッパが幽嘆と響きわたつた。

二丁輝元德道

此處彼處の雜木や村々の落葉樹が、最後の榮を示して黄に茶に紅に照渡る。風の吹く毎にがさ／＼さら／＼とさやく、或る物は蝶の如くひら／＼と舞落ちる。此の様に吹く度毎に舞落ちて、終には眞裸の寒木となつてしまふ。此の寒木が冬風吹き荒す時あの寂しき音をだす。葉も落ちつきた時季となると農夫達が大きな籠と熊手を持つて雜木林にその落葉を求めに来る、がり／＼と落葉搔く熊手の音が林の中に響く。馴れた四十雀が小枝から小枝へと何羽ともなく飛び廻る。何時の間にか小丘の如く搔き集められたこの落葉は籠につめられて田畑の肥、或は牛馬の糞

となる、これが後に腐つて糞肥となる。嗚呼あの黄に茶に紅に照渡つた葉が、然る後一葉が農夫の手に渡つて一丈のお金も出さずして肥となるは農夫にとつては福業とでも言ふべきである。

時 雨 一 甲 中 村 達 夫

しとくと春雨の如く、又大粒な夕立の如く、うすら寒い時雨が降つてゐる。たまつた落葉をぬらし、枯木をぬらし降つてゐる。傘を左手に持ち、右手で裾をはしをつて足駄であるきにくさうに歩く女の人。新しいズボンをよごして氣にながら歩く學生。空高く澄み切つて晴渡る秋ももう過ぎ去つた。そして空の低い灰色の冬が来た。春雨のやうに絹色の如く降つてゐるかと思へば、一陣の風が吹き大粒の雨が降つて来る。ばかに風が吹き始めた。雨戸をがた／＼ゆする。雨はまだ五月雨のやうに長く降つてゐる。本も読みあきた。雨のやみ間に水たまりをのぞけば鉛色の空がうつる。又降り出した。机にひぢをついて、その上にあごをのせて外をじつと見てゐると「昨年こんな雨の降る日に死んだ時夫君のことが思出される。」「いやな雨だ。早く晴れないかな。」と思つてゐると「チム／＼」と雀が此の雨の降る中を餌をあさつてゐる。向ふには雨にけむつた家々がかすんで見えた。

落 葉 一 甲 新 井 進

火鉢に、あたりながら、ガラス越しの庭を見た。銀杏の木、樺、榎、紅葉どの木を見ても、晩秋といふ時を想はせる。

「さら／＼」「おや」土の上で、銀杏の落葉と、紅葉の葉で、鬼ごつこをしてゐる様だ。十三四枚の葉が、たがひにもつれあつてはころ／＼と、庭の隅から、はしから、はしまでころ／＼回る。落葉はころ／＼

がら、かう言つてゐるかも知れぬ。

「風の叔父さん、もう少しゆつくりと吹いておくれ」と。

落葉は、ころ／＼と、庭のすみ池の中へ飛び込んでしまつた。

池の中で、ふわ／＼浮いてゐる。風は容赦無く池の中まで吹いて来る。

池の水は「さら／＼」と、さざ波を立てて、又も、さきの落葉は、池の中で、波にもまれ、隅から隅まで走りまはる。

風のために、一生落葉はころ／＼回つて、しまいに一體何處へ行くのだらう。

時 雨 一 乙 五十嵐 博

昨日あたりから空が淡暗くなつて、今日は荷一層その濃度を加へた。農家では此の頼りない空を眺めて、「ここ二三日は降らし度くないもんだが……」とめい／＼心配さうに言つてゐる。

それでもお晝前の中は、雨も降らず、西風がや／＼吹いて、天氣はやつと持續けることが出来た。がお晝もすんで午後二時頃。冷たい西風が急に北東の風と變り、「層物凄く、空は再び暗くなつた。

をこの危険な空模様様農家では男は勿論、女や子供、年寄迄も一家總出で、田圃に刈りほしてある稲を車に積んで大急ぎでせまい軒下に取り込んでゐる。その中に危かつた空は遂に持堪へることが出来なくなつて、はしやぎきつた赫土の上に大きな雨粒が間遠に落つて来た。いよ／＼彼等の心は張りつめた、其處彼處で呼び合ふ聲、車の音、道具を持つて走る子供。それは／＼目の廻る様な混雑だ……。

數分の後、それ等の光景もなくなり、今は唯、雨が烈しくなつて農夫等の聲絶えた廣い田圃には、時雨の淋しく降り注ぐだけである。

稻 荷 山 一 乙 初 見 彊

僕は稻荷山の麓から山へ登る時「なんだこんな小さい山なんか十三四分もあればゆつくり登りきる」と、思つて居たのに稻荷山も登つて見ると思ひの外高い山である。

太陽もこんな時に意地悪くカン／＼と僕等の上から照らして、とてもやりきれない。汗は頭から出て来る奴が目に入つてびり／＼するし、家を出る時、すべらない様にうつて来たビヤリが、すべらないどころか、つるり／＼とすべつて、ちつとも道がはかどらない、やつとこすつとこ稻荷山の頂上まで来たのだ。

知らない處なので方がきつぱり解らないが、秩父盆地が一目で見え、影森の驛では僕等の来るのを物淋し氣に五臺繋いだ電車が待つて居るし、頭を少し上げて見ると荒川のうねつた流れが見え、後を振り返つて見れば武甲山石灰岩採掘場のすごい光景も見える。

嗚呼何んとも良い眺めではないか！

あまり歩き過ぎたので腹の虫がぐ／＼いつて居るのを感じたので、ある見晴の良い岩に腰を下して辨當を食べ始めた。最初の一口をがぶりとかんだ時僕は近頃となうまいものを食べた事は無いと思つた、四個目の壽司を口へ入れた時、……其の時……どど、どど、どど、……と物すごい大音響と共に爆破された石灰岩が物すごい音を立て、落ちる其の光景……

僕は生れて始めてこんな物すごい光景を見たのだ。我等は皆一齊に萬歳を叫んだ。

其の光景は到底口でいひ筆で書き表す事が出来ないがまだ、まざ／＼と目の前へ浮び出て来る様だ。

時 雨 一 丙 石 丸 昌 一

しとくと時雨が降る。秋の日も西に傾きかけて、ぼんやりとした西の空が、浮いてゐる様に見える。ぽ／＼とかすむ林の中に、一際目立つて、丈の高い樺の木の葉の枯れかけてゐるのを見ても、冬が来るといふことが知れる。百舌が裏庭の柿の木に赤くなつてゐる柿を食べに来る。羽が水にぬれたのが、氣にかゝると見えて、ぶる／＼と羽を動かしては水を落してゐる。庭先のばらの花に、水玉がたまつてゐる。風の吹くたびに、ころり／＼とこが／＼と落ちてゐる。見てゐる中にとう／＼落ちてしまつた。もう大分雨も止んだが、まだ小雨が降つてゐる。樋から水がめにぼちやり／＼と落ちる音は、冬の寒さを思はせる。もう電燈もついて、竹藪から青い煙が上つてゐる。

嵐 一 丙 腰塚 忠 太郎

急にザリ／＼／＼と眼覺時計が鳴つて僕は思はず眼が覺めた。これと一緒に昨夜の時雨が嵐と變つたのがわかつた。どう／＼と吹きつける風は家を揺がし、木の枝を落とす。トタンに落ちる樺の實の音、僕は寢床で此の風の音を恐ろしさと珍らしさで聞いて居た。戸が次々によせ来る強風に絶えずゴ／＼と音を立てる。もう起きようかと兄さんに聞くともまだ四時だと言ふ。二人は五時半に起きようと言つて又眼をつむつた。しかし僕は恐ろしさに眠る事が出来なかつた。風の爲家が倒れはしないだらうかと心配した。少しおだやかになつたのかと思ふと前よりもひどい風が襲つて来る。其の度に瓦の落ちる様な音や木々のどよめきが狂つた風と和して聞える。しかし僕はやがて眠つてしまつた。六時になつて起きたがまだかなりの風が吹いて居た。井戸端へ行つて見ると瓦

が二三枝落ちて居て、附近の枯枝が所縁はす落ちて居た。此れから此の様な風の中に學校へ行くんだと思ふと恐ろしさよりも、勇ましい氣持が湧いて來た。

## 嵐の夜

一丁 根岸 文雄

何だかざわ／＼聲がしたやうに感じて目がさめた。とたんに……ヒュ、ザ、ザ、といふはげしく音に驚いて目を開いた。嵐だ。晝の雨風が何はげしくつゞいてゐたのだ。暗い。室の中は電燈の消えたやうに暗い。その中に頭の向ふにうすぼんやりと蠟燭の火が浮んで、床の上に誰か起上つて何かを／＼いつてゐるやうだ。無理に首を回してそつちに向けて。父と母と、それから床の中で妹もしゃべつてゐる。「何だい。」と聞くと母が「今ね、サイレンの音がしたやうだつたんだよ。」さうかい、火事かな。この嵐に。ちよつと静かになつた。と父が口を出した。「水が出たんぢやないか。」さうかな、まあどつちでもいゝや。「けど汽車の汽笛ぢやないかな。」さうぢやない。たしかにサイレンだ。話してゐる間もはげしい嵐の音が／＼つゞいてゐる。時々、ドタンガタンガタン……と物のぶつかるとはげしい音をする。と、その音にまじつてたしかに自動車ボンブの音がしたやうだつた。「火事だ!!」とつさに僕は飛起きて戸戸にかけよつた。あけた。外は停電して暗い道の上を縦横に吹きまくる風と雨の中を走る二條の光。間もなくヘッドライトの光が表通りの方に消えた。けた／＼ましいサイレンの音をひゞかせながら。あとは唯街上を吹きまくり、荒れくるふ風雨の雨戸をた／＼音がひゞく。蠟燭一本の中に四人は不安さうに顔を見合せて。――終――

## 時 雨

一年丁組 島崎 春次

であきらめて止めた。九時近くなつたので、床をとつて寝た。止むのがいやなのか、まだ外でははげしい風と共に雨が降つてゐた。

## 第一師團秋季演習に参加して 高澤晋之助

ぶら／＼と爆音勇ましく飛行機が或は高く或は低く若い男の血を躍らしてゐる。

午前九時我が熊中大隊は勇躍して校門を出る。何んだか知れない身内に潜んで居た力が今出でよとの號命を待つかの如く見えた。十時前佐谷田村小學校に着く。丸山先生より中隊の守備位置及び大井村までの道を指示される。未だ早いが軽く中食を取る。いよいよ此から初まるのだな。がツグツグと遙か遠く西方で機關銃の音がする。敵か味方か全く演習の雰圍氣内に包含されて何んとも言えない氣分となる。

我中隊が行田街道に出る、いきなり傍の家から味方の將校らしい者があはただしく「君等は何處で此の部隊は何程か、教官殿は何處に居るか」と聞くので「これは一中隊で先生は後に居る」と言ふと「もう直ぐ敵が来るそこまで來てるんだが君達はその橋の所から北の方に陸地を占領してくれ」ときた。丸山先生が示された所よりはずつと東だ。そして其處に一中隊の者を散開させるには狭すぎる、第一直ぐ前に家が在つて見通しが利かない。これでは敵が來ても分らない此んな所だと思つたが、その將校殿の様子が實に「敵襲來す」と云ふ言葉の通りだし我々もぐずぐずして居てはと思つて小隊長に夫夫散開する様に云つたが場所が悪いこんな事では仕方がないと、やきもきして居ると丸山先生の方から傳令が來て「もつと前だ」と言うので分隊毎に前進する。何んだか初めから上手に出來ず唯わくわくするだけで本當に意氣地がない。

平戸の西端にて熊谷の尾澤製絲工場に所にでも出て來さうな敵を攻撃

大變愉快であつた夏も過ぎうすら寒い秋ももう半ばを過ぎてしまつた。二百十日を無事にすんでどれもこれもよくみのつた黄色い穂を重たさうに垂れてゐる。稻を刈つて農家が喜んで取入れ様とする時にいち惡く降るのが時雨だ。

此の時雨は秋の終りから冬にかけて降る雨で、農家に取つては非常に迷惑な雨である。師團の演習も後一日で、終りを告げようとする日の夕方、近所の人達に交つて飛行機の爆撃を見てゐると、急に／＼といふひどい風が木の葉やわら／＼等々吹き飛ばして吹いて來た。演習を見て居た人々は、誰も／＼「おや／＼馬鹿に變つた風が吹いて來た。此の分では近い中にきつとひどい雨が降るかもしれない。」と口々に云ふ。私もさう思つた。村の十日夜の雨が來た。初めの日は稍、風が吹いて寒く、二日目は風もさう強くは吹かず、だが幾分か寒かつた。と、二日目の夜半から風に交つて降り出した雨は、翌日の朝中は静かだつたが、晝近くになると突然風に變つて、はげしく吹く風と交つて降つた。私達は柔道の練習が終つて、教室へ來て見ると、幸ひに友達の小川君がゐたので二人で一緒に歸つた。校門を出ると一層ひどい様に感じた。二人は洋傘を風に取られない様に注意しながら道を急いだ。他の者も急いだらう。一寸も見える事は出來なかつた。たまには駈けた。なるたけぬれまいと思つてゐたけれども何如する事も出來ず、とう／＼二人共びしよぬれになつてしまつた。特に小川君の方はぬれ方がひどかつた。停車場へ來た時には、少し寒氣がした。やがて汽車も來た。乗るとすぐに汽車は出た。しばらくして家へ歸つた時には、もう／＼／＼につかれてしまつた。が、外ではまだ瀧の様に／＼と雨が降つてゐた。吹つかけた雨が二階からもつて下へたら／＼とたれてゐたので、あはて、兄と私と妻の三人で疊をはがしたりふいたりした。けれどもいくらふいても／＼たれて來るの

する爲めに我が第二中隊は行田街道を夾んで第一小隊北二小隊南に陣地占領を爲した。

此の時我々は實際何んとも言えない演習氣分に浸つた。行田街道には大隊よりも大勢の熱烈なる愛國民が立ち更に今工事中のあの高い土堤の如き中仙道には遠くから見て文字通りに立錐の餘地無と言ふ人出でそれが皆我々熊中大隊の動作に注目して居るんだ。そして空には飛行機が大きく小さく或は高く低く爆音／＼と居る。又遠い前方では盛に機關銃の音がして居る。此の時の氣持を問へば「うむ何だい早く來やあがれ」と腕を撫し銃を取りたい何んとかうあはたらしい緊張しきつたものと言えよう。

后二時頃味方の兵がばらばらと重たげに足をひいて退いて來る。いよいよ始まるかと思つてと敵の斥候らしい者か三名程ちらりと見える。待ちに待つた敵が影を見せたんだ。一分隊の者にだけ射撃を命ずるパンパンと勢のいい音して敵は死んだ管なのに未だのこのことやつて來る。まんなのがあるものか變だなと思つたが第一小隊の者全部に射撃してもらうと云はれなくても撃ちたい者達なので射つ射つので敵は肉一つ残さないだらう。

飛行機からは盛に爆彈投下が爲される。敵の散兵らしい者が桑の間から見える。それがどどん右翼の方に回る。もう味方の方はそんなに居ない。仕方が無いので第一小隊の第二分隊と輕機二つを持つて鍵形に散開する。敵の方はと見ると輕機一つに二分隊位の兵力だ。それが第二分隊目かけてどどん進んで來る。第二分隊は輕機二つを有つて居るので強くていい筈だ。敵は退く／＼が當然だと思つて居ると突撃して來る様子だ。それと第一分隊の者にも増加する様に爲して待つ。彼等は實に亂暴だ。輕機二門と二分隊の兵力に對して一つの輕機二分隊に足りない

兵で突進して来る。相手は支那ではない、日本同士だから蒙蔽せずであらねい筈だ。後で審判官に追ひ歸させられたのも愉快だ。

突然行田街道の味方の輕機からグッダッ……と景氣よく弾が飛出すと二百米前方で敵が盛に動いて居る。各小隊射撃の命令が出る。いつ來たのか少し前方に出て守つた一分隊の鼻っ先でグッダッと敵の重機が吼える。見物人がバラバラに駈る。實にもう演習氣分である。彼我の銃の煙でぼんやりした空氣の中に銃剣が光つて居る。リアブと喊聲を上げて敵が進む。と丸山先生の手が上つた。豫定の退却だ。どンドン走る。剣をつけた敵が側からリアブと出て來さうだ。見物人も駈る。何となくあわてた早く早く云ひながら、一方ではあゝ草臥た止りたいと云ふ氣分だ。

之で一先づ演習終了だ。佐谷田村小學校に引上る人員異狀なしだ一人も討死はしなかつた。其處で今の演習の話を爲ながら大井小學校に向う。夜營だすぐ前に敵が居る。何時襲撃するか知れない一晩中警戒を怠る事は出來ない。我第三中隊の役目は第一小隊が八時まで第一線の警戒、第二小隊は三十分毎に銃前哨を出す事だ。一點の雲も無い天空で寒そうに冬の星が瞬いて居る。第一小隊第一分隊が先づ小哨に出る。道の交叉點に重機を置いて動哨が二名立つ。月が、寒い月が外套を着、銃を持つた影をくつきりと書いてゐる。パンパンと時々味方の歩哨が打つらしい敵の斥候が來たのかな。小銃の音が静けさを破つて聞える。そうである、寒い満洲で常にこうして我が生命線を守る兵隊が思ひ出される、そして「うむ」と身振を爲る。ガダガダと靴の音がする交替だ「寒い」「うん、よろしく頼むぜ」後は戦友が引受けてくれたもう休んでもよいのだ。がや／＼騒ぐ聲に目をさます。青く冴えた月の下に銃を持つて圓く焚火を圍んで四五人交替を待つて居る實に繪の様な、何時かなと時計を出

す二時が少し過ぎたばかりだ「おい未だ早いんだせ皆寝てろよ」と言ひながら自分も起き出す。外は静だ冷い水で顔を洗つて寝不足の疲れなんか何處かに飛んで行つてしまふ。がやがやと冷いパンを食べて「さていいよ初まるかな」と云う氣になる。

四時近くなつた丸山先生に引具されて大井小學校の南に向う。先生が仲仙道に出る敵を攻撃するやうにと言つて歸つてしまふ。少しの後第一中隊第二小隊の者が來て我が前方に陣地占領した様だ。そこで我が中隊は今來た道を夾んで重機一門に二分隊を、其道と平行して居る道に残りと第二小隊散開させる。

月が西山に入つて一入暗くなつた時傳令が何か持つて来る。薄暗い懐中電燈で見ると亂雑な字で敵の主力及び砲が中仙道を通つて此方面に來るらしいとどうやら讀めた。

パンパンと突然小銃の音がする前の者が射つてなと思つてると我が前方に四五名の敵が來た。それつとパンパンと勢のいい音がして「いいよやるかな」と緊張させる。いくら射つても逃げない。平氣で進んで來る。随分無茶だなと思つて發砲を止めて見て居ると彼等は其邊を往つたり來たり爲し居る。東の空が明るみ初めたもう盛に機關銃の音は爲て居る。敵兵の様子もはつきり爲て來た。何か橋を渡したらしい。我軍の側を流れる川に橋を渡したのを見るとは敵の大部隊が來るかな、それではと思つて切角散開した味方の者に今度はその橋に對してやり直してもらう。これでは敵がいくら來ても大丈夫だ皆殺しだぞと意氣大いになる。

全く明けた空には今日も飛行機が往來して居る。其々爆彈投下の標のツリ傘が落ちる。敵の主力はあの下に居るんだとそれが皆此處に向うとすると恐ろしい様だ愉快だ軍本營へ。

先生方も見に來られた。見物人もぞろぞろと集る。ふと見ると橋を作つた兵が居ない。あれを分捕ちまへと勇敢な者が五六人飛出して川を渡つて行くとははてて兵が飛出て來て橋をよこさない。西村先生に怒鳴られても平氣だ。少尉殿に對して實に失敬な奴だ。學生だと思つて馬鹿にしてやあがる。

此時分からは盛になつた。少し右翼の方で盛にグッダッ……と物凄い音がして居る。早く來ないかなと思つて居ると音がだんだん右翼の方に遠くなつて來た「あれが來るんかな」と思つて居ると、突然西村先生が「もう敵は此の右の方を通つて行田方面に行つちまつたよ」と言はれたので喜びと緊張の絶頂に居た心持から谷底に落ちたやうに實に情なく口惜しく泣きたい様な氣がして「あゝ馬鹿見ちやつた。あんな早くからこんなに上手に散開して待つてれば敵が來ぬ。中隊の者になんたかすまない氣がする」と思つて居ると左翼の方から味方の兵が逃げて來た。敵も來るなと思つてるとグッダッとならなく輕機關銃の音がする。敵の散兵がほんの少し表はれた、仕方がないからあれを打つちまへとどんでん射つてしまふ。ああ此時全部射たなければよかつたんだが。

突然今度は右の方からグッダッと敵の機關銃の音が聞える。見物人がぞろ／＼集る。あまり突然なので何をすべきか知れない。味方の散兵の方向變遷なんて出來ない。何が何だか判らない。其中に弾は全く無くなる初め待つて居た方向にも敵が出來る。

我が軍は實に滅茶苦茶だ皆んな戦死だ。  
あんなに朝早くから待つてゐた敵が來た時には大して有効に弾を射たず何んの事はない。弾を打つて見物人を寄せつけておいて下手い所を見せた様なもんでがっかりするやら怒りたいやらで一杯だ。  
そして大井村小學校で軍をまとめて歸校の途に着く。

皆んな連日の奮闘の後だつたが行軍 實によかつた。そう遠い我々が一年生時代行田方面に發火演習に行つた歸り二人三人づつ文字通り三三五五小學生の遠足の如く特に甚だしかつた三年生が學校に來てからグラウンドを二十三分駆けさせられた。あれに比較すると月とスツボンの様に見える。實に愉快だ實に善くなつたものだ。我々は自然と微笑せずには居られない。

#### 第四回體育大會記事 理事 和久井良一

十一月三日——此の日は明治大帝の御聖徳を讃へまつる佳き日であり而も全國體育デーであり我が熊中秋の最大行事たる體育大會の舉行されたる日である。前日の雨は豫定の如く、本當に豫期した如くに晴渡つて絶好の體育大會日和。空に一片の雲なく菊花又麗を競ふて菴郁たる香を放つてゐる。メイスマストに日章旗ひらたき、白いラインはグラウンドにくつきり浮んでゐる。

明治節祝賀式終了後全校健兒八百の元氣溢れる合同體操、そして「高山峭嶽數あれど愈々高し富士の山……」の校歌合唱によつて榮えある第四回體育大會の幕は切つて落された。一年の五〇米豫選を最初に競技は着々として進行して行つた。プログラムの進行につれ競技愈々白熱化。「血潮に燃ゆる若人の、待ちあこがれし今日こそは、光輝ある歴史の、譽れの名をば轟かせ。」の應援歌の如く熱戦又熱戦、赤き血に燃ゆる若人が全精力を傾注しての大奮闘、其處には虚偽もない手段もない、唯ファイティングスピリットの赤々と燃えるのみ。之こそは我々學徒の有すべき感激でなくては得であらう。若き日の感激!! 感激!! の存するのみである。然し我々は此の驚嘆すべき熱戦の一面、各係役員諸君の涙ぐましい程の努力を見逃してはならない。進行・召集係の迅速なる動作、判定・記録係

の正確なる、又外にあらはれない器械係の非常なる努力等。聴て時間の経過につれて観衆は續々と詰め掛け、午近くには招待席は殆ど超満員の盛況。止むなく狭いベンチにぎう／＼押つめ男生徒には若干遠慮して貰つた程で接待係の諸君の繁忙振り筆紙に盡せない。又一般観衆席も立錫の餘地なき迄に人の波を作りその熱心なる観覧はこの大會を彌が上にも盛ならしめたのであつた。體育大會を良く理解して熱烈なる應援をして下さる熊谷及隣接町村民諸君と保護者の方々に對しては我々は深甚なる感謝をせねばならない。一方グラウンドに於ては何等の障害も起らず素晴らしい進行振りを示し、就中當日呼物の爆彈三勇士競走には満場大喝采を送つた。一つとしてだれたゲームはなかつた。かくてその緊張を午後には持越して午後のゲームは五年生の模擬戦を以て開始されたのである。攻撃防禦共に息もつけない様な猛烈な戦闘。南軍は襟林を袖にとつて叢中に銃剣をひらめかす。攻撃軍たる北軍は彈丸のあらん限りを撃ちまくる。銃聲股々と轟き硝煙滾々として滿洲の野を彷彿せしめる。彈丸盡きるや北軍の精銳、銃剣をひらめかして敢然敵陣地に突込む。突撃の喊聲、白刃の潮、それこそ日本の華であり青年日本の意氣でもある。終りて後の南北兩軍の大分列行進は皇國を護る忠勇無比の塊である。例年の催であるが模擬戦が正に大會隨一のものではあらう。小學校の八百米競走に於ける各校小學生諸君の熱狂する母校應援も亦頼母しき限りであつた。かくて大會は終りに近付くにつれて益々感激を生み興味は最高潮に達したかと思はれ、満場大々酔へるが如く興奮の渦中に巻込まれてゐる裡に最後の合同體操も終へて、後各學年の優勝旗授與式あり、岡田會長の發聲で熊中の恒久を祝して萬歳三唱、感激裡に大會の幕を閉じた。此の間、少しの間進もなく恐らく縣下隨一であらう所の成績を以て立派にこの大會を終了したは一に各係役員諸君のよく各自の任務を遂行し、

八四  
その動作の確に秩序正しく迅速なるに在り、又上級生を助ける下級生諸君の忠順なる努力あり、要するに全校生徒の一致協力にあつたのである。團結こそは偉大なる力である。

由來我が熊中は關東武士の本領たる「質實剛健」を以て校風とし、學問に於て運動に於て縣下隨一、延いては全國第一をも目標として専心努力して來たのである。而して秋の最大行事たる體育大會は先輩の英斷に依つて睡棄すべき運動會の殻を捨て去り昭和四年度第一回體育大會としてスタートを切り名實共に體育大會を舉行し、こゝに第四回大會も無事に終了し得たのである。其の間に於て大改革は續々敢行され、或ひは第二回に於て眞の我等の體育大會化を企て成功し、或ひは樂隊に變るに大擴張の設備あり。ユニフォームの改革あり、本年度に至つて殆ど完全されたのである。此の點我等熊中生は縣下各中學校に對して大いに誇つてよいと思ふ。理事の一人として非常に嬉しく思ふ次第である。之も五年生各役員諸君の愛校心より出でたる確固たる自覺と、それに従ふ下級生の熱烈なる應援と、更に加ふるに先生方の御親切なる御指導の三拍子揃つた賜であらうと固く信ずる。今や我等五年生は完全にその責任を果し得て心残りなく母校を去るべく、此の體育大會を以て中學生生活の最も強き印象として胸裏に深く刻み込まれるであらう。

おゝ若き日の感激!! 體育大會よ!

## 紀行



### 關西方面修學旅行記

伊

勢

五

乙

野

口

秀

男

眞澄の鏡でも水底深く沈んで居るのではないかと思はれる程清き五十鈴川の流に手や口をすゞぎ、身も心も清めて、神さびた杉の木立を進んで行くと、俄に神代の風の身にしみて、おのづと心のひきしまるのをおぼえた。

今こそ仰ぐ白木造りの神殿。かしこも皇祖をいつきまつれる大前に、つゝしみてぬかづく我等の幸、何にかたとへん。白絹の帳は風なきにゆらゆらとさゆれて、我等の眞心よりの参拜を嘉し給ふ神意かと、一同感激の瞳をかきやかした。

参拜後神司の方に導かれ、ねむろに案内して頂き神苑を逍遙した。常盤木のみどりいや濃き神域は、名所の園の美しさと比すべくもあらず、清淨そのものゝうらはしさである。

やがて神樂殿に導かれ大々神樂を奉納した。髪を長く背に下げた氣高き乙女、天津乙女とでもいふのであらう。ゆかしき笙、篳篥の樂の音にあはせて、櫛手にして舞ふさまは、天の岩戸のふるごとそぞろに偲ば

れた。

そのかみ僧侶たちは、五十鈴川のはるかむかひにて拜しあげたのださうである。そこは木々茂りあひ、みやしろの大鳥居だにも見えわかつた。

西行法師の

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなきに涙こぼるゝ

とよみいでたのも、もつともだとうなづかれる。

我等はこのよき時に生れいで、大前に親しくぬかづきて、皇祖の御遺徳を仰ぎまつる事を得。何とありがたい事であらう。

神のみ末たる我等。神國に生れいでたる我等何と幸なる事であらう。益々奮勵努力して世界に誇るべき國柄を一層輝かさんと深く／＼心に誓つた。

### 京都哀愁

五

乙

小

暮

十九

三

三條大橋の欄干にもたれて遙かさんざめく京極のジャズを聞きながら、加茂川の流れを見つめて深い感慨に旅の疲れも忘れてゐた。この橋上に伏し遙か、荒れ果てた御所を拜しなげいた、高山彦九郎も今は淡い歴史の思出である。去り行く水の流れの如く歴史はめぐり來ない。昔時大宮人がこれに船を泛べて、みやびやかな遊びに樂しみ、限りなき自然を歌ひそして讚美したことだらう。さう云つた優美なそして落付いた光景は、想像に過ぎない。あの空にまたゝいてゐる星は變りないのに人生は幾變轉し、彦九郎の幻想をかッリンの臭で驅逐してゐるではないか。遠き古をたひそつと體を後に廻した。そこには牛車も、大原女、烏帽子も消えて、モダンな洋装の人と自動車電車の交錯で今迄の自分の懐古的な陶酔から覺めて劇しい人通りと喧噪な京都の姿を見出した。左の方

にはビルテイングが遙かに川を睥睨して不夜城の壯觀であつた。自分はつく／＼文明といふものが、如何に自然を破壊するものであるかを知り、限りなく淋しい氣にとざされた。あの二具の濱もコンクリで固められ、猿澤の池も亦、そして京都に來益々哀愁を募らせられた。

生存競争の激烈な現代に於て、自然を友とするが愛するなぞといふことは出来ないといふ誰か言つたが、我々人生が如何に自然に接するといふことを欲してゐることが分るだらう。狭い庭の二隅に草花を造るのも自然の縮圖で、これによつて満足な幾分なりとも充たさうといふ心なのである。

この歴史の都、懐古の都京都も今や市内では、その自然美を見出すことは單に、寺や其他によつて僅に名残を止めてゐるだけで、到底古の京都の姿は見出せないものである。現在の京都の心臓は京極の雜沓であり、川にうつるネオンサインなのではなからうか。

そんな淋しい心を抱いて旅館に向つた。彦九郎がぢーつと川面を見つめてゐた。

## 滋賀の里

五 乙 江 袋 文 男

遙かに初夏の陽に映える新緑の比叡の麗姿を仰視し、眼前に満々として千古盡きない紺碧の小波を漂はす琵琶湖を眺め近江富士の雅麗な姿態に旅情を温めさせられる。

坦々として露草深く一帯の桑園を見麥の秀づる處、そここそ滋賀の里邊ではある。滋賀の里あゝそれは一水一石古歌あり歴史傳説ありと稱せられ金堂社殿の華やかにして今尚昔の榮華を偲ぶに豐かなる寧樂、賀茂の清流、祇園の夜櫻の京都に比して如何に哀愁茂く麥秀の歎の盡きない處だらう、夏草伸びた細道の末に今は苔蒸す一塊の石碑に依つて古の夢

の都の跡をとどめるのみにして見守る人影すらなく屑々として碑上の古木の悲しむのみなれど言ひ知れぬ昔懐しさが油然として湧く。

村雨が過ぎ去つて蒸してゐた初夏の空にも清新の氣が漲つてゐる青葉の滋賀の里で旅は道づれの婦人が物馴れた口調で話してくれた。

「これは滋賀の跡でつせ、昔は大變お榮えなされたさうですが今は淋しいもんですな、御覽なあんなに草が伸びてゐる。」

婦人の眼にも懐舊の情に堪へられないやうな淋しさが見えてゐた。

「あちらに優しい山が御座つしやう、東山でつせ、全く滋賀は雅やかな里です。」

指示する方を眺むれば布圍着て寝たる姿の東山が優しい曲線を描いてほのかに微翠を呈してゐた。

路傍の一塊の瓦にも古の都が偲ばれて情趣は更に深い。若葉を縫ふつばくらの翼の輕さ、突如雲間をもる午下の陽ざしに輝き初むる翡翠の上の寶玉の美はしき、南風そよいで惜しげもなくばらばらと散る、あゝ平和なる滋賀の里よ。

此處は今昔天智天皇の六年に大和の飛鳥から都を遷した處ださうな、恐らくは平和な美はしい清淨閑雅のこの滋賀の里が天智天皇の御意に召したのであらう。その當時は平和な幸福な都として彌榮えたこの里が思ひやられる。今や國破れて山河ありの例にもれず廢跡淋しけれども美はしの里は恰も古の姿の如きである。容儀ゆかしき大宮人が若草の露を踏み春醒めたばかりの比叡山を眺めて歌を詠み、久し振りに陽光を浴びる采女のもす曳きて若菜の間をさ迷うた情景は如何に典雅な一幅の繪巻物の如き風情だつたらう。然るに間もなく天智天皇の御崩御あり其の後全く荒廢に歸し音訪ふ者の姿すらない。

さざなみや滋賀の都はあれにしを

昔ながらの山櫻かな。

實に忠度はやさしき武士ではある。一族一門壽永の秋の木枯に散り果てた忠度の悲痛な心情と滋賀の里邊の寂寞とが共鳴し合つたのであらう。誠に史傳を繙き古を偲ぶ者無常の鐘の響を聞いて忠度と共に涙は襟に満たされる。流離轉變の浮世の常に今や古の都は變じて桑田麥里となり行く人をして懷舊の涙と麥秀の歎きとを喚ぶせる。

## 奈 良

五 丙 吉 田 知 二

電車は再び平地に出た。多年憧憬の的となつてゐた奈良に近づいたのだ。あゝあこがれの奈良よ、お前はどんな姿で我等を迎へてくれるのか。今や我等は多年の空想を現實にせんとお前を訪ねるのだ。願はくば我等の憧憬を遺憾なく満足させてくれ。やがて電車は奈良驛に着いた。遂にさびれた南都の懷中に入つたのかと思ふと、一種異様な感じがする。我等の空想は早くも現實へと一歩を踏み出したのである。

我等は胸を躍らせて走り出た。外には絹糸よりも細い梅雨が音もなく降注いで、四邊は薄曇色にぼうつと烟つてゐる。これが音に開ける南都かと思ふと、唯昔の繁華が偲ばれて恰も夢現の境を彷徨してゐる様だ。見知らぬ舊都を珍しく眺めながら古蹟見物の途についた。程なく猿澤の池が急に眼界に現れる。池畔の柳は細雨の中にしよんぱりと立ち、枝先を水面までだらりと垂れてゐる。對岸の五重の塔はさびしさうに池面に影を投げて、宛ら天平の昔を語りげである。

春日神社、名を聞いただけで既に優雅ではないか。梅雨に洗はれた鬱蒼たる緑の樹間に隠見する朱塗の社殿の壯麗さよ。新緑麗しく萌え出たる芝生の上に戯れる神鹿の優雅な光景よ。何れもゆつたりとした奈良の風物と相和して落着いた氣分を誘つてゐる。實に南都獨特の光景とも云

ふべきである。

神社の境内の廣いのびに驚きつゝ、行く内に突然嫩草山に突き當つた。土を盛つて築き上げた様な圓い丘で、雨にかゝつた若草の緑は實に心地よい。頂上の方は芳霞に閉ざされ、二つ三つの鹿が草を食んでゐる。我等は恍惚として暫時その景に酔ふた。櫻かざし、紅葉かざして咲く花の匂ふが如き奈良の都を練り歩いた大宮人はかくの如く優美な、ゆつたりとした人々であつたらう。聯想は次から次へと深まり行く。

梅雨の中に悄然として佇んでゐる二月堂、三月堂を見た時、如何で當時を偲ばずに居られよう。一として懷舊の種ならざるはない。今や我等は一層深く奈良の懷中に抱き込まれた様な感じがした。

薄暗い坂を下ると東大寺である。天にも届けとばかり思はれる大佛殿の壯大、その中に坐する毘盧舍那佛の慈悲圓滿な巨像、何處を見ても唯その規模の大きいのに驚くばかりである。我の大佛に對する期待は遂に裏切られなかつた。凡てがよく調和されてゐるから割合に小さく見えるのだ、と案内人が説明する。

今を遡る千二百年の昔、かくも大なる建築を如何にして完成したのであらうか。我は當時の佛教信仰の熱烈さと、藝術の繁榮とを追懷せざるを得ない。

奈良七代の天皇の、奈良を此の世のまゝの極樂淨土たらしめんとした御努力は如何に甚大であつたらう。かくの如き藝術を産み出した當時の骨折は如何程であつたらう。こんな事を考へながら歸途を急いだ。

夕食を済まして猿澤池畔に出て見ると先程までの細雨は名残なく止んで四邊の芳霞は次第に淡らいて行く。

そよとの風もない春の夕闇は恰も薄曇色の絹の幕を一枚々々靜かに蔽ひ被せる様に迫つて来る。その夕闇に逐ひ縮められた様にほのかな明る

さが西の空をうつすりと染め出してゐる。猿澤の池は青黒い水を湛へて、静かに暮れて行く空の下に圓らかな夢を結ばうとしてゐる。

### 煙霞の新緑妙義

四 甲 赤田隆之助

宇宙の森羅萬象總てのものが、煙霞に閉ざされつつ折柄の初夏の風に、小波の音も静かに深い眠りより目覺めて行つた。

仰げば果てしなく青え渡つた碧空高く、小鳥の飛び行く一點の塵埃の如くに見え、新生に燃ゆる太陽の輝きに吸収せられて行く如く東へ東へ!!と消えて行く。時々吹き来る風は新緑を波立たせつつ山中の濕氣を多分に含んで頬に寒氣を思はしめる。

我々の一行は若干の距離を置いて、石の多い而も水々した赤土を踏んで狭い山道を左手に泰然自若として微塵も動かぬ岩の數多連つてゐるのを視、右手に足下より削除されたやうな急傾斜或は岩松の生えてゐる絶壁を目にしたがらやつとの事で第四石門をくぐり第二休憩所に到達した。

歩行の疲れを一杯の水に渴きを醫しつつ木々を背に一本の柱の様な岩石を左にして腰を下した。

聲高らかに「天狗様は今でも居なさるかな」と望遠鏡を覗きながら皆を笑はせてゐるのは伊佐山先生だ。笑聲に引かれて前面に視線をなげうつと眼前に展開された景、夫れは恰も箱庭にでも作つた様な奇岩怪石大巖老木等の配置もよく自然界の有様を赤裸々にさらけだしてゐる。碧緑亦新緑目に映ずるもの皆緑を帯び、奇岩の下方は集つて圓形をなし其の中央に清き泉が小道を開き東西に白線の如くに見える。岩と岩とは重り合ひ、互に頼りかかつて連嶺を爲し、天狗評定岩を眼前の岩を越えて望み左方に九州耶馬溪と東西相對して並び稱せられる由縁の怪石妙義特有の

絶壁に臨むである。大砲岩が中天高く一際目立つて見える。丁度小石門を通して覗かれる。

「ホーケキヨ」老木の繁茂してゐる其の間を營の枝より梢より梢に飛び移り飛び移りながら折節其の美しい聲を出してゐる。其の美しき而も愛らしきを含む聲は静寂の中にこだまして霞に煙るあなたの山々に薄れ行く。深山而も霧の景を伴つて鳴く營の聲は何んとなく我々の心に一種の藝術的に畫家としての立場より想像した時云ふに云はれぬ美景がある。平生都會で聞く營とは趣を異にして遙かに自由な而も優越してゐる聲だ。此處に於て我々の心中には斯くも束縛されない自由な聲を聞き得られる此の箱庭の如き小景は平和の氣に満たされてゐる静寂にして眠れる如くに思はれた。オーオー可成りの強い反響に振り返つて見ると、轟大尉に非ずんば征服出來得ない様な大砲岩上に泰然として立つてゐる熊中健兒の勇士が目に入つた。そは何たる景ぞ。恰もスクリーンに屢々出て来る山中の征服者の平和の中に抱かれつつ兩手を上げて四方を見渡し自然を謳歌し讚美せる姿に似てゐる。而して今其の下方を指す姿は碧瑠璃の如きくつきりと澄み渡つた穹窿形の天空に現れ此の自然の煙霞に閉ざれてゐる小景に住む人の平和な一景を瞰下する如く又かのナポレオンのアルプスを征服し一舉伊太利に攻め入らんとする時其の征服地と未來の征服地伊太利を眺めた過去の事が想像される。其れは彼が得意の絶頂に達してゐた時と同じく自然にはられた英雄の如き雄姿に暫らくは茫然として夢に夢みる心地でうつとりとして打ち眺めた。我々は斯くの如き静寂と平和との環境の雄大さに感化せしめられた自然に一種の憧憬を感じた。朝は此の自然界が山寺の鐘に目覺め、夕日に照らされつつ眠り行く時を想ひ、恰も四邊の連嶺が自然に親しめよと教へるかの如く思はれた。

山林に自由存す

われ此の句を吟じて血の湧くを覺ゆ

嗚呼山林に自由存す

いかなれば我山林をみすてし

皆を決して天外を望めば

をちかたの高峰の綠森の朝日影

嗚呼山林に自由存す

われこの句を吟じて血の湧くを覺ゆ

なつかしきわが故郷は何處ぞや

彼處に我は山林の兒なりき

願みれば千里江山

自由のさとは雲底に沒せんとす。

(國木田吟集)

### 第四石門の眺望

四 甲 原口清一

漸く疲れを覺え始めた足をさすり、じり／＼とめ度もなく惨み出る汗をふきながら、不恰好ではあるが、巨大な樓門の如き第四石門にどつかと腰を据えて遙か足許に豁然として展開する緑色濃き下界を恣に瞰下した時の心地こそは、眞に妙義山踏破を経験せるものならでは、到底味ひ得ぬ痛快味である。林立する奇岩の間から、一面に緑衣を纏つた關東平野の一角が妙義山の体容の前には面々はげに、所々その姿を現してゐる。ちぎれ雲の間から時々思出した様に、覗き込む初夏の眩しい太陽の光を受けて、銀の帯かともまがぶ一筋の川が森を越え、林を渡り、野を

横切つて、うね／＼しく何處迄も續いて、涯は霧とも霞ともつかぬ灰色の帳の中に、何時の間にやら影をひそめて了ふ。林を背にして、茅葺屋根が、此處に一群、彼處に一群と點在してゐるのや、灰色を多分に帯びて、森や林に見え隠れしながら、蛇行してゐる街道なども、さながら手に取る如く見渡される。

更に鋭々として、聳える巨岩に眼を轉ずれば、大小の奇岩、參差として錯綜し、いづれも惜し氣もなく、その青黛色の肌を天日に曝し、我が美を誇り、或は縁の衣に容を新め、嚴として四方を睥睨する。細かに見れば岩に意あつて喜怒哀樂の情を表して居るかの如く、互にその勢を張るに吸々として、目を瞞じ、肩を張り、負けず劣らず林立する。

懸命の努力を拂ひ、辛うじて登つた第二石門も、又動もすれば、滑り落ちな足を踏みしめ、全身の重みを一本の鐵鎖に託して、夢中のうちに越した難險釣瓶落しも、さては虚空を墜してそゝり立つ蠟燭岩も、今は、眼下の一小景にすぎぬ。思へばよくも無事で登り得た事よ!!

此の難關突破の限りなき満足と、素晴らしい眺めに接し得た我が心は、唯、歡喜に溢れてゐた。思はず快哉!!を絶叫したのも實に此の時である。「人をして羽化登仙の思ひあらしむ。」の實感も、此處に至つて初めて會得された心地がした。

心ゆく許り、此の清淨神祕な自然境を賞翫して居たかつた。それは嘗て経験した事の無い、崇高、偉大な威嚴がひし／＼と身に迫つて來るのを覺えた。到底表現しようもない神祕的な氣分に外ならなかつた。妙義山は此處にかうして、何千年、何萬年かの歲月を過し無言のうちに、幾多の時代の變遷を目のあたりに見た。そして今猶、沈黙を固守してゐるが、我が息を殺して、冥黙する時、靜中纔に動あり、あの巨大な全山が、甚だ微かではあるが、地球の歴史を瞬き、造化の神の手際良さを讃へる

聲が湧き起る様な靈感に打たれて、悚然として、佇立した。  
仰ぐ遙か頂には、梅雨時の雨雲が一面に山を襲ひ東に／＼とつき進む。  
あたりは湯氣を帯びて何んとも息苦しい。岩の肌も緑の葉も、一際鮮  
かに浮立つて恰も我々にその雄美を街ぶが如く見える。

### 妙義登山

四 乙 濱 良 一

一面に轉つて居る岩石、其上に枯葉が積りちくちくと濕つて居る。そ  
んな道を我々は進んだ。  
一寸後を振り返つて見ると、未だ鎖に縋りついて恐る／＼下りて来る  
者がず／＼と連つて見える。

皆黙々として少しづつ、蠢いて居る。

此の第二石門は妙義山でも難所に數へられて居ると云ふ。

もう先の者が見えない。あわてゝ又岩から岩へよじ登つて急いだ。薄  
曇りの天候で可成り茂つた木が一面に生えて居り、邊りの岩は皆濡れて  
居る。やゝ平坦の所迄來た。前に當つて大勢の騒ぐ聲が聞える。第四石  
門だ。大岩石が長年月に亘つて、少しづつ削られて行つて出來たのが此  
の穴だ。其所には人技と異つた雄大な、輪廓の豪壯さがある。

「ッ／＼」として自然の力が如實に表れて居るのが妙義山の特徴であ  
る。暫時休息して、大砲岩へ向つた。

やう／＼登りつめた時、一時にバツと眼界が開けた。足下は千尺の斷  
崖だ。

茫々たる綠原、無窮に展開せる大地、仰げば蒼穹亦悠々、瞬時に變ぜ  
し光景に、目は遠く悠遠の天地に飛び、心又自由の氣に躍る。全山緑に  
塗れつづされた妙義の諸峯背面に峙ち、山氣の横溢は、清新な初夏の香  
を漂はす。狂はしき迄の歡喜に満された一葉々々の細かくナリ／＼と震

へるは、一層生氣の脈動するを覺えしむ。

勃然として湧出せる霧は峯を濃く包み、中腹には白い霧粒が緑に反映  
して靜かに流れて居るのが見える。

千尺の斷崖と、大森林との深山、其處には如何に多くの神祕と、大過  
去の追想とが含まれて居るであらう。

山の持つ傳説それは神祕そのものである。

悠々追らず然も止り無き時の大流を俯瞰して、太古より靜に存立せる  
山嶽には、今も太古のまゝに日は輝き、月は照り、雲は行くであらう。

あゝ湧きて止らざる大過去への追想、超塵世的な山のみのもつ清崇な思  
ひであらう。

峻巖たる高峯、寂々たる深山、此の神祕嶺、此の仙境誰か自然の崇嚴  
に打たれぬ者が有らうか。

有限の人命に對して無限の天地、人は死すに永久に續く自然、この偉  
大さに此して、人間のあまりに小さく、はかなきを切實に感ずる、

かくて難絶、奇絶以て其の名を著はせる妙義山を經歩した我々は、一日  
を初夏の強い生命の鼓動の中に過して、下山の途についた。

### 富士登山の記

四 乙 大 島 謙 二

私達一行、それは南日、福永兩先生及び熊農の先生、生徒十二名、全  
部で十五名であつた。

二十二日、午後八時半頃、皆熊谷驛に集合した。松村先生も見送りに  
來られた。皆喜び勇んでゐた。九時九分、熊谷を立つ。福永先生は都合

により新宿より來られた。十一時五十二分、新宿を發す。夜汽車とは云  
へ、車中はキヤンパレーや、その他の人で相當に混み合つて居た。座をし  
めても、中々寝られなかつた。が、うとうと眠氣を催したのは一時前後

だつた。

午前二時四十七分。列車は六月驛に着いた。一時間許り電車で揺られ  
て、富士吉田へと着いた。四時半か、そこらだと思つてゐるが、東の空  
が白みかゝり、朝の清々しい風が吹いて來る頃、僕等ははいよいよ登山に  
とかゝつた。空は間もなく晴れて來た。日本晴だつた。「北口本宮」  
麓から少し行くとある――に着いた頃には、太陽はかん／＼と照りつけ  
てゐた。馬返しまでの道は距離も短くなく、又平凡な道だつたので、か  
なりの疲勞を覺えた。六時頃でも汗はばたばた落ちた。一定の幅にしき  
られた道の兩側には青葉が茂つて居り、シューシューと蟬が鳴いてゐた。遠  
くで山鶯の鳴くのを聞いた。

時々、ハイ、ハイと馬方が人を乗せて來るのを見かけた。乾燥しきつ  
た地面は、如何なる水分をも欲するものゝ如く、玉なす汗の落つる間も  
なく吸ひ込まれた。兩側に並ぶ木に眼を慰めながら行く。馬糞と汗との  
異様な匂ひが鼻をついた。どうやら馬返しに着いて、小亭に休んだ。  
此處から次第に山らしくなつて來るのだ。道はごつごつしてゐる。一合  
目に來たのは割合に速かつた。二合目も直ぐだつた。大木の影に小川が  
流れてゐた處があつた。汗は急に冷て身體がす／＼とするのを感じた。後  
からナリシ、ナリシと鈴打ちならしつゝ、登つて來る。「はんこ」だらけ  
の白衣の人か、大勢登つて行く。一歩行く毎に、地は險しく、登山者も  
その數を増した。

上を見た。薄黒い雲が頂をとりまいてゐた。あの雪の少し左手に見え  
るのが八合の石室です。と、強力が教へて呉れた。思へばまだ僕等の前  
途は長い。僕等は只管歩みに歩く。

五合目に着いて、茶屋に休んだ。そして腰を下して下を望む。果しな  
く見ゆる青い原、青い山、總てが青い。その中に細い道が縱横に走る。

人家は處々に見える。自分は何か偉くなつた様に感じた。あゝ、さう  
だ。此處は、もう「天地界」なのだ。

此處を出ると急に、天國へ來た様な氣がした。五合以下とは様子が大  
分變つた。山は赤や黒の燒石によつて敷きつめられてゐた。空氣は冷て、  
つめたくなつてゐる。ずつと下は霧で見えぬ。霧が次第に上へ、僕等を  
襲ひに來た。スーと白い霧の汗を飛ばして呉れる心地よさ。下界に居つ  
ては、到底味はひ得られぬものがあつた。

何と多數の登山者の居る事よ。上を見ても、下にも、道と云ふ道は人  
でうづめられてゐるではないか。白衣の人が、鈴をならしながら金剛杖  
を、つきながら、元氣のよい聲をしてやつて來る。

……六根清淨、お山は晴天……疲勞をも吹き飛ばす様な聲で。

おい、富士登山をする時、登山者の口より、ほと走り出る言葉こそ、  
是なのだ。因みにその由來を記さう。六根とは、六本で吾々の目・耳・口  
鼻・身體・心の六で、古人は惡は此處から入るから、つとめて清めて登ら  
うと云ふ意。晴天とは、聖地の事で、山は清いと云ふ事。故に山と同様  
身體も清めて登らうとの意。

僕達は都合で、八合目までは行けなかつた。その夜七合の石室に寝た。  
室では二晩中、火をたいてゐた。薄暗いランプの下で、僕等は煙になや  
まされた。「二十四日」朝、二時に起されて、暗い、狭い處で朝食を取  
つた。皆、用意して出發したのは、二時半頃だつた。一歩外へ出れば、  
寒氣を帯びた山の、朝の空氣が、四方に漂つてゐた。随分寒い。僕等は  
冬の服装で外に出た。まだ、あたりは暗い。下界の灯がちらほら見える。  
八合目までは、かなりの道程があつた。ごつごつした岩を一步一步踏み  
しめて登る。空氣の薄い故か、少し歩いても、直ぐに疲れる。東の空は  
次第に明るくなつて來た。四時前後、水平線は、くつきりと浮び上つた。

さうして長く長く紫になつた。紫は變じて橙色にならんとしてゐた。四時半頃、次第に色は濃く、鮮かになつた。波が極く小さく打つてゐた。橙はその度に、細かく動いた。氣持のよい朝風が吹いて來た。まだ幾分寒い。眞黒の小さな雲が數片棚引いた。正面の波が瞬間的にきらつと光つた。と、急にぱかつと眞紅の太陽が波に映じた。見る見る大きく輝いた。眞紅な太陽に對する眞黒の雲、その對照實に壯觀そのものだ。如何なる作家の言によると、如何なる畫工の筆によると、到底表現し難い趣があつた。御來迎は時に四時四十五分。此處は八合目だ。太陽はすっかり水を離れてゐた。壯嚴と云はうか、美麗と云はうか、雄大と云はうか。思はず。頭の下るを感じた。

畏れ多い事ながら、明治天皇の御製を思ひ浮べる。

さし昇る朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり。

暫くの後、九合目に着いた。此處は昔時、險しかつたと言ふが、今では八合以下と同じだ。だがなほ「胸突八丁」の名を留めて居る。上を見るに頂はすぐ手前なのだ。だが、なかなか行けぬ。古人は「百里の道は、五十里を以て中ばとせず、九十里を以て中ばとす。」と。誠に首領せらるゝ言葉だと思つた。日は強く照るが暑くは無い。身體は全く疲れた。殆んど金剛杖が便利だ。やつとの事で頂に着いて神社を拜した。頂とは云へ、神社あるのみで、最高の處ではない。此の上にはまだ「劍ヶ峯」があるのだ。神社を拜して前を見れば、赤い燒石で出来た山がある。そこが劍ヶ峯だ。下には太平洋が、遙かに洋々と水を湛へてゐる。時には、千葉の九十九里の方まで見えると云ふ。室で休んで後、お鉢廻りにかゝつた。あの劍ヶ峯は何となく支那風の建築が何かの様な氣がする。左には下界が一望の内に収る。「奥の宮」に來てから、參拜して記念撮影をした。太

陽が出たり、入つたり、風の向きが常に変る。太陽の照つてゐる時でも、一瞬の後は、空がどんより曇る。

俳句に云ふ。……晴れ候、曇り候、富士日記……

萬年雪と云ふのがあつた。照つても、降つても、常にそのまゝ残つてゐる。下の方は氷結して滑る。上を取つて煩ばつた。ザクザクしてうまくない。

此處から直ぐに劍ヶ峯に行く。其處で岩に腰を下して四方を見た。高い山も、低い山も、起るのも、伏すのもある。けれども、そのどれよりも自分は高い所に居るのだと知ると何となく嬉しくなつて來る。誰か、ロッキーに登り、「吾、ロッキーより高きこと五尺。」と豪語した。僕も今、彼と同じ境遇に在るのだ。

少し休んで、下山した。これからは降る一方だ。前の道をもどつて、昨夜の室に來た。用意萬端、道を砂走りと取つた。細目の砂のザーツと麓まで續いてゐる坂だ。正午前だつたが、日は影つてしまひ、眞白な霧が昇つて來て、日暮時の様な感を與へた。

丁度、雪の中を歩む様に、裸の所まで砂が来る。少し走ると、さあ、止らな。やつとの事で、金剛杖で支へる。と同時に立つては居られず、腰をつき、背をつく。砂が背中を走る。五尺以上は滑る。本當に愉快なのだ。再び立ち上つて走る。霧が、そろり、そろりと靜かに地を這つて、吾等を襲ふ。上はもはや霧で、頂は見えぬ、幾度かひつくり返り、亦立ち上つて走り、滑つた。思ふ存分走つて、滑つて、足がぐたぐたになつた頃、麓の某神社に來てゐた。今正午頃だ。此處から七里も行かねばならぬ。暫く休んで後出發した。精進湖まで行くのだ。山麓を通る時、雲から頭を出した富嶽は如何にも雄大に、け高く見えた。少し行くと林に這入つた。道は急にせまめられ、大きな石が轉つて居た。木々は左右よ

り、おひかぶさつて狭い道は更にせまめられた。可憐な石楠花が岩の間で微笑して居た。林を出ると小御嶽神社に着いた。一行は、參拜して出發した。今度は平地だ。今まで涼しすぎる位に冷えた所にゐた僕達は、今、急に七月末の日光に照されて、上衣をリユクサツクに入れた。これから七里、六時までは精進に行かねばならぬ事として一行は道を急いだ。道は坂で、廣かつたが通る者、人つ子二人居らぬ。長い間、平凡な道だつた。少少、歩むのにいや氣がした。わづかの重さのリユクサツクも、非常に邪魔に、非常に重いものの如く感ぜられた。處々に立つ道しるべの里數の減るのを樂しみに歩いた。彼れ是れ三時頃だつたらう。

「氷穴」に着いた。直徑は一丈餘りもあらうか、地面に大きな穴がある。下に行く梯子があり、それにつかまつて行くと、涼風が吹いて來て何とも言へぬ氣持だ。雪で穴は充たされてゐた。上へ出て來ると、むつと暑い。暫くそれから、日に照されて、太陽の幾分西に傾きかけた頃、僕等は長い林の中を歩いてゐた。層をなす落葉を踏んで、黙黙としながら。もう聲を出す勇氣もない程、疲れてゐたのだ。間もなく、第二の天然紀念物「風穴」に來た。此處は前のにもまして、大きい。蠟燭を手にして、大きな岩石にある横穴を、這ふ様にして、傳つて行つた。上も、下も、左も、右も、四方は皆氷だ。足の裏がしつとりしめる。時々、呼く息が白く蠟燭に寫る。寒さは、ひしひしと身にせまる。奥は随分深い。頭のぶつかる程、低くつらゝになつて下つて居るものもある。太い鐘乳石の様なものもあつた。蠟燭は残り少なくなつたので外に出た。此處の温度は氷點下三度位であらう。

それから随分歩いて、精進湖畔に來たのは、六時半頃だつた。此處は亦良い眺めであつた。洋々と湛へる精進。その向ふに起伏する山山。今までの疲れを醫すには充分であつた。直ちに僕等はボートの人となつた。

がたごと、がたごと十分許り、モーターボートに揺られて旅館池田屋に來た。一同は定められた二階の一室で食事をした。食後、欄干に凭れて湖水を見た。長い夏の日も、薄暗くなつた。村の灯が見えた。夜のときは層一層色を増した。

〔二十五日〕五時半に起きて、宿から僅か距つたバボラ臺に登つた。右に當つて見ゆるは本栖湖、その向ふにはアルプスの連山、正面には富嶽、左手には山口湖、折からの朝日に映えて殊更に美しい。二十分後下山した。朝食の後、精進のボートに乗る。前方に富嶽を望みつゝ、ボートはゆるい湖に小波を立たせた。十時、前夜乗つたモーターボートに乗り自動車にて西湖に趣く。又モーターに乗る。此の日も前日の如くかんかん照る日だつた。ボートは靜かに動いた。魚釣りをする人を見受ける。ボートは湖の形なりに曲る。その度毎に移り變る景色の面白さ。塵一つとゞめぬ碧い、澄み切つた湖だ。

富嶽の峯も見位置により趣が異つて見える。此の水、此の山、誠に山水の美なのだ。此の風光あればこそ、外人までもが、吾國を讚美し、憧憬するのだ。

船は廻り廻つて、十分後には上陸した。暫くの間歩めば、五湖中最大と稱せらるゝ川口湖畔に出た。

疑た山を左に見、右には又一段と趣を異にせる富士。その麓に散在する家々。

ボートの動く毎に四方の景色は變じて、新たな世界は次々にと生み出されて行く。彼方に有名な敷島の松が見えた。ひよろつと伸びた細い幹の上に少し葉をとゞめた何となく風情がありさうな、さうして見馴れぬ枝ぶりだつた。

雄大富嶽の英姿を背景とし、漫漫と湛へる川口の湖、其處に生ひ立つ

異趣ある数本の敷島の松。

そは、眼前に見た者のみ味はひ得る絶観なのだ。僕は櫻の咲く日本に生れし事を誇に思つた。

小一時間の後上陸して、自働車に乗る。途中「猿橋」に下りる。猿に教へられて造つたものだ、と。

古い木の橋だつた。水面までは、相當の距離があつて、唾をすれば、くる／＼輪になつて降るさうだ。

折しも雷鳴聞え、大粒の雨さへ交つた。皆急いで車中の人となつた。自働車は只管驛に向つて、走つて行つた。

### 妙義紀行

四 丙 古 郡 英 治

妙義妙義、何と懐しい、壯大な、且奇怪な言葉であらう。妙義の山よ、奇岩絶壁其のものを以て天下に歌はるゝ、汝こそ俺の大なる空想を、俺の妙なる憧憬を如何に出現してくるか。願くば俺の空想其の儘であつてくれ。電車はなだらかな曲線を畫いて初夏の緑を縫ふ。

中岳神社に到着、我々はいよいよ妙義山中に第一步を印したのだ。旭岳の絶壁が目の前に突立つて居る。空想の奇岩は最早現實の奇岩であつた。

先づ第一に旭岳に登る。一歩々々踏みしめる岩のかけらにも何千年、何万年の歴史が潜んでゐるのだ。實に我が國最古の死火山の一つである。登り登つて道の行きつまりには鎖が下つて居た。俺はこの鎖をどんなに愉快に懐しく思つてゐたかしのれない。攀ち登ると何だか急に偉くなつた様な氣がした。壯快々々これこそ本當の絶壁だ。轟大尉は逆立をしたとか。俺にも出来そうな氣がする。汗を拭ふと涼しい初夏の風が面をすきて行く。良い氣持だ。

まゝ、憧れの妙義を後にする。おゝ、懐しの妙義よ。さらば。

### 旅 行

三 甲 町 田 隆 則

六月十一日、先日來の雨奈く霽れ、新樹更に緑を加へ、鳥雀啼を喜び、我も亦晴を喜び、我が旅行へ足の踏む所を知らぬ。

午前所澤に行き、午後村山貯水池に行く。

驛より南と思ふ邊四町を行く。青松點々として小丘に有り、白砂銀の如き道あり、池の堤あり、芝生雨に潤ひ青々として香をはなつ。堤の小道を辿りて、上に上れば、池鏡の如く澄み、一幅の名畫を展たる如し。近くは銀の如き小波、セメントの岸に打ちつくるも興あり。堤の欄に凭れて遠く眺望すれば、萬石の油を流したるが如き湖水にて、對岸の芝生に松蔭若として、詩趣豊なり。

之の水が百萬の東京市の飲料水となり、まだ不足すと、新聞に報ぜられるのが、嘘のやうに思はれたり。

後は堤の芝、右方なる小山、松の木こもり茂り、一種の趣あり。東村山の驛も眼下に見へ、遠く空の彼方なる方、爆音空の静けさを破り、雄飛する飛行機の姿も對照の妙あり。

少休を得、湖畔を逍遙す。足下に潺湲なるせゝらぎ、無限の妙音に我が腸を洗ひ、恍惚として閑入たり。我は湖畔にたゞずみ、我は満幅の詩趣に酔へり。かくして、一日の樂しき旅行終り、歸途につけり。

### 村山貯水池へ

三 乙 井 上 梅 作

僕等は所澤で又電車に乗つて、東村山に向つた。ちきに東村山に着き下りると村山貯水池に通ずる電車が待つてゐた。所澤から來て又歸つて了ぶのかと思はれる様に前に來たのと同方向に向つて行く。田圃や小

男みに勇む我等百三十名はいよいよ石門廻りの途に上る。聴け。あの響、谷川のせゝらぎを。實に大自然の奏する聖樂の妙音である。それは何とも云はれぬ不思議な感を我等に與へる。「ホーホケキョ」、何處ともなく漏れてくる鶯の谷渡りもなか／＼趣がある。左手には屏風の様な絶壁が迫つてゐる。雲がひつしりと頂上を罩めて、恰も白い繪具をばかした様である。それがひどく我々の心を惹いた。何と美しい、何と壯大な眺めであらう。誠に見るもの、聞くもの一つとして奇ならざるはない。「石門だ」と、誰かが叫ぶ。見よ、第一石門の英姿を。實に絶壁に穿てる自然の石門である。何千年以來の歴史を目の邊り物語つてゐるではないか。第二石門、これには更に驚いた。實に大きい。卵形の石門である。鎖で蟹の横匍を匍ふ。其所には石門に攀ち登るための長い鎖が下つてゐる。この奇岩實に口筆に盡し難い。此處に登つて俺はつく／＼造化の神の偉大に力に敬服した。第三石門を過ぐるや、俺は更に壯快なる英姿を見た。第四石門を通して見ゆる奇岩こそ、想像其の儘の大砲岩ではないか。雲は次第に濃く、次第に廣く、大砲岩さへ間もなくかくれてしまふだらうと思はれる。先づ一休み。微風が訪れてはなごやかに汗の顔を撫で過ぎる。此所はかなり見晴がよい。總て霞につゝまれて一層趣が深かつた。

數回鎖を攀ちて大砲岩に登る。あゝ何たる壯快ぞ。數年間の宿願此に達せられて、俺は今や大砲岩の上に立つ。此の一瞬間の氣持こそ、誠に語に表し難い。この様な氣持を浩然の氣とも云ふのであらう。頼山陽は云ふた「以妙義爲天下無雙」と、誠に今の俺にも唯此の一言あるのみである。

さらば妙義よ、奇岩絶壁、悠々として迫らざる汝の英姿こそ、永遠に俺の心底に刻み込まれることであらう。さらば。汽車は無情に乗せた

い山の間を縫つて走る。

何と言ふ驛名だつたか終點まで來ると、もはやここは貯水池の麓である。そこを通り、前を見れば、一面に青い草が生えてゐ、長い長い堤防が続いて、人工とは思はれぬ。高く、又大きく、直ぐ目の前の草原は幾段にかコンクリートで堀が拵へてあり、大牧場の草原を見るが如く、堤から一面は、埃一つとめない青い面だ。そして一方の堤の端まで行く。そこから堤の上に向つて、よく曲つた芝の道を昇つた。

そばに在つた電柱の上に止つてゐる鳥が何となく轉つて、あちらへ飛び去つた。鈴木は「よしきり」だと言つた。そこに開えた鳥の聲は唯それだつた。靜かだ。

昇りつめると、前に展開された大海原、見渡すかぎり青い水が見られ、向ふのはじは、松の木が生ひ茂り、眼を轉ずれば、自分達が今昇つて來た堤の上はコンクリートを以て造られた橋の様な道は、一千米以上もあらうとこちらから一直線となつて續いて、一寸入つたところに、立派な建物が立つてゐて、それは、東京市の水道局だつた。そこを過ぐれば、池の中に入つたところに、鐵橋があつて先には圓い西洋つくりの建物がひとり立つてゐる。

あとで丸山先生のお話に依れば、その内に太い鐵管が入つて、それに依つて、泥橋に行くのださうである。その建物だつた。

内にはどんな仕掛があるのか入つて見たかつたけれども吾々には不可能だつた。さうして、その水がやがては東京市民の、命の親とも言ふべき、飲料水となるのかと思ふと一層感じが深かつた。

我々はこの貯水池を見て、何しろ大仕掛なのと廣いのに感心させられて了つた。この外に尙二つ位の貯水池があると聞いて、驚かざるを得なかつた。その道を歩いて向側には、村山ホテルが、西洋館の大きいのが

聲えてゐる。ホテルの前に休んで歸るときには、自由行動が少く、歸るのを惜んで電車に乗った。

### 旅行

三 乙 田 中 等

電車はやつと目的地たる所澤の驛に近附いた。四五人の者が突然左側の窓から手を出して、「あれあれ飛行機が見える。」と一大発見でもしたかの様に叫んだ。そこで僕も外を見たら成程茫々たる緑の平野が広がって居て、遙か高空には二三の飛行機が宛ら秋空を自由に飛び廻る赤蜻蛉の様に飛んで居た。時々雲間に入つて音だけになる、かと思ふと再びその姿を現はして、見て居てもひや／＼する様な木の葉落し。そのまゝかなり低空迄落ちて来て蜻蛉位に見えたのが玩具の飛行機位になる、此の儘下界迄落ちたはしまいか、と心配する、然し飛行機は僕等の心配等少しも知らぬに、さうして遙々と再び爆音勇ましく上空へと飛び去る。皆感動の聲を擧げてその跡を見守つて居たら突然ざ／＼と澤山の水が一時に押流される様な音が頭上でした。皆はつとて思はず見上げる、すると電車の屋根の上から大きな光つた塊が飛び出した。次の瞬間には太陽の光を浴びてきら／＼輝いた一臺の飛行機が飛行機の方へ殆ど地面とすれすれに飛んで行つた。之を見て今迄授業中にさへ飛行機の音がすると直に飛び出しさうになつた僕等はあまりにも澤山の飛行機が或は高く、或は低く、かと思へば今迄あまり見ること出来なかつた單葉飛行機が胸のすく様な色々の高等飛行術を爲してゐるのを見て非常に好奇の眼を見張つた。所澤驛に着いて皆降りて驛前に並び列を造つて飛行機に向つた。

途中でも澤山の飛行機を見た。誰も誰も空許見て居てろくに足もとも定まらない。然し町の人々は一向に飛行機等氣にも止めて居らぬ様で

ある。馴れて了ふとどんなに珍らしい事も面白い事も何とも感ぜぬのであらう。飛行機へ到着すると先づ案内されて格納庫へ行つた。案内人が色々説明して呉れた。殆ど全部が耳新しい事なので皆大満足であつた。午後、講演があつた。之も亦面白く且つ有益であつた。三時頃飛行場に別を告げて再び停車場へ向つた。

### 飛行場へ

三 丙 荻 野 耕 作

嗚呼我等の眼前には如何なる姿の村山、所澤が待つてゐる事であらう。昨日迄五月雨がうちけぶつたのに、おゝなんたる絶好の旅行日和。今や埼玉唯一の市かつては川越城の城下町として武蔵に誇りし川越を後にした電車は傾斜の緩やかな岡の上を走る、眼下には今を測つて五五〇年新田義貞と北條高時旗下の勇將金澤貞國との激戦地で世に名高い入間川の古戦場を望み、秩父連山の一角は雲の衣を緩やかにつけ遙か眼前に横つてゐる。その普建武の中興に偉勳ありし義貞の初戦地を偲んでゐる間に早くもその景は後方に遠く今は何も知らぬ初夏の風がその古戦場を静かに吹いてゐる事であらう。

やがて爆音勇ましく所澤飛行場へと到着した。眞一文字に馳ける滑走の美、さては木の葉落も宙返り爆音轟々として絶間ないおゝ偉なる哉空の勇者。やがて説明者と共に中央の格納庫へと歩を進んだ。中には日の丸鮮やかに浮ぶ我國民愛國の結晶の愛國號・八八式偵察機爆撃機・九一式戦闘機等科擧の精銳我神州を護る空の勇者なりと翼をならべ泰然と居たらふ何年後か一朝事ある時太平洋怒濤の上はた満蒙の大平原に光輝ある我神國を護つてくれ、まもなく爆音に袖をひかるる思にて之又東洋一と誇り大東京市民命の綱村山貯水池へと向つた。

提防は一大長城をなすが如く上は緑の芝生で埋め水は翡翠をとかし

たやうに清くコンクリートの波打際には小波が風と共に當つては砕け、沿岸の松は綠蔭蒼々として清水にその艶麗な姿をうつし實に人工の美、自然の美を兼ねた名勝地でした。私は水面を吹いてくる涼風に面を吹かれ、てすりに凭れしは恍惚としてその美しき景に見いつた。

修學旅行に多大なる効果を修めた我等は日西山に傾け、とする關東の大平原を汽車にゆれ乍ら、多くの知識をあたへてくれた所澤飛行場又あの人智の偉大なりし大工事村山貯水池を靜に追想して。

### 村山貯水池旅行之記

三 丁 布施 督 太郎

待ちに待つた旅行日、愉快なる旅行の日は来た。梅雨の空からりと晴れて爽快なる氣四邊に漂ひ翠滴る連山湖水に倒映し一層の美觀を添へる。

湖上を渡つて吹く風は靜かなリズムを奏する様、貸ボートの一隻ばかり浮び出でたるも又面白きながめである。

村山の貯水池、其れは我等の想像に反せず縹緲たる深蒼の湖水だ!! 偉大なる自然の懷に抱かれて新しい空氣を胸一杯に吸ひ込んだ。それは氣持良い第一印象だつた。

友と感嘆の聲を捧げつゝ湖畔を逍遙せば、清淨なる景色は俗界の醜を洗ひ自ら邪念を去らしめ清い氣高い心にならざるを得ない。と同時に廣茫たる湖水は我が心を雄大・無我の境地に引き入れるに充分である。我が胸の新しい活氣にて鼓動するを感ず。

村山貯水池!! 嗚呼神祕なるべからざる地。

### 旅行の一節

一 乙 秋 山 孝

日はかん／＼と、我等の頭上で照つてゐる山路は思つたより急で、仲

々骨が折れる。背中はじつと汗ばんでゐても氣持が悪い。もう一息だと思ふとなんだか足が軽く持上る様な氣がして、元氣が自然と湧いてくる。前の松崎君はずつと前からふうふう言つてゐるので、お尻をカツと押してやつたら嬉しがつてゐる。やう／＼の事で山の頂上になどつた。

もう甲組の連中は一つ大きな岩の上に陣取つて、愉快さうに話しながら御飯を食べてゐる者、素裸になつてわ／＼言つてゐる者、丁度蜂の巣をつついた様なさわざである。前方に武甲山の白く禿げた六百尺もある。絶壁の探掘所が見える。後を振り返れば眼下に見えるは影森の停車場及其附近の村である。はるか向ふに立並ぶ家が玩具の様に小さく見えるのは、秩父町である。其の左方を流れる川は荒川であらう。うねうねと曲折してゐて丁度大蛇の様に流れてゐる。私は一つの中位な岩の角に腰掛けて辨當を出して食べ始めた。

すると案内人が一番高い岩の角に立つてサツサツと五六回手拭を振つてじつと探掘所の方を見てゐるので、今度は探掘所を見たらやはり此所と同じやうに白旗を振つてゐる。きつと爆發すると言ふ合圖であらう。案内人はだまつて探掘所の方を見つめた。私達も胸のどき／＼するのを押へて前方を見た。時は来た!! 前方の白く禿げた絶壁が黒い砂煙や岩石を空中にはね上げた。…と思ふ間もなく「ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド」といふ大音響が地面をぶるぶるツと振はした。その大音響と共に大小無數の岩石が「ガラガララザザザ」と音を立てて砂煙を上げて六百尺の上方から雪崩のやうに落下してくる。あまりの壯觀さに私達は思はず喊聲を上げた。實に壯觀である。すると案内人が「萬歳」と一聲高く叫んだ。それにつづいて又私達の「萬歳」と言ふ、山を振はすやうな大きな聲が秩父の山に響き渡つた。



## 詩歌

### 夕方の海

五甲 本山 正三

波に心を魅せられて  
波間の音を聴くにつけ  
現心の何語も。  
行きも飛び交ふかもめの群が  
共に急ぐよ、ねぐらはいづこ  
彼等仲間の愛の旅。  
戻る小舟に魚は躍る  
潮で育つたこの腕、この身  
銅の背中に負けずに光り  
西にや真赤な日が沈む。  
努力  
何が何でも此の問題は  
何が何でも此の時までに  
あせる、いらだつ、汗が出る  
襦に潜んだ玉の汗  
汗で行け行け努力の山へ

緑

自信握つて麓について  
征服次第腕を知る。

### 歩哨

五甲 多田 六郎

時、霜月の星月夜  
月朗々と湧え渡る  
北軍の勢今いづこ。  
萬象冷ゆる三更の  
寂寞身をば襲ふ時  
我今立てり歩哨線。  
遠き滿地にあらねども  
木枯寒く人淋し  
戎衣の袖のこゝえ来る。  
時々破る静寂を  
銃音何れ敵? 味方?  
そは緊張の一瞬時。  
あゝ彼の曠野滿洲の  
平和を守護する武夫の  
猛き姿ぞ偲べる。  
月西山に傾きて  
黎明近き歩哨線  
宵の明星影淡し。

九八

### 突撃

突撃は人生に似たる哉  
力だ! 意氣だ!  
銃剣に宿れる力、意氣。  
燦たる目標。  
眞一文字!  
瞬間が人生の火花散る時ぞ  
希望に燃ゆる青年  
高らかに叫ばん哉  
お、「突撃に進め」。

### 秋の夕暮

五丙 青木 二郎

二階の窓から四方を見る  
空は日本晴で澄みきつてゐる  
太陽は今し沈まんとして  
いまわの際のやうな淡い光で  
真紅な夕焼を作つてゐる。  
お、その光線の美しさ、和やかさ!  
幾々として横たわる秋父連衆、  
その上にはるか高く聳え立つ富士、  
ふと誰かの形容句を思ひ出した  
「白扇逆しまに懸る東海の天」  
併し、今の富士は白扇のやうでない  
紫の着物を纏ふた麗人のやうに

くつきりと明らかな輪郭を見せてゐる  
軟かい光を受けたその姿の崇高さ、清淨さ!  
堤上を野良から歸る子供達が歌ひ乍ら通る  
「夕焼小焼、明日天氣になれ」  
無心に歌ふその聲にも、  
餘りに静かな還境の爲に  
何か神祕な響がこもつてゐるやうで  
何時迄も何時迄も聞入つてゐた。

### 上毛の三山

五丙 青木 三郎

朝に夕に白雪をいたゞき  
紫にてその體をいろどり  
巍然として四方を壓するもの  
その名を赤城上州の雄、  
秀嶺小富士、雲海榛名湖、  
小峯それを挟みて盤居し  
偃蹇として西に連なるもの  
その名を榛名、上州の美、  
衆峯突兀、又屹立  
險崖至る所千變萬化し  
峨々として空にそびえ立つもの  
その名を妙義、上州の奇。  
これはこれ、上毛の三山  
嶄然として關東に三絶す。  
その奇、その美、その雄、

九九

これみな長へに上州の誇。

若木

すく／＼と伸びる若木。

何のわだかまりもなく伸びる若木。

小さいながら力一杯、

生の呼吸を續けて行くもの。

絶えざる努力を續けるもの。

若木よ。

陽炎燃える小川の傍に。

ひばりが飛んで鳥が啼く。

花も咲いたが、

若木には咲かぬ。

そして黙つて伸びて行く。

若木よ。

せみが鳴いてゐる。やかましく。

河原の草はしほれてゐる。

大きな木立もあへいでる。

けれど若木はへこたれぬ。

そして明るく伸びて行く。

若木よ。

白雲が飛ぶ。ちぎつた様に。

風もないのに葉が落ちる。

五丙 曾原康夫

澄んだ空気に、凋落の  
軽いリズムがひびいてゐる。  
けれど若木は伸びて行く。  
若木よ。

枯坊主の木の枝に、

つめたい風が吹いてゐる。

雪も積つた若木の上に。

けれど若木は立つてゐる。

強く大地にふんばつて。

若木よ。

熊谷寺懷古

夕陽いざよふ熊谷寺

法威のあとを弔へば

蓮生坊の墓影さびて

懷古の客を誘ふに

佗しき露の涙雨。

四甲 赤田隆之助

豪俠無双の直實も  
時の力をいかんせん  
餘儀なくはらひし太刀風は  
今尚ほ堂の端し近く  
青葉の笛の音となりて  
淋しく當時を語るらむ。

鐵が出る／＼銅が出る

金が出る出る滿洲よ

シヤベル手にもちトロ押して

色を黒色染め上げて

黄金の群を手に取りて

經濟國難ぶつばらへ、

そも國の爲君のため

あつぱれ帝國臣民ぞ。

流と夕日

四乙 藤井浩

鳴く川雲雀の音絶えて

奥底新なる小さき流に

故郷の日は今や沈まんとする、

沈まんとする日の光は

老い果てたる人の如く。

秋を過ぎたる冬木の如く。

次第次第に山の端に沈み行く。

然かも力盡きたるを厭はず

靜かに快くその薄い光を流に落す。

然して清き流に名残を止めず

靜かに快くその流を去つて行く

恰も逝ける流を追ふが如く。

靜かに快く故郷をも去つて行く。

柏の木

四丙 古郡英治

あつぱれ帝國臣民ぞ。

國の爲なり君のため

駿馬の如くはたらけば

くわと鋤とを手にもちて

匪賊も恐れず寒さも怖ず。

廣漠涯なき眞たい中で

日本魂伊達にはもつた。

早く行け／＼滿洲に

何時も住むのが男かは

一寸浮べる列島に

水路遙かな太平洋の

崩るゝ潮の渦巻きて

若き男子の努力まつ。

家の裏の柏の木は、  
眠った様な沈黙を守つてゐるが、  
自己の個性に向つて、  
めざましい活躍を續けて居るのだ。  
自己を生かす爲に、  
飽くまでも延すことに、  
努力を惜しまぬ柏の木だ。  
風雨霜雪に耐へぬいて來た、  
強健な柏の木だ。  
この柏の木の下に立つ時は、  
俺の心は常に平和だ。  
いつも愉快だ。  
希望に満ち充ちてゐるのだ。  
時には俺の心は、  
大きな天下を一つにまとめて、  
呑んでゐることもある。

一、晝の畑

四丙 坂上辰夫

白く乾いた畑の土  
ポーッとしてりかへず暑さ  
汗と  
土ぼこりで  
泥田をかきまはした様な足  
四つんばひに成つて  
仕事を續けて行くと

大地がドシンと落ちる様な  
苦しい錯覺が襲ふ  
唯最後までがんばれば良い——  
總べての想念は其處に集中する  
○  
○  
とうとう一區切れつく  
立上つて  
不器用にふみ固めた足跡を  
それでもうれしく思ひながら  
ジツト見入る

二、夜明くる前

夜の有する最も鋭い闇——  
それは夜明けの前  
漠々たる闇の彼方——  
永遠の光  
永遠の光閃き  
鋭き闇は動く  
何處をか  
何處にか  
流れ行く霧  
形なく  
光なし  
されど我が心に視る

曇りの十五夜

一甲 荒田隆文

十五夜お月さん  
どうして出ない  
何處の家でもおまるをこさえて  
おいしい果物たくさん上げて  
待つて居るのにとぅ／＼出ない  
十五夜お月さん  
どうして出ない  
なにをすねたかまつくら曇り  
花火も芝居も踊りも駄目だ  
十五夜お月さん  
どうして出ない  
僕の家でもこんなに上げた  
機嫌直して出て来ておくれ  
出て来て御馳走見せておくれ

いなごとお馬

一甲 飯塚 満

とまつた／＼  
いなごとまつた  
お馬のしつぽに  
ちよこんととまつた

二  
お馬しつぽふりや  
いなごがはねる  
しつぽふり／＼  
お馬は家へ  
三  
とんだ／＼／＼  
いなごが飛んだ  
お馬のしつぽから  
黄色い稲へ。

四

稲に風吹きや  
いなごもゆれる  
秋のお日様  
お馬を見てる  
五  
俺は知らんと  
お日様西へ  
ひとりさら／＼  
秋の風。

秋

秋の空が生き／＼として  
爽かな大氣の通ふ窓邊で  
私はみつちり本を読んだ。

一甲 岩瀬松三郎

秋―それは力強い人生の活動期  
自覺してこそ  
秋の幸福を眞實に感ずる。

### 秋の夜

鈴蟲が鳴いた秋の夜  
お星さま青く光った  
水たまりに光がちらつと寫つた。  
鈴蟲が鳴いた秋の夜  
かまどの煙がゆら／＼と上つて  
村をつゝんだ。

私の胸にさゝやく  
あの青い神の光  
柱にもたれた僕の顔を  
そつとなでてつた  
鈴蟲の鳴く美しい  
秋の夜の風がよ。

### 秋の田圃

一、晴れた日さしの田圃中  
糞笠かぶつて立つてゐる  
一本足の桑山子さん  
さぞあきただろ／＼  
二、何故桑山子さん立つてゐるの  
わしの役目は雀追ひ

一 甲 小此木英信

雀の奴が来たならば  
それを追ふのがわしの役。  
三、あつはは／＼  
何と呑氣な役目だろ  
雀追ふのが役目なら  
雀來てるのに何故追はぬ。

### 寫生

櫻堤の櫻の下に  
ゆら／＼とかげらうが立つ  
僕が書いてゐるのは  
涼しい美しい秋の景色だ。  
家とグラウンド、木と電信柱  
赤いエントツ、黒い屋根  
塗つて行く繪筆の下に  
秋の景色がうれしく寫る。

一 乙 茂木秀夫

### 山の詩

山の頂に登つて  
ふもとの町を見たら  
美しく見えたよ  
ごみ／＼した町だが。  
山の頂に登つて  
ふもとの方を見たよ

一 乙 大澤俊吉

大軍を指揮する  
英雄の様な心で。

### 思ひ出

四年前の秋だつた  
僕が大怪我をした時  
先生から贈られた一冊の本  
それは級友達の慰めの文集  
今になつて僕はそれを開くたびに  
言ひ知れぬ感に打たれて  
先生とちり／＼になつた友を思ふ

一 丙 新井彌平

### 誕生日(五月五日に)

雨々降るな何故降るか  
空にひらめく鯉のぼり  
年に一度の誕生日  
おいしい／＼御馳走あるに  
雨々降るな今日だけ降るな。

一 丙 古郡忠一

### 月見草

利根川邊の月見草  
淋しい堤の中腹に  
きれいに咲いた月見草  
月が東に登る頃  
ぼつかと開く月見草  
おゝなつかしの月見草。

### 飛行機

キラ／＼光る銀翼の  
愛國號に身をのせて  
眞夏の空に爆音高く  
荒鷲ひし／＼飛行將校  
思へば我等の血は躍る  
我等は日本健男兒  
日本を守る健男兒。

一 丙 篠崎 覺

### 水 泳

空は青空はてなくすんで  
清い流れに日が光る  
光る川面に身を躍らせりや  
水煙高く空にとぶ  
時は眞夏だ。八月だ。

### 三 笠

一、我等は三笠を見にゆけり  
日露の役の戦功を  
今日の前に現はして  
語りはせねど三笠艦。  
二、三笠を見れば思ふかな  
敵の彈丸をば身一つに  
受けて戦ふ旗艦なる  
三笠に立ちし司令官。

一 丙 福田千尋

三、榮えある三笠の戦功も  
元帥東郷の勳功も  
亡びはすまじとしへに  
人死し體は朽つとも。

秋の夜の沼

一、祭の晩の歸り路  
橋の手摺によりかゝり  
水の面にキラ／＼と  
浪にくだける月の影  
二、人通り少い此の橋  
聞えた物は唯二つ  
風に吹かれてサ／＼と  
音をたててる葦の葉と  
遠くにひびく太鼓の音  
三、風も間もなく吹き止んで  
廣い沼の面には  
かすかにひびく太鼓の音  
何と淋しい沼の面  
何と静かな秋の夜

秋

一、愉快だ／＼  
秋は愉快だ  
僕等は秋が大好きだ

一 丙 安田 富久藏

青空高く澄み渡り  
思ふ存分ジャンプする  
スポーツの秋  
大好きだ。

二、愉快だ／＼

秋は愉快だ  
僕等は秋が大好きだ  
千草にすだく蟲の音に  
合唱の夜は更けてゆく  
蟲の音の秋  
大好きだ。

秋の月

一、まるい／＼月よ  
庭の柿を照らして  
雁が三羽飛んでつた  
カア／＼鳴いて飛んでつた  
二、あかるい／＼月よ  
沼の面を眺めて  
堤の薄がゆれてゐる  
風に吹かれてゆれてゐる。  
三、大きな／＼月よ  
黒い雲がよつて来た  
雲の影になつた  
見えなくなつた秋の月。

一 丁 土田 榮司

鏡ヶ浦

一、鏡ヶ浦 ゆら／＼と波はゆれて  
走るヨットはスイ／＼と  
海を隔て、  
館山が見える。  
二、鏡ヶ浦 む／＼と煙を吐いて  
沖に浮ぶ軍艦数隻  
波の彼方に  
燈臺が見える。  
三、鏡ヶ浦 ぎら／＼と波は光つて  
はるかに浮ぶ帆かけ船  
空の彼方に  
富士が見える。

一 丁 大澤 澄三

秋の詩

三十年來の眞夏の熱さは  
どこかへ行つて秋の目がうらら  
勉強に運動に精出す時だ。  
今日する事は明日に延さず  
此の秋此の日に大いにやらう  
秋は造られたまゝに  
自然に自由にすべてが美しい。

富士山頂にて

一、白雲なびく 富士の峯

一 丁 荒木 厚磨

一 丁 吉田 幸富

蝶

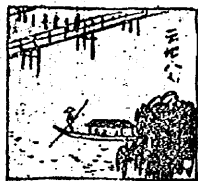
蝶々がとまつた  
だりやの葉  
一匹二匹白い蝶  
蝶の目に  
何がうつるだらう  
くるり／＼と  
見まわして  
ばつと飛んでは又とまる  
赤い花  
青い空だよ

一 丁 坂田 正一

秋

清く氣高く匂はしく  
コスモスの花秋に咲く  
秋の心を知る花が  
薄桃色に秋に咲く  
そよ／＼と吹く西風に  
ゆれるコスモスタペの日射し。

一 丁 野口 通昌



和歌

秋咏草

五甲 島野正一

深み行く秋惜しみつつひねもすを  
友と語りて和み来る心  
赤々と輝く入日見つめつつ  
一人わが身の行手思ひぬ  
木屋の香ほのかに漂ひて  
秋雨の夜の樂しかりける  
秋雨にコスモスの花濡れて居り  
コスモスは淋しき花と思ふも  
白菊の匂ふ竹垣にしのびより  
赤きとんぼをしみじみと見き  
くすぶれる障子はかりかへコスモスを  
一枚切りて心和みき  
人の世の宿世と言ふは不思議なり  
床に入りても考えて見る  
しとしとと軒打つ雨の音を聞きつ  
物思ひするをわれは好めり  
小雨降る窓のガラスに息かけて

若人の晴れの舞臺をとりかこむ

色とりどりの應援旗かな

清水三郎

聞ゆるは落ちし木の葉のささやきか  
そぞろさびしき秋の夕べよ  
今さらにあそびし過去ぞ惜しまるゝ  
まなびを巢立つ時をむかへて

山田忠満

秋空に大小砲轟けば

己が心は浮き立ちにけり

井桁瀬平

秋草の茂みに鳴ける蟲の聲

いたくほそりて夜ぞふけぬる

堀池忠夫

我が頭痛み行く日に悲しくも

親しき祖母の死をばきゝたり

今宵又淋しく光る星を見て

祖母のみ姿思ひ出しぬ

五乙 和久井良一

大いなる黒雲の起りうつゝと

青桐の葉のむしあつきかな

祭典の終りて後にも不圖聞けば

はやし太鼓の音するがごと

森清治

とつくに御國をまゐるますらをの

わがなつかしき友の名を書く  
未來へのあこがれ多きこの頃の  
日日のたつきの心樂しも  
稲束の中にてしばしまどろみぬ  
陣營の夢のはかなかりける  
何となく不安の思つゝのり來て  
銃を持つ手のいとどふるへぬ（歩哨に立ちて）  
糸すすき手折りしあとの淋しさよ  
秋風寒き夕暮の頃。  
しみじみとわが身の上を思ふ時  
暮らして行ける人になりたき  
頼るべき人の無き夜の伶しさよ  
一人しみじみこはろぎを聞く  
爆弾三勇士  
とつ國に又とはあらじ武夫の  
君のみにために其身すつるは  
夕ぐれや犬連れ戻るかりうどの  
獲物見たきに側に急ぎぬ  
風吹けば落葉からく走るなり  
薄陽さす日の放課後の庭  
もう少し肥らんと思ひ或る時は  
玄米等を炊いて見るわれ

植野芳雄

本山正三

新井六三郎

猛き心を君に見るかな

野口秀男

ゆく秋の月影寒く身に浴びて

敵陣さぐる一斥候かな

快よき輕き疲れや籠球の

試合の果てし後のひと時

秋晴の神宮の野にこだます

早慶戦の觀衆の聲

野原英四郎

夜深く歩哨となりて野路行けば

耳もこごえて北風の吹く

久々に山に登ればゆつたりと

炭焼く煙の上りゆく見ゆ

うつるなる心抱きて黄昏の

野路に一人我ぞたゝずむ

金澤桃太郎

つゝましき師の君すらも手を打ちぬ

誘掖會に勝ちし其の時

我しばし口をつぐみて弔へり

去にしうなるに死せし人をば（九月一日）

江原武吉

伸びのびと大洋の隅によゝたはる

秋つ鳥根ぞさかゆくならん

ねば玉の闇より聞ゆる虫の音は

田島一男

ころがす如く澄み透りたり

枕邊に人形かざりて寝る子等の

ほゝゑみ居たり秋雨の夕

元且のはききよめたる我が庭に

のどかにひびく追羽子の音

夜嵐に木々の錦の散り果てて

したたかに雨にうたれて落つる桐の

葉にこそしるし秋のあはれは

海べりに小さき我をともしひし

そのかみしのび父の肩打つ

井戸水の冷え／＼として心地よし

木犀の香の高き朝なり。

此の日頃蟬の鳴く音もさびれゆき

はだへ冷く秋風を知る。

夜毎々々に月の圓みて十五夜の

近づくを知る秋とはなりぬ。

小夜更けてこぼろぎ聞けば亡き父の

思ひ出されて秋は悲しき。

降り止みて雲間を洩るゝ月かげの

小暮十九三

吉村 章

江袋 文男

栗原 二夫

四 甲 長谷川 精一

110

あまりにも清き今宵なるかな。  
白鳩のほろ／＼と鳴く秋の夜は

心の奥の底までも澄む。

幼き日を共に遊びし人々は

若い衆と云ふ年とはなりぬ。

萱の穂に夕陽あかるき雑木林を

栗など拾ふ吾一人有り。

なま土の高き香に親しまん

むさしに生えし民草一人。

和 歌

四 甲 江 守 善 六

有明の光いまだき春の朝

藪の中にて啼ける郭公

陽炎の燃えて閑けき春の日に

我は座したり野邊のそよ風

うすみどり松の梢に生ひ立ちて

早や夏來らし松蟲の聲

秋雨の間遠に桐の葉打つあたり

しのびねのごと虫の鳴くなり

短 歌

四 甲 沼 上 勝 五 郎

柿の實の一つ二つが色づきて

早十月の聲を聞くかな

朝露や冷たき風のくさむらに

虫の聲こそあはれなる

紺青の空のはかなく思ゆる日

幼かりし夢をおもへり

秋の夜のながきも我はよろこべり

好む讀書も出来るものを

サラ／＼と聞くもさびしき秋風の

もろこしの葉をわたれる

夏みどりまだ變らじとおもふ間に

はやいろづきて秋を語る

雨晴れて青葉につゆのすが／＼し

あさ日照り初む木葉かな

人の世の苦しみ樂しみかわりなん

まことの魂にまじるとき

へだてなくすべての人の言の葉は

美しきたのしみと聞えこそ

和 歌

四 乙 田 中 敏 雄

草むらに虫の音しげきこの夕べ

友と歩めば月ぞいでける

二日月落ちて飛び行く雁がねの

後姿に涙出でける

その昔須磨に咲きたる扇花

今武藏野に眠る直實

中空に月をいただき我一人

寂しく歩む今宵なるかな

夕暮や三日月かゝる山の端を

打上げ見れば父ぞ戀しき

ありし日に友と植えたるボブラの木

すんなりと秋空高く育ちけり。

桐一葉音もなく地に落ちて

一入淋し秋の夕暮

何となく悲しくなりて垣見れば

夢の如くに菊の花咲く。

懷 慕

四 丙 大 島 喜 助

ぬかるみに朝の光のさし込みて

幼き朝の思ひ出となる

冬來れば校舎に近きぐみ赤み

さやかに分ぬ夕陽なつかし

白々と霜置く上に晴れ渡る

空なつかしく朝日にほふかも。

夕映の空にそびゆる秩父嶺の

うすぐもの邊りひたになつかし、

夢にあれば胡蝶ともなりて飛び行かむを

現なるが故に病に泣く我

四 丙 小 林 正 男

臥り居て窓より仰ぐ中空に、

缺けたる月の光りしづけき。

晩 秋

親雀落穂くわえて巢に飛びぬ、

起抜け寒き晩秋の庭。

111



俳句

神無月煤ごを飾る 惠比壽講

名を聞いて又見なほすや菊の花  
吹きあれて窪地に溜まる落葉かな

俵をば眺めて思ふ玉の汗  
雪を見て思ひ出しけり山の旅

梅咲いて試験せまりし二月かな  
社會銷寒空によぶ歳暮かな。

春なれや熊谷堤人の波  
秋晴れや蜻蛉一群いや高し

月冴えし野路に立てる 歩哨かな  
短夜は夢にもならず明けにけり

五甲 根岸 忠雄

新井 六三郎

本山 正三

富田 實

多田 六郎

清水 三郎

加藤 重行

一一二

水に臨んで何思ひける蛙かな  
裏表見せみせ落ちる落葉かな  
月のさす明神の森や雁の聲  
柿一つ枝にのこして秋逝きぬ

西瓜割つて晝寝を起し廻りけり

名月もかすんで見ゆる野風呂かな

整地した田に洋服の案山子かな

學ばねば人は浮世の案山子かな

桐一葉秋雨の庭に落ちにけり、  
淋しさの秋雨に散る枯葉かな。  
雀立ちあとに案山子の残りけり。  
蜘蛛の巣に玉を運ねて秋の霧。  
まだ熱れぬ栗を食ひけり野路一人。  
木枯や黒く子供のかたまれり。

虫鳴くや水の月かげふるはせて  
草分けてこぼろぎ鳴くやむら時雨  
森さして雀の聲や秋高し  
幾百か隊を組んでは行く雀

五乙 關根 正

江袋 文男

村山 命八郎

五丙 鈴木 辰雄

齋藤 博

四甲 長谷川 精一

四甲 江守 善六

黄枯の夕べの小野や虫しづか

秋祭牛の親子の留守居かな  
小春日や庭に落ちたる稻穂かな  
流星尾を引いたるや星月夜  
夕映えに一際赤き紅葉かな  
風吹きてすゝきそよめく秋の夕。

秋

秋風に机の向きをかへにけり。  
掃き寄せし塵より這ひ出る秋の蠅。  
葉を抱いて落ちし毛虫や秋深し。  
寒空にねぐら探しつ渡り鳥。  
秋の野に緑色濃し大根畑。  
山の端に吾を招くや枯すゝき。

空ひろみ唐もろこしの荒れし跡  
ラジオにて月を開く夜の無月かな  
しづけさや刈田にうすき日足かな

日盛りに大足出して晝寝かな。  
満蒙の兵働ばるゝ寒さかな。  
言ふまいと思へど今日の暑さかな。  
隣までほめて行きけり夏の月。  
借りて見て頂いてなす扇かな。

四乙 田中 敏雄

四丙 小林 正男

四丙 大島 喜助

三甲 柿澤 富雄

此の汗が皆實となるや田草取。

我が傘の下をとび行くつばめかな。  
凱旋の兵を迎ふや秋の驛。

家中が野らで飯くふ田植かな。  
並んでる菅笠暑き田植かな  
寒暖計上りつきの暑さかな

人魂のズーと尾をひく野風呂かな  
片田舎道一すじの眞夏かな  
田圃道蛇も居眠る眞夏かな

日盛りに小川に遊ぶ子供哉

夏の宵結びし夢の暑さ哉  
早乙女ののどかに歌ふ田植哉  
五月雨や雨後の青葉の香も深し  
一年に今宵ばかりの秋の月

名僧も居眠をする暑さかな  
バナナ賣戸板をたゝく夏の宵  
水泳ぎ海一面の子供かな  
螢光を集めて勤む車胤かな

荒木 孝就

高澤 徳衛

神山 大介

木村 長司

菅間 壽一

渡邊 康次

小澤 允

一一三

六年へて故郷こひしき夏休

アスファルト溶ける眞夏の暑さ哉

秋の宵静かに向ふ机かな

御社の後にさわぐ相撲かな

燈籠の影に落ちたる紅葉かな

グラウンドに若人躍る秋日和

名月やエツフェル塔の眞上に

赤蜻蛉干物竿の蚊帳のわき

竹藪に一つさがつた烏瓜

野良歸り一番星の光り哉

秋空に飛行機とぶや二三臺

何時の間に無くなりたるか俳柿

掛布團一枚ますや霜の朝

草わけて見つける晝の螢狩

蟬鳴きて休暇も近しこの日頃

鶴見好一

淺見利雄

岩崎政巳

根岸重雄

中島民二郎

高橋廣

塚田丁

高橋暉良

渡邊康次

三乙

井上梅作

かみなりに隣とられしか大蛙

鉛筆に汗しみ通る暑さかな

ひるねよりさめてまばゆし夏の雲

釣歸り蜻蛉止まりし竿の先

秋がきてはつきり見える赤城山

龍宮が見えるか清き秋の水

たゞひとり花野に暮るゝ女かな

電線にずらりと並ぶ蜻蛉かな

雁渡る高天肥馬の秋の空

今日も亦草薺り延ばす虫の聲

先生の扇は古し龍虎の圖

蟬袋肩に汗ふく櫻土手

竿西へ行けば東へ赤蜻蛉

野邊を行く娘の髪に咲く小菊

道ばたや草にうづもる地藏堂

夕立の過ぎて涼しき青葉かな

一一四

松崎久

中島正義

宮本利夫

福島傳司

瀧上壽一

坂上三郎

上杉公男

木村弘

川崎愔仁

武藏野や暗に轟く蟬虫  
案山子かと思へば動く帽子かな

網目からぬけた小鮎の早さかな

涼しさを螢いれたる蚊帳の中

町の子に見せてやりたき田植かな

昨道に小馬嘶く暑さかな

枯れし苗捨てゝありけり田圃道

苗食ひし牛叱り居る暑さかな

蚊帳すかし父の晝寝や晝下り

今は亡き父のいとひし雷雨かな

五月雨に矢車草の倒れけり

梅雨はれて傘干してある庭のあり

梅雨はれて濁りし川に泳ぎけり

日焼人目一日と増しにけり

川の上を高く螢の渡りけり

涼しさを蛙の聲のきこえけり

夕立の早速のきて蛙なく

垣根から出蛇ゆるりと藪に入る

柄の長き小き團扇もちひけり

三丙

清水久男

中田貫一

大關房之助

原一郎

去年の海思ひ出されて夏のくる

大考査みんなの顔の暑さかな

バラソルのゆらゆら通る彼岸かな

涼臺母親びとり家の中

俄雨やんでみづの死んで居り

夕立の過ぎし青葉に日の光

緑濃き青葉のかげに赤トマト

緑こき武藏の果や夏の山

せゝらきの音も涼しき夏の山

炎天で夢をほしをる農夫かな

雁來紅の陰に土掘る幼き兒

稲浪の中に一つの笠の鳥

秋茄子や一つ二つと取りつくす

飛行機の爆音高し秋の空

十五夜やそぞろ歩きの親子連れ

夏休み皆をろひたる朝餉かな

渡邊英雄

津久井龍夫

萩野耕作

萩野耕作

清水重治

酒井光司

細田好吉

成澤辰雄

風間博

三丁

風間博

一一五

雷に追ひつ追はれつ田圃道

教場で海思ひだす暑さかな  
室内で煙火見ながら夕餉かな

食客の基にも飽きたる日永かな  
植ゑたての苗に旭の光りかな

夏の川静かにすみて鮎の行く  
答案を出したる後の涼しさよ

ぞろ／＼とどこまで行くや蟻の群  
夏の山皆とり／＼に面白し

球打ちて何處までとぶや秋の空  
渡り鳥中山道の秋の空

香水 清

布施田 徹四郎

片倉 卓藏

小川 利夫

布施督太郎

近藤 彰男

古川柳

元日や昨日の鬼が體にくる  
武者一人叱られて居る土用干  
芭蕉は飛びこみ道風はとび上り  
よつびいてひようと放さぬ案山子かな  
源左工門鎧をきると犬が吠え  
清盛の醫者は裸で脈をとり  
孝行のしたい時分に親はなし

三乙

井上梅作

清水久男

上杉公男

原口治郎

木村 弘

島村桂三

大關房之助

島崎二郎

トマトーは見るものにして膳の上

一圓で見る東京は忙しい

赤子の名呼べば返事は母がする  
讀本を見て居る様に居眠りし

赤い靴鶏追つてうれしがり

居眠りは遊びの鐘に元氣が出

洋装は蟬の鳴いてる間だけ

荷のやうに背だけは長くなり  
魚つりは釣れる方へとよつて行き

八月號怪談ばかり多く書き

川柳



一等をとると疲れたふりもせず

四甲 原口清一

五乙 田島一男

(旅に寝て、夢は枯野を、駈けめぐる。)  
寮に寝て、夢は故郷を、駈けめぐる。||高校生、

(化物の正體見たり、枯尾花)  
馬占山の正體見たり、瘦匪賊||満洲、

(春の海、ひねもす、のたりのたり哉)  
三學期に、ひねもすのらりくらり哉||無志望、

四乙 田中敏雄

野球狂ヲオと喧嘩しさうなり  
大學生演説すむと何か出し  
應援團選手よりなほ無中なり  
あはて者ふと答案に名を忘れ  
運動會第一着は夢の中



# 校報

## 學校記事

十一月十七日 國防ニ關スル映畫並ニ講演會熊盛座ニ於テ  
十一月二十六日 木村督學官並ニ中川視學官來校視察セラル  
十二月九日 本日ヨリ學期末一齊考査開始十四日マデ  
十二月十七日 教練査閱 査閱官安井大佐殿來校  
會計檢査本縣ヨリ來校檢査  
十二月十九日 御親閱記念發火演習 本年ハ特ニ熊農熊商兩氏及ビ  
郡下三十九ヶ町村青年訓練所生徒聯合シ第二聯隊ヨ  
リ機關銃九台參加所澤飛行學校ヨリ三台ノ飛行機モ  
來會大々的ニ行フ  
十二月二十四日 第二學期終業式  
十月五十分ヨリ成績會議  
一月一日 新年拜賀式舉行  
一月八日 第三學期始業式  
一月九日 陸軍始觀兵式歸途ニ起レル不逞鮮人ノ不敬事件ニ就  
キテノ謹語 學校長  
一月十六日 中學校數学科ノ打合ヒ會テ本校會議室ニ行フ

一月二十七日 本日ヨリ四日間四五年生ノ模擬試驗ヲ行フ  
一月三十日 明石校醫來校臨時種痘ヲ行フ  
二月六日 川中ニ於ケル歴史科研究會へ學校長及ビ若林教諭出  
張  
二月十一日 紀元節拜賀式舉行  
二月十二日 井上前藏相ノ不慮ノ逝去ヲ悼ム 學校長訓話  
二月十三日 柏壁中學校ニ於ケル數学科研究會へ出張 學校長  
澤野 高城 仰 ノ諸教諭  
二月十七日 五年生ノ學期末大考査本日ヨリ行フ 二十日マデ  
二月二十日 五年生終業式舉行  
二月二十五日 本日ヨリ四年生ノ學期末大考査  
三月七 第三十三回卒業式舉行 臨場官トシテ知事代理松平  
學務部長來校 黒田縣議其ノ他來賓來校  
三月十日 本日ヨリ三年以下ノ大考査  
三月十六日 文部省視學員倉林源四郎氏來校理科全般ニ亙リ視察  
講評セラル  
三月十九日 昭和六年度終業式 式後職員會議 殘務整理  
三月二十日 午前九時職員全部出勤入學考査準備  
三月三十一日 入學考査 二十六日マデ  
四月一日 新學年準備ノ爲メ全職員出勤  
四月四日 昭和七年度始業式  
四月五日 午後一時ヨリ入學式舉行  
四月十一日 新人一年生二〇三名ト在校生六八二名トノ對面式ヲ  
行フ  
本日ヨリ身體檢査開始

四月二十八日 五年生ハ全部本日及ビ明日ノ二日間兵營見學ノタメ  
近衛二聯隊へ旅行  
四月二十九日 天長節拜賀式舉行  
五月二日 櫻木先生ノ告別式(放課後)  
五月五日 身體檢査本日ヲ以テ全部終了  
五月七日 本日全校生徒ノ一日遠足野原文球榊午前八時廿分ヨ  
リ午後一時十分歸校  
五月十三日 山本政男氏來校同時ニ二十五種ノ樂器使用ノ餘興ア  
リ三二年ハ第五限五四年ハ第六限  
五月十七日 學校長本日ヨリ全國中學校長會議へ出張  
五月十九日 大養前首相ノ葬儀ニ就キ學校長ノ訓話(朝禮)  
五月二十三日 齊藤首相ノ組閣ニ就キ學校長訓話(朝禮)  
五月二十七日 海軍紀念日 マラソン施行  
六月一日 淺見本縣新任視學官來校視察  
六月一日 五學年生ハ本日ヨリ修學旅行  
六月九日 本日校友會ノ講演會講師高橋博士及ビ佐藤中將  
六月十一日 本日ハ四年以下ノ修學旅行  
四年妙義山方面  
三年村山、所澤方面  
二年 秩父方面  
六月十五日 放課後校内庭球大會ヲ行フ  
六月二十三日 午後一時ヨリ栗原少尉殿ノ實戰談(講堂ニテ全校生)  
六月二十四日 發火演習三尻幡羅村國濟寺方面  
七月六日 本日ヨリ短縮授業  
七月七日 本日ヨリ學期末大考査開始

七月十九日 第三限ヨリ二年以上ハ講堂ニ於テ先輩新井善志君海  
軍機關候補生ノ遠洋航海ノ講演  
七月二十日 武道大會 終業式  
九月一日 始業式  
九月二日 午後二時十分本縣學務部長及ビ學務課長 視學官オ  
來校視察セラル  
九月十二日 本日ヨリ普通授業  
九月十四日 五年生十名四年生四名計十四名東京府立第一中學校  
見學ノタメ出京  
九月十五日 第一時限各學年共一齊考査  
九月十九日 滿洲事變記念講演ヲ講堂ニ於テ行フ(柳田先生)  
九月二十二日 野外演習(大庭生三尻方面)  
九月二十四日 松村先生不動岡中學校長ニ御榮轉本日朝禮後告別式  
ヲ行フ  
九月二十七日 小林教諭召集ニヨリ第三聯隊ニ勤務(二週間)  
九月三十日 福島本縣知事來校視察セラル  
十月二日 高城神社ノ祭典ニ就キ本校代表トシテ五年全部參拜  
十月六日 第三十七回開校記念日講演會、講師理學博士松澤武  
雄先生  
十月十一日 オリエンピックヘッドコーチヤリ 蓮見 宏氏  
十月十五日 學校長校長會議(浦和)へ出張  
十月十八日 本日五、四、一年ノ父兄會召集 父兄一八一名來校  
十月十九日 第六限體育大會ノ理事委員ノ會議(講堂)  
十月二十日 里見教諭教務主任會議へ出張  
第五限體育大會出場選手ノ選舉ヲ行フ

十月二十三日 招魂社祭典ニ就キ五年生全部代表トシテ参拜  
十月二十四日 武道大會 嘉納治五郎先生來校ニ時間ニ亘ツテ講演  
セラル  
十月二十五日 岡田校長ハ思想講習會里見教諭ハ縣下産業組合聯合  
大會ヘ出張  
十月二十六日 競技部クラブ戦ナ行フ  
十月二十七日 野球部クラブ戦ナ行フ  
十月二十八日 庭球部クラブ戦ナ行フ  
十月三十日 勸語奉讀式舉行  
十一月三日 明治節祝賀式舉行  
十一月九日 第四回體育大會舉行  
里見教諭及ヒ英語科ノ諸先生ハ松山中學校ニ於ケル  
英語科研究會ヘ出張  
十一月十二日 五、四年ハ本、明兩日近衛師團ノ秋季機動演習ニ參  
加

昭和七年度上級學校入學者

| 入學學校名    | 卒業年度 | 氏名      |
|----------|------|---------|
| 陸軍士官學校   | 五年度  | 飯塚 武司   |
| 東京高等師範學校 | 同上   | 江森 俊    |
| 同上       | 六年度  | 鈴木 正三   |
| 同上       | 同上   | 長谷川 常次郎 |
| 浦和高等學校   | 同上   | 今村 雄    |
| 同上       | 同上   | 小澤 光    |

| 入學學校名     | 卒業年度 | 氏名     |
|-----------|------|--------|
| 明治大學      | 六年度  | 岩田 洋一  |
| 青山學院      | 六年度  | 岡野 正、滋 |
| 物理學校      | 六年度  | 細川 典雄  |
| 高千穂高商     | 六年度  | 瀧上 光重  |
| 岩手醫學專門學校  | 六年度  | 藤岡 修   |
| 日本大學      | 六年度  | 松岡 博   |
| 法政大學豫科    | 六年度  | 新井 之介  |
| 同上        | 六年度  | 湯木 聰一郎 |
| 智山大學      | 六年度  | 加藤 正雄  |
| 明治大學      | 六年度  | 栗原 正信  |
| 國學院大學豫科   | 六年度  | 池田 壽男  |
| 早稻田高等學院   | 六年度  | 牧野 起行  |
| 智山大學      | 六年度  | 同 人    |
| 明治大學      | 六年度  | 東 了    |
| 演習專門學校    | 六年度  | 佐伯 正彦  |
| 濱松高等工業學校  | 六年度  | 富田 幸太郎 |
| 東京高等工業學校  | 六年度  | 湯本 銀之助 |
| 和歌山高等商業學校 | 六年度  | 吉田 千秋  |
| 同上        | 六年度  | 長島 良一  |
| 東京商大專門部   | 六年度  | 伊藤 島   |
| 東京教員養成所   | 六年度  | 伊藤 島   |
| 東京農科大學實科  | 六年度  | 伊藤 島   |
| 同上        | 六年度  | 伊藤 島   |
| 宇都宮高等農林   | 六年度  | 伊藤 島   |
| 千葉高等園藝學校  | 六年度  | 伊藤 島   |

| 入學學校名        | 卒業年度 | 氏名     |
|--------------|------|--------|
| 北海道大學專門部(水産) | 五年度  | 富田 弘   |
| 同上           | 五年度  | 青木 五郎  |
| 水産講習所        | 六年度  | 菅谷 敬三  |
| 美術學校         | 六年度  | 池田 壽男  |
| 埼玉師範二部       | 六年度  | 森田 芳一  |
| 同上           | 六年度  | 須崎 準吉  |
| 同上           | 六年度  | 金井 孝之  |
| 同上           | 六年度  | 内島 春重  |
| 同上           | 六年度  | 清水 正三  |
| 同上           | 六年度  | 青木 一夫  |
| 同上           | 六年度  | 岩田 太郎  |
| 同上           | 六年度  | 岩田 光郎  |
| 同上           | 六年度  | 菅谷 敬三  |
| 同上           | 六年度  | 金井 孝之  |
| 同上           | 六年度  | 石崎 文次  |
| 同上           | 六年度  | 須崎 準吉  |
| 同上           | 六年度  | 石川 博美  |
| 同上           | 六年度  | 長田 幸作  |
| 同上           | 六年度  | 内田 幸作  |
| 同上           | 六年度  | 中里 萬太郎 |
| 同上           | 六年度  | 権田 開   |
| 同上           | 六年度  | 高橋 勘十郎 |
| 同上           | 六年度  | 星野 武次  |
| 同上           | 六年度  | 馬場 武次  |
| 同上           | 六年度  | 小林 喜一  |

| 入學學校名    | 卒業年度 | 氏名     |
|----------|------|--------|
| 明治大學     | 六年度  | 荻原 米司  |
| 青山學院     | 六年度  | 新井 敏夫  |
| 物理學校     | 六年度  | 瀧澤 敏夫  |
| 高千穂高商    | 六年度  | 本間 正二  |
| 岩手醫學專門學校 | 六年度  | 島田 山三  |
| 日本大學     | 六年度  | 佐川 道夫  |
| 法政大學豫科   | 六年度  | 橋本 好文  |
| 同上       | 六年度  | 富田 福太郎 |
| 智山大學     | 六年度  | 松本 喜武  |
| 明治大學     | 六年度  | 中村 喜三郎 |
| 國學院大學豫科  | 六年度  | 飯塚 六三郎 |
| 早稻田高等學院  | 六年度  | 丹羽 宏   |
| 智山大學     | 六年度  | 飯塚 義郎  |
| 明治大學     | 六年度  | 小寺 慈泰  |
| 滋慶院大學    | 六年度  | 水野 正太郎 |
| 明治大學豫科   | 六年度  | 安部 志一郎 |
| 農業大學     | 六年度  | 長谷川 健一 |
| 日本大學工科   | 六年度  | 濱島 健一  |
| 中央大學經濟學科 | 六年度  | 稻村 義孝  |
| 東京高等工業學校 | 六年度  | 大谷 延太郎 |
| 同上       | 六年度  | 神山 久二郎 |

(以上)



報部

圖書部部報

長島芳雄

小學一年生の修身書の劈頭に「よく學び、よく遊べ。」の文字が記載してあります。私は此に「よく讀め。」と云ふ言葉を加へて、諸君に實行をお勧めしたいと思ひます。申す迄もなく、よく讀書は私達に最大の慰安を與てくれます。知識を與へてくれます。人格を陶冶してくれます。好學に燃えてゐる私達は、多くの書物を要求します。然し未だ獨立してゐない私達は、欲するだけの書物は得られません。又得られるとしても一寸参考にして見たい位の本も、一回だけ讀んで見たい雑誌もありま

す。茲に圖書部の意義があります。又書物の身となつても、一二回讀まれて、その儘本箱の隅に置かれるよりも、圖書館等にあつて多くの人に讀まれる方が、どんなによいか分りません。又茲に圖書部の意義があります。實際多く讀まれた本を見ると、どんなに多くの人に知識、慰安等を與へてくれたかと思はすにはあられません。廢本になつた本を見ると、書物としての意義を全うしたものとして感謝せすにはあられません。最近本の汚れは少ないですが、本の意義から、公供物の立場から、我等の本といふ立場から一層大切にされる事を希望します。

さて我達は昨年の大改革に補助として與つたのですが、今年はその後を受けて、大した業績を挙げ得なかつた事を恥しいと思つてゐます。然し出来るだけの努力はした積です。次に今年度の概略を述べて見たいと思ひます。新聞は矢張り好評を博しました。雑誌は實業之日本・雄辯・受験と學生・科學を廢止しましたが、前二者は讀者の少ない理由から、次のは三十分の休みでは利用されにくい理由から、最後のは程度が高過ぎる理由からです。そして世界知識を増やしました。これで雑誌は粒より又諸君の多く讀むものばかりになつた積です。書籍も諸先生の御援助の下に精選されたものだけ揃へましたが、科學書、時局物が割合に多かつたと思ひます。

書物の整理の行き届いた事は私達の快しとした點でありました。讀者は上級生が下級生に比べて遙に多いでした。よく讀まれたのは地理部歴史部雑誌部及科學部で文學部も相當讀まれました。

今年は投書箱を設けましたが、此は全然失敗に終りました。第一の目的は諸君の欲する本を聞いて参考にしたかと思つたのですが、諸君は「我等の圖書部」として大に希望圖書を書いて投書される事を希望します。尤も投書したから必ず買ふとは限りません。第二の目的は圖書部が主となつて、研究的なものを作りたいと思つたのです。知識の源泉圖書部として、唯讀者の普及を計るばかりでなく、研究の氣分を作りたいと思ひます。昨年計畫された同趣味の者の集りを、再興したいと思ふのですが、熱心な諸君の援助を大に求めたいと思ひます。

終に諸君が「我等の圖書部を大に利用し、又援助される事を望み、又諸先生に御指導下さつた大和久先生、甘樂先生、佐藤先生を始め、事務を取つた四年生諸君に感謝致します。

劍道部報

一 理事

四月十二日、本年度劍道部理事及助手の人事を選ばす。

理事 柿沼忠次郎 神沼清三郎  
里見 健

助手

五甲 吉田規春 五丙 笠原滿

同 新井源三

同 矢島邦雄

同 清水三郎

同 高橋正治

五乙 柿沼忠次郎

同 神庭朝二

同 神沼清三郎

同 木村義雄

同 江袋文男

同 田中敏雄

同 田島一男

同 小暮操

同 江原武吉

同 里見健

同 新井六郎

同 峯尾隆司

同 柿沼忠次郎

同 矢島邦男

初段 神沼清三郎

吉田規春

笠原滿

新井六郎

江原武吉

新井源三

江袋文男

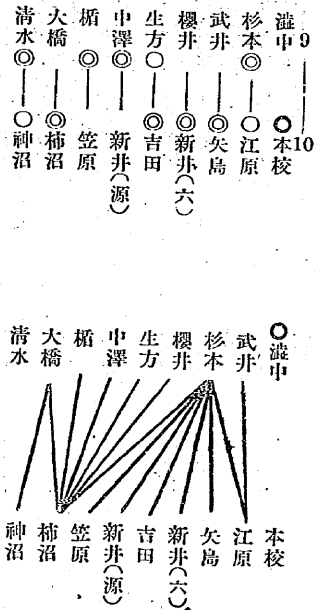
新井源三

昨年度初段に合格せし田島一男を合せて、有段者十名を數ふるに至る。之近頃になき好成绩なれば、向ふ一年間、之等有段者の活動も亦、記録的大奮闘を希ふものである。

五月十五日、澁川中學校生徒と、本校選手、農學校道場に於て試合す。

成績次の如し。

紅白試合



一、東京埼玉學生誘掖會主催の縣下中學校第十回武道大會に出場す。選手は江原武吉、笠原滿、神沼清三郎、吉田規春、柿沼忠次郎の五名、六月五日、今井先生に引率され堂々と、乗り込む。本日の成績頗る良好にして最後決戦に於て、遂に本校は優勝の榮冠を得たり。之全く選手諸氏の奮闘による事ながら、又一面、平素部員の擔當努力の賜と云はざるを得ない。本日の試合組合せ及成績次の如し。

- 第一回戦  
● 澁中 對 川中  
● 浦中 對 不中  
● 粕中 對 松中  
本中不戦一勝

第二回戦

◎熊中 對 松中  
◎浦中 對 本中  
第三回戦(決戦)

本試合に於ける本校對抗の成績次の如し。

熊中7 川中5  
江原◎ 小峯  
笠原◎ 神井  
神沼◎ 湯澤  
吉田◎ 間中  
柿沼◎ 浦中4  
熊中6 江原◎ 高田  
笠原◎ 福武  
神沼◎ 押兼  
吉田◎ 金子  
柿沼◎ 兒島

七月二十日第一期最終日武道大會を舉行す。  
此の日は、各學年のクラス戦の決戦をなす。  
其の成績次の如し。

一乙 ○二丙  
武井◎ 平野  
中村◎ 内田

設樂◎ 篠崎  
有馬◎ 瀬川  
茂木◎ 岡

〇二甲 二丁

新井◎ 淺井  
杉田◎ 田中  
清水◎ 江森  
倉澤◎ 齊藤  
室田◎ 拓植

〇四甲 四丁

瀧澤◎ 里見  
高橋◎ 峯尾  
岡田◎ 江森  
神庭◎ 木村  
仙場◎ 小島

〇五丙 五甲

新井◎ 清水  
矢島◎ 池田  
笠原◎ 吉田  
高澤◎ 新井  
磯邊◎ 村上

即ち此の日の試合に優勝せしクラスは、一丙、二甲、三甲、四甲、五丙にて、各クラス優勝組に賞品の授與をなして本日の會を終る。

八月二十日より向ふ一週間本校道場に於て、暑中稽古を行ふ。折から暑氣酷しく、申し分なき土用稽古も出来しが、終りの二日位は、めづきり涼しく、さすがに、初秋もしのげられたり。

本年の稽古を通して見る時、五年の選手は、武徳會の暑中稽古に参りし關係から、出席者少き事、當然なれど、四年及三年の部員が少なかりしは淋しき感あり、二年及一年の部員に殆ど全部出席し然も始より了り迄全出席者多かりしは將來の本校剣道發展の爲意を強ふするものあり。

九月十七日、前橋中學校より剣道選手來校試合す。  
三本勝負 紅白勝負

前中 本校  
佐藤◎ 柿沼  
吉永◎ 笠原  
岩佐◎ 江原  
中島◎ 吉田  
本間◎ 神沼  
關◎ 矢島  
中山◎ 新井(六)  
木村◎ 江袋  
田代◎ 新井(源)  
高田◎ 里見  
木村◎ 小暮  
小飯塚◎ 木村

十月二十三日、東京神田修道學院主催少年剣道優勝大會へ、本校よりも参加す。當日今井先生引率のもとに、二年生野口、持田、杉田、補欠清水の四人上京、會するもの六十余校、東京を中心に中等學校及小學校

の選手、本校は集鳴商業と組み、第一回戦に惜敗せしも、將來の本校を代表するものゝ爲に此の日は頗る意義深きものあり。

十月二十四日、本年度武道大會を催す。

大會の順序。

一、開會、全校生徒紅白勝負。

二、生徒ノ三本勝負組合。

三、外來者對本校生徒試合。

四、帝國劍道形。

五、先輩ノ試合。

六、高野先生講評。

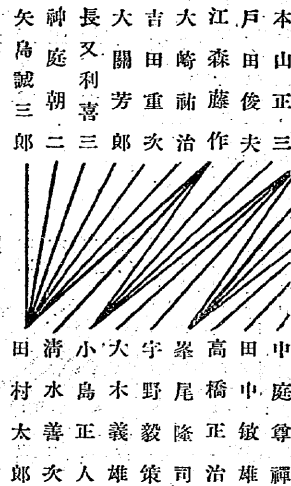
七、會長ノ挨拶。

八、賞品授與。

九、閉會。

全校生徒紅白勝負

紅軍 大將 柿沼忠次◎ 自軍 大將 神沼清三郎  
副將 吉田規春 副將 江原武吉  
矢島邦男 江袋文雄  
田島一男 高澤晋之助  
新井六郎 新井源三  
村上鎬助 磯邊重行  
大島彌太郎 磯邊重行  
里見健太郎 磯邊重行  
福島正康 磯邊重行  
小久保正美 磯邊重行  
小暮操 磯邊重行



以下三十八名略

- 本校生徒対外來者三本勝負(本は本校生徒)
- 本◎(田中敏雄) 本◎(小暮操) 本◎(里見健)
  - 本◎(神庭朝二) 本◎(新井源三) 本◎(矢島邦男)
  - 本◎(千野) 本◎(石井一男) 本◎(酒巻)
  - 本◎(新井六郎) 本◎(江原武吉) 本◎(江袋文雄)
  - 本◎(岩田榮藏) 本◎(小室徳二) 本◎(吉野)
  - 本◎(新井一男) 本◎(笠原満) 本◎(吉田規春)
  - 本◎(神沼清三郎) 本◎(倉林) 本◎(石川保雄)
  - 先輩ノ試合
  - ×(野本秀雄) ×(山田實平) ×(笠原寛)
  - ×(加藤勝芳) ×(馬場重二)
- 賞品授與  
一、紅軍全部

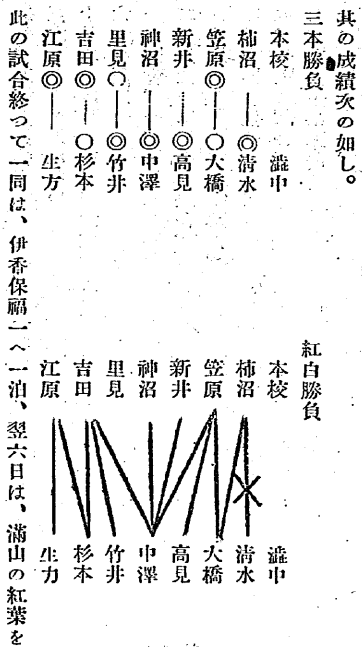
二、白軍ノ一本以上勝者  
三、高點者  
一等 里見 健  
二等 田中 康 夫  
三等 田村 太郎  
四等 平野 利 磨  
五等 小久保 正 英  
六等 川邊 岩 太郎

高野泰正先生ノ御講滿は、日本ノ剣道ト外國に於けるフェンシングの比較を述べられたもので、引いては本校生徒剣道修業上の心得等を評説され頗る有益なるものなりし、こゝに先生に對し深甚の謝意を表す。

十一月五日、濫川中學へ試合の爲選手七名を引率、眞下先生、今井先生出張す。

濫川中學との今回の試合、亦、前回と大差なし。

其の成績次の如し。



此の試合終つて一同は、伊香保福二へ一泊、翌六日は、満山の紅葉を

愛でながら、榛名神社に参拜武運長久の守護札を受けて歸る。

十一月十三日、愈々待ちに待つたる縣體育聯盟の武道大會の日となりぬ。選手の意氣も、必勝を期して、熊谷を立つたるは午前七時。

武徳殿には既に先着のもの多く、しばらく待つ程に振鈴と共に、優勝旗返納式ははじまりぬ。會長の挨拶後ABC三組にて、豫選を行ふ。其の結果、

- A組 川中、埼玉商業、浦中、松中、不中、杉農一勝者、浦中。
  - B組 本中、熊中、所澤實業、秩農一勝者、熊中。
  - C組 川商、熊農、縣立工業、柏中、埴師一勝者、熊農。
- 即ち本校、浦中、熊農の三校にて、リーク戦の決戦を行ふ。

- 本校<sup>4</sup> 浦中<sup>3</sup>
- 柿沼◎ 金子◎
- 矢島◎ 押兼◎
- 新井◎ 兒島◎
- 神沼◎ 須藤◎
- 笠原◎ 小室◎
- 吉田◎ 永田◎
- 江原◎ 永田◎

- 本校<sup>3</sup> 熊農<sup>4</sup>
- 柿沼◎ 石井◎
- 矢島◎ 小室◎
- 新井◎ 酒巻◎
- 神沼◎ 吉野◎

右によりリーク戦の結果は勝敗三校共同じなれば、規約により各個人の勝本数によつて、優勝を定む。即ち、本校十九點、浦中十六點、熊農十五點にて、本校に、豫定の優勝をなし得たり。午後六時も既に暮れて、木枯の風身にしみる頃壯嚴なる優勝旗授與の式は舉げらる。戦のあとを顧みて、選手の奮闘と神明の加護とに對し厚く感謝の意を表するものである。

吾れ等は既に勝てり、春、東京に於ける縣下中學校選手の試合に於ても勝てり。今亦、縣下中學校優勝試合に於ても勝てり、重ねて勝てる之實力の然らしむる處、其の實力を得る爲には、平素の努力あり、我れ等の努力全く報いられたりと云はんか。本試合にのぞめる本校選手は、二段柿沼忠次郎、同神沼清三郎、初段笠原満、同吉田規春、同江原武吉、同矢島邦男、同新井源三の七名にて我れ等は八百余の校友諸氏と共に右七君の努力に對しこゝに深甚の敬意を表す。

柔道部記事

理事 鈴木正夫  
森 清 治

昭和七年度理事及び助手左の如し。

理事  
五年 鈴木正夫 森 清 治  
四年 宮倉勇義  
助手  
五年 鈴木正夫 森 清 治 清水介良

|                  |       |       |
|------------------|-------|-------|
| 武井 弘             | 原 常雄  | 松永義司  |
| 福島好文             | 角田孝典  | 腰塚武彦  |
| 新堀政一             | 黒瀬靖一  | 山田玄光  |
| 神沼新十郎            | 長谷川英雄 | 伊佐山正次 |
| 四年 宮倉勇義          | 青木敏雄  | 戸塚大三  |
| 内田正男             | 神田晴雄  | 石原利武  |
| 阿弓信雄             | 新井利雄  | 柿澤富雄  |
| 三年 青木孝雄          | 石關保   |       |
| 二級以上本校柔道部氏名左の如し。 |       |       |
| 初段 鈴木正夫          | 森 清治  | 伊佐山正次 |
| 宮倉勇義             |       |       |
| 福島好文             |       |       |
| 一級 武井 弘          | 清永介良  | 松永義司  |
| 角田孝典             | 新堀政一  | 山田玄光  |
| 腰塚武彦             | 原 常雄  | 石井晉量  |
| 神沼新十郎            | 長谷川英雄 | 長野正喜  |
| 二級 若山 力          | 青木庫之  | 和久井良一 |
| 小根山秀敏            | 鯨井正夫  | 岡田慶一  |
| 野口秀男             | 持田高良  | 小新井徹雄 |
| 小暮十九三            | 村岡彌一  | 金澤桃太郎 |
| 黒瀬靖一             | 澤田光三郎 | 佃 久雄  |
| 阿部俊夫             | 多田六郎  | 青木敏雄  |
| 清永保則             | 戸塚大三  | 神田晴雄  |
| 内田正男             | 高田辰夫  |       |

五月二十九日埼玉學生誘掖會主催縣下中等學校柔道大會へ左記六名の選手を派遣す。

鈴木 森 武井 原 腰塚 宮倉。

第一回戦に於て、關東の覇者粕中と會せり。選手奮戦苦闘せしが、結局六對一にて敗る。

十月一日東京高師道場に於て第二回全國中等學校柔道大會が開催さる。

當日の戦績左の如し。

第一回戦 不戦一勝。

第二回戦

熊中工 〇 神奈川工

先鋒 宮倉 〇 戸田

森 〇 三橋

鈴木 〇 村田

清水 〇 鈴木

大將 武井 〇 北條

秋雨煙る十月十六日、浦和高等學校主催全關東中等學校柔道大會が浦高道場に於て催された。

我が熊中柔道部にては、主將鈴木以下六人の選手出場。抽籤の結果仇敵粕中と組んだ。思ひ起せば新緑薫る五月二十九日の誘掖會に於ける試合。今度こそ春の雪辱を行はんと、意氣衝天の勢で粕中へと當つて行つた。併し神我に幸せず。先鋒武井の力闘、惑星原の善戦、機敏に矮軀を補ふ清水の奮戦、宿將宮倉の餘裕ある試合にも係らず、再度六對一といふ春と同じスコアで敗戦の憂目を見た。萬事休す。

校内武道大會之記

七月十九日春季武道大會を開催す。

學年別對級試合優勝組メンバー次の如し。

五年乙組 四年乙組 三年丙組

角田孝典 塚越正明 石關保

清水介良 内田正男 渡邊英雄

森 清治 伊佐山正次 酒井光司

武井 弘 阿弓信雄 青木孝雄

鈴木正夫 宮倉勇義 成澤辰雄

二年甲組 一年丁組

田村義憲 島崎春次

村 恒房 浦島平吉

福田守雄 萩原喜作

田高徳一 佐々木七郎

笠原延雄 正田壽秋

一望千里、空うららかなる十月二十三日、秋季武道大會の日である。是の日、我が國武道界に於ける總帥嘉納師範の御來校を得て、我等武道部員は年來の望みかなひ、感激措く能はず、我等一介の學生として、師範の高邁なる御卓識と遠大なる御人格に直接に接する事の如何に絶好の機會なる事か。

一時間餘の長時間に亘つての師範の「修養に就て」の講演、簡にして明、素にして洩さず、よく我々の心の機微を穿つた名説であつた。「精力善用」、「自他共榮」、「盡己誠成」等の言が最も我等の胸裏に響いたものであり、本校武道部の爲益する處大なるものがあつた。

最後に嘉納師範は斯くの如き事を言はれた。

『善應用心身之力者。謂之柔道。』と。

斯くして盛大なりし大會も夕闇迫る頃無事終了した。

午前中校内生徒高點試合を行つた。結果次の如し。

一等七點 宮倉 勇 二 五點 木村 弘

三等四點 秋山 俊夫 四 三點 三友 漢

十一月十二日體育聯盟主催の下に、浦和武徳殿に於て縣下中等學校柔道爭覇戦が開催された。

出場選手七名。補缺三名。

鈴木正夫 森 清治 角田孝典

原 常雄 清水介良 宮倉勇義

伊佐山正次 角田孝典

補缺 武井 弘 青木敏雄 福島好文

参加校十二校をA、B、の二組に分ち、其の各組の優秀校を以て決勝する方法にて行ふ。

試合の結果本校第四位となる。

野球部試合成績表

| 月日     | 相手        | 場所 | 勝負       |
|--------|-----------|----|----------|
| 十月三十一日 | 埼玉商業(舊チー) | 深谷 | 6A 1-4 勝 |
| 一月三十一日 | 桐生中學      | 桐生 | 4A 1-1 負 |
| 三月二十日  | 藤岡中學      | 熊谷 | 13 7 勝   |
| 三月二十七日 | 川越中學      | 同  | 14A 13 負 |

▲一二年クラス戦成績 (二甲優勝)

| 優勝メンバー    |           | 審判 (球) 小久保 (壘) 高橋、金澤、鶴飼 |                   | 得点    | (G) 9月28日 | (E) 9月27日 | (O) 9月26日 | (A) 9月26日 |
|-----------|-----------|-------------------------|-------------------|-------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 二 甲       | 一 甲       | 二 一                     | 二 一               | 二 一   | 二 一       | 二 一       | 二 一       | 二 一       |
| 西栗田福青高村白小 | 岡原村田木橋山根貝 | 2 6 7 1 3 8 9 5 4       | 2 6 1 3 4 8 7 9 5 | 甲 甲   | 甲 甲       | 乙 甲       | 丙 甲       | 丁 甲       |
| 失四三安      | 安三四失      | 策死振打 0 15 6 7           | 打振死策 3 10 9 0     | 14A-3 | 8-12      | 0-5       | 4-13      | (F五回コールド) |

▲同郷会俱樂部戦成績 (同好會優勝)

| 優勝メンバー     |          | 審判 (球) 小久保 (壘) 石井、天田 |                   | 得点    | (G) 10月15日 | (E) 10月14日 | (O) 10月13日 | (A) 10月12日 |
|------------|----------|----------------------|-------------------|-------|------------|------------|------------|------------|
| 會友學        | 同好會      | 同好會                  | 同好會               | 同好會   | 同好會        | 同好會        | 同好會        | 同好會        |
| 栗原山澤谷崎田藤原島 | 田長福赤松野小大 | 4 6 3 1 6 8 7 1 9 2  | 4 3 1 2 6 5 7 9 8 | 忍學友會  | 修學會        | 修學會        | 修學會        | 武峰會        |
| 失四三安       | 安三四失     | 策死振打 5 4 7 3         | 打振死策 8 7 19 2     | 12A-0 | 8-7        | 10-8       | 18-15      | (F五回コールド)  |

●個人成績表 (對校試合ノミ)

▲對浦中戦 (六月十八日) 場所 熊谷

| 浦中                       | 熊中                                    | 審判 (球) 尾數 (壘) 田中 | 熊中  | 審判 (球) 尾數 (壘) 田中 |
|--------------------------|---------------------------------------|------------------|-----|------------------|
| 0 0 0 1 0 0 1 0 0 0 2-2A | 0 0 0 1 0 2 0 0 0 A                   | 熊中               | 熊中  | 熊中               |
| 19 7 83                  | 5 7A 7 5A 5A 6 3A 61A 18A 14 15 18 21 | 不動岡              | 大宮  | 大宮               |
| 2 同                      | 0 負                                   | 1 同              | 3 勝 | 3 勝              |

▲對本中戦 (七月二十七日) 大宮球場ニテ

| 本中      | 熊中     | 審判 (球) 尾數 (壘) 田中       | 熊中                     | 審判 (球) 尾數 (壘) 田中       |
|---------|--------|------------------------|------------------------|------------------------|
| 三宅 5    | 6 高橋   | 熊中                     | 熊中                     | 熊中                     |
| 田島 4    | 3 小久保  | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 横尾 2    | 4 清水   | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 福島 9.1  | 8 松村   | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 大木(兄) 8 | 7 澤田   | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 長塚 1.3  | 2 金澤   | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 大木(弟) 6 | 1 森飼   | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 田島 3    | 9 高木   | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 關口 (3)  | 5 高木   | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 特田 7    |        | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 | 1 1 1 1 1 0 0 2 A 7A-3 |
| 失四三盜安打  | 打安盜三四失 | 策死振打 1 6 1 0 5 29      | 數打壘振球策 3 17 6 3 8 0    | 數打壘振球策 1 8 7 2 4 29    |

個人成績表

| 学年 | 選手名   | 打数 | 得点 | 安打 | 打点 | 盗塁 | 三振 | 四死球 | 二塁打 | 打率    | 刺殺  | 捕殺 | 失策 | 守備率   |
|----|-------|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-------|-----|----|----|-------|
| 5  | 高木正三  | 17 | 60 | 14 | 22 | 4  | 15 | 10  | 15  | 0.367 | 26  | 43 | 12 | 0.852 |
| 5  | 小久保正美 | 17 | 68 | 21 | 21 | 3  | 17 | 3   | 9   | 0.309 | 164 | 11 | 3  | 0.989 |
| 5  | 澤田光三郎 | 16 | 66 | 12 | 19 | 1  | 9  | 9   | 8   | 0.288 | 33  | 2  | 4  | 0.897 |
| 4  | 高橋達吉  | 16 | 73 | 15 | 20 | 2  | 8  | 8   | 2   | 0.274 | 31  | 66 | 13 | 0.882 |
| 4  | 松村弘   | 17 | 64 | 13 | 16 | 3  | 9  | 2   | 8   | 0.250 | 35  | 8  | 2  | 0.956 |
| 4  | 金澤辰磨  | 17 | 69 | 11 | 17 | 1  | 12 | 8   | 7   | 0.239 | 98  | 21 | 12 | 0.908 |
| 3  | 森正己   | 16 | 56 | 10 | 10 | 0  | 5  | 7   | 5   | 0.214 | 12  | 26 | 4  | 0.908 |
| 5  | 清水保則  | 17 | 64 | 13 | 11 | 1  | 28 | 6   | 18  | 0.172 | 35  | 32 | 14 | 0.827 |
| 5  | 石井普量  | 13 | 37 | 8  | 5  | 0  | 6  | 15  | 11  | 0.135 | 2   | 18 | 1  | 0.952 |
| 4  | 鶴飼正郎  | 10 | 23 | 3  | 3  | 0  | 2  | 6   | 4   | 0.130 | 6   | 1  | 2  | 0.778 |

トータル 4 17 580 120 146 15 101 79 87 39 218 0.252 442 228 67 0.904

三塁打 高橋 1 高木 2 松村 3 澤田 2 金澤 4 石井 2 森 1  
本塁打 高橋 1

回顧

小久保正美

講堂の南側より北側に行くまで五年かゝつた。年月の過ぎるのは水の流るゝとか言つてゐるが、あんな狭い講堂を横切るのに五年かゝつたと聞く時に、誰も年月は水の流るゝ、如くとは思はない。然るに一度校庭に足を踏み出して、ふり返つて見る時に、僕は實に短かく感ずる。あの熊中の紋章の帽子をかぶつて、入學の喜びに満ちた愉快な一年生の時、いっしょか過ぎて、今はさらばを告げなければならぬ時となつた。自分は今パンを持つて回顧する時にたゞ、萬感胸にせまりて何を書く事も出来ない。

今此の光輝ある熊中野球部の一員として、スパイクの跡をたどる時其處には何か得る所があらう、僕が此の光輝ある野球部に入部したのは一年生の時であつた。一年生の時は眞の野球と云ふものを知らず、たゞ單に自分の好奇心から入部したわけである。併し一度入部して見ると、實につらい紙の様なグローブで、上手な人とびう／＼キャッチボールをする、何しろ一年坊主で體は小さい、手ははれる、つかれる、とう／＼僕は堪へきれず一學期たゞずして退部してしまつた。それからと云ふものは何もせず／＼一年間は過ぎ二年の二學期となつた。丁度九月に縣下野球大會が浦高球場に於て行なはれて我が熊中はあの名もなかつた塙師に敗れてしまつた。此の事を聞いた時僕の心は踊つた。そうだ、熊中野球部の爲に又熊中母校の爲にと再び入部した。其れからといふものは一度も練習をさぼらず毎日毎日練習を續けて來た。

一昨年は北關東大會に於いて高商に四—三と云ふスコアで惜敗した。其の時の五年生は、來年こそ勝つてくれ來年こそ優勝してくれと言ひのこして去つた。其の年はどうだつたらう。やつぱし北關東大會に於

いて川中に十四—〇と云ふスコアで敗れた。やつぱし先輩の仇を報ずる事が出来なかつたのか、最早どうする事も出来ない。たゞ願ふのは後輩諸君だ弟達だ。來年こそは立派に仇を打つてくれ、仇敵川中を破つてくれと頼まれた僕等だ。なんで川中なんぞに負けるのか、と雨の日も風の日も一心不亂に猛練習をした。そうしてあの炎熱地獄が如き七月下旬に行なはれた北關東選大會に臨んだ。第一回は本中を樂に打破り、明日はいよいよ仇敵川中と一騎打ちしなければならぬ時となつた。僕等の頭にはあの送別會の時頼まれた昨年の五年生の言葉が思ひ出す時、どうして川中なんぞに負けるのかといふ氣風が全員の顔にあらはれた。

いよいよ其の日は來た。炎熱地獄が如き七月の時、大宮球場に於て試合は川中先攻に開始された。僕等の火の出る様な猛練習にはかゝがあつたのか、六回まで兩軍零對零併かも六回の裏熊中攻撃の時一死満塁のチャンスの時、球審の誤審により仇敵川中に又も敗れてしまつた。併し僕等

は一心に戦かつたのだ。たゞ審判の誤審により、一年間と云ふ猛練習も何んのかひもなくなつてしまつた。一年間の血の涙が此の時一度に僕等の目から流れ出して、たゞぼ／＼としてあたりは見えなかつた。あゝとうとう負けたのか。こう思ふ時たゞ先輩諸氏に對して、又學校に對して、全校八百の同胞に對して何んとうわびていかかわらない。又自分は此の光輝ある熊中野球部のキャプテンとなつて、何等なすべき點もなく、何等つくすべきものもなく卒業して行く事を思ふ時、たゞすまなかつたとわびするばかりである。たゞ僕が弟達にのこす言葉は此れあるのみだ。即ち諺に曰はく、「玉磨かすば光なし」だ。いくら立派な玉でも磨かなければ何にも役に立たない。同様にいくら大きな體の持主であつても練習なしでは大選手眞のスポーツマンにはなれない。我々も随分練習をやつた。併し勝つ事は出来なかつたのだ、先輩も同様だから弟達にもつと

庭球部々報感想

五年 栗原二夫

嗚呼なつかしい庭球部！最早吾々は庭球部員としての生活はいや義務は終つたのだ。思へば思ふほど考へれば考へる程去り難い愛着の心が後から後から湧いて來る。

チャンスに恵まれなかつた不幸な先輩諸兄を送るに當り我々はこぞつて復讐を又全力を以て奮闘すべく誓つたのだ。然しそれらは遠い夢のやうな過去となつてしまつたのである。舊をしたふ心と共に靜かにその夢を思ひ起して見よう。

先づその過去の生活に於て我等は何を體驗し得たであらうか？

花咲き蝶は舞ひ鳥は歌ふほがらかな春の日も遊びたい誘惑にも打勝つて一途に庭球部の名譽の爲め又熊中の名譽のために我々はあらゆる力を盡して練習した。又焼けつくやうな炎天の下に、パンツは埃まみれにユニフォームは汗で浸したやうになるまで何事も忘れてコートに活躍した。他人が見ると「何をあんなに骨折し苦んで、馬鹿な」と言ふかも知れない、然し我々としては一旦庭球部選手として熊中を代表し、他校と試合する以上重大な責任があると信じて居る。不幸にして我々が負ければ一口に熊中は弱いとあなどられるのである、自分たち數人の爲に熊中全體が見下げられる。其の侮辱を避ける爲には我々は何うしても勝たねばならぬのだ。先づ勝つ爲には何が必要であらうか。第一に技量であ

る。然しその技量はとうして作り得られるが、それは不慮の十分なる練習が必要である練習にはあらゆる困難に打ち勝つ忍耐がなくてはならぬ。この練習が十分に出来れば立派な技量の持主になれると思ふ。然し如何に技量はあつても十分にこれを發揮し得なかつたなら何にもならない。それを十分に發揮するためには第二として沈着及び決断力が必要である。何故なれば人のゲームを見るとよくわかるが如何に立派な腕を持つてゐる人でも思ひ切りが悪く腰が浮いて居る爲に負ける例が澤山ある。落着くためには腰を下げなければならぬ、腰！此れは何事をなすにも必要だと思ふ。腰をしつかり落着ければ自然精神も落着いて思ひきつて思う所へボールが打て結局は勝を得ることが出来るのである。然し自分の事はわかりにくいものであるから、人の試合を見て勝者の長所敗者の短所を知り「人のふり見て吾が振り直せ」の覺悟を以て自分等の短所を正すことが大いに必要であると思ふ。かくして一試合ごとに自分の缺點をさがし且つ正して進んだなら最後にはきつと勝つことが出来ると思ふ。

以上我々の體験は甚だ淺薄なものではあるが後輩諸君の參考として幾分でも役立てば幸である。

次に本年度のつたなき戦跡を掲げて見やう

五月二十九日誘致會主催縣下中學校大會

一回戰

本校3—0川中

本校0—3精中

日本軟球聯盟主催全國中等學校大會（於上井草）

八月六日（選手權大會）一回戰は二組とも不戰一勝

二回戰

本校（高橋）1—4（水谷）早稲田實業

本校（栗原）—（栗原）小諸商業

二回戰

本校（井桁）0—4（戸田）山梨師範

八月七日（對抗戰）

一回戰

本校（栗原）4—2（望月）攻玉舎中學  
（井桁）4—0（萩原）中野

八月八日 二回戰

本校（栗原）1—4（香掛）上田中學  
（井桁）4—4（安原）佐藤

日本軟球聯盟主催全日本中等學校大會（於戸山學校）  
八月十日（シシクルス）一回戰は二組とも不戰一勝

二回戰

（本校）清水4—3堀（静岡中學）  
（同）栗原2—4田中（横濱二中）

三回戰

（本校）清水3—4櫛淵（沼田中學）  
八月十一日（ダブルス）一回戰は二組とも不戰一勝

二回戰

本校（清水）4—3（遠井）石橋中學  
（森田）0—4（吉澤）長野師範

三回戰 十二月二日

本校（清水）3—4（川上）佐藤

十月一日本校對本庄中學

本校1—0本中



十月九日體育聯盟主催縣下中等學校大會

一回戰

本校（前野）2—3（朝日）島本中

本校（大久保）3—1（河長）井田商

二回戰

本校（大久保）3—0（野口）武實

### 我が庭球部の概観

井桁 宇一

我が庭球部は野に山に霞たなびき日麗かな春三月、安部、森田、篠崎、島田の四君を悦びの中に送り出した。併し中堅なる諸兄を失つた我等は新に陣容を調えて將來に輝く希望を懷き来るシーズンには大いに奮闘活躍せんと覺悟した。

併し今その一ヶ年の過去を振り返ると勞しき名も残し得なかつたのは、甚だ遺憾とする處である。夏季休暇の十日間斯道の泰斗阿部氏のコーチの下に人々は海上山と涼を追ひ暑さを避ける時炎熱を物ともせず血の出るやうな練習をした。

今我が庭球部を見ればその實方その統制に於て縣下に誇る強チームである。

來年度のキャプテン組清水、森田組これこそ我校の至寶である。清水の後衛、森田の前衛、技能と言ひ充分の強味ある組である。

清水のコントロールありスピードある猛球は縣下にも此ほどに打つプレーヤーはないだらう。又それを輔けてその間巧みに動きよき撰球と確實なショットに依りよく敵を牽制する軽快な森田の活躍とは來年こそはと充分我等を期待せしめる。

又高橋、片倉組は高橋は四年で後衛、片倉が三年で前衛である。高橋の偉大な體格から打ち出す球には底力ありこれも清水の猛球に劣らぬスピードがあるが、惜しい哉幾分のコントロールを缺いてゐる。併し遅れ氣味なバックは敵のゴナを衝く確實な特點となる。彼は特異球を放つ難怪物である。片倉もその長身を巧みに利用して三年生としては充分な技能を有してゐるが若い爲か幾分の落付きを缺いては居る。併來シーズンまでにはより以上の技能と膽力を備えてよく高橋を輔けて行くだらうから來年の活躍が期待される。此の組もよく清水組に拮抗し得る強豪である。

上級に割合と組数の少いのが幾分不安を感じしめるが、下級生の自覺と自重とがあれば心配ない。

三年生で大久保の後衛が光つてゐる。清水高橋とは球制球速に幾分の遜色を見せるが彼の確實な型から打ち出す球には相當の力があり、コントロールあるものである。一層自覺して傲らなければ充分の期待をかけられよう。

前衛の萩野は片倉と同等の技能であるから彼の眞面目な性格はその技量の進歩と活躍とを期待させる。

其の他後衛に前田、菅間、長谷川、酒井、田村があり前衛に鯨井、原口があり、いづれも若くて相當な技術と有してゐるから擔まざる練習と先輩の指導宜しきを待てば相當の強味を具えてゐる怪物である。要するによきチームワークを保ち眞面目な不撓不屈な練習を進て行く

時には榮冠は必らず掌中のものと信ずる。我等の先輩は錦を飾り其の偉名を天下に轟かせたのだ。我が部を背負つて立つべき重任は君等の雙肩にかゝつてゐる。先輩の苦心の結晶として残して呉れた榮ある歴史を保持して榮ある優勝を勝ち得て呉れ。如何に實力あると雖も戦は勝利を得なければならぬ。勝つには努力だ努力を以て天下に覇たらむを望む。

競 技 部

小暮十九三

機械文明は凡ての箇處に侵入し、人間は人間自身の肉體にさした運動をせずして仕事が出来様な時代を創造した。汽車、電車、飛行機等あらゆる交通機關は、人間から歩行を奪つて了つた。農夫が一寸畑に行くにも自轉車に乗るのが現代なのである。その文明と共に人心も益々こせしとし、利慾から、利慾へと走る經濟戰爭の現代なのである。そうした現狀に於て、スポーツは限りなく伸びて行く。之は人間が本來の純眞なる精神に返り互に正々堂々と戦ふ氣力と、國民が體育なるものを尊重してきたものによるのであらう。そしてスポーツによつて爽快味を覺え、味ふのがスポーツを愛好する人の共通心理であらう。稍もすればスポーツが興行化せりとその聲を聞くが、ブレイヤーと觀衆乃至國民がスポーツ本來の精神にさかのぼつて考へたならば必ずやそこにある神聖なる一致點を見出すであらう。

スポーツは肉體の鍛練であり人心の修養である。然しながら敵と一戦交へる以上勝たねばならぬ。凡そ何事を問はず、人と正々堂々と戦ふ以上、勝たんとする意氣と、勝つたの力を備へねばならぬ。そこにスポーツの熱があり、意氣があるのである。敵に勝た人が爲にはそれだけの努力を要し、敵の二倍も三倍も

苦しい練習を積みねばならない。

苦しんでこそ始めて力は向上し、それと共に健全なる精神が創造され、練磨されるのである。スポーツによる人格の修養!! それは苦しい練習をしてこそ始めて得られるものである。

炎熱焼けるが如きグラウンドに於て、又寒風の路上で猛練習をした我競技部の昭和七年間の戦績をたどつて見る。

五月一日、始めての春の合宿にいきゝかな自信を得て若葉薫る長瀬の開東大會へ出場左の成績を得た。

四百米 野村 一等  
同 中村 三等

八百米 續走 熊中チーム(中村、小暮、中戸、野村)

八百米 續走に於ては、宿敵、柏壁中學と大接戦を演じ、遂に野村君敵のアンカーを抜いて榮冠をかち得たことは、先輩諸兄が榮き上げられた「續走王國」たる熊中として實にうれしかつた。總點數に於て優勝迄には行かなかつたが、四百米と續走に勝つて長瀬の清流に消えて高らかに校歌を合唱したことは決して忘れることは出來ない。そして春やつた合宿がこの偉大なる力をつけたのであると思ふと尙更であつた。

明れば五月廿九日、第一回の對校試合を群馬縣の太田中學と彼のグラウンドで行つたが、結局四十五點對三十五點を以て快勝した。

百 米 一等 竹 澤(太中) タイム十二秒  
二百 米 一等 中 村(熊中) 二五秒五  
四百 米 一等 野 村(熊中) 五八秒三  
八百 米 一等 野 村(熊中) 二分十九秒八  
千五百 米 一等 大 竹(太中) 五十分秒六  
走巾跳 一等 田 島(太中) 五米七七

以上の如く、試合は、主將野村と、新進淺見、近藤の活躍目ざましく遂に勝利を博した。  
七月の中旬學期試験の頭痛未だなほらぬ中に不動岡中學に遠征す。

百 米 一等 近 藤(熊中) 一米六三A  
三百 米 一等 竹 澤(太中) 一米七〇  
四百 米 一等 竹 澤(太中) 二米八五  
八百 米 一等 淺 見(熊中) 三米五八五  
千五百 米 一等 堀 越(太中) 一〇米三九  
八百米 續走 一等 常 見(太中) 二四米八〇  
八百米 續走 一等 熊中チーム(中村、小暮、中戸、野村) タイム一分四十三秒八

走 高 跳 一等 近 藤(熊中) 一米六三A  
三 段 跳 一等 竹 澤(太中) 一米七〇  
棒 高 跳 一等 竹 澤(太中) 二米八五  
槍 抛 一等 淺 見(熊中) 三米五八五  
砲 抛 一等 堀 越(太中) 一〇米三九  
圓 盤 抛 一等 常 見(太中) 二四米八〇  
八百米 續走 一等 熊中チーム(中村、小暮、中戸、野村) タイム一分四十三秒八

砲 丸 抛 荒 木(不中) 一〇米一三  
圓 盤 抛 荒 木(不中) 二四米五四  
槍 抛 細 村(不中) 四〇米  
三 段 跳 沼 田(不中) 一米八一  
走 巾 跳 沼 田(不中) 五米六六  
走 高 跳 近 藤(熊中) 一米五五  
棒 高 跳 井 新(熊中) 二米八五  
二 部 (三年生以下) 淺 見(熊中) 一三秒  
百 米

四百米 武藤(不中) 一分一秒六  
八百米 渡邊(熊中) 二分二秒八  
千五百米 渡邊(熊中) 五分二秒四  
八百米繼走 不中ナード 一分五〇秒  
砲丸抛 原(不中) 二八秒四五  
圓盤抛 淺見(熊中) 二九秒四七  
槍抛 淺見(熊中) 五米三五  
走巾跳 淺見(熊中) 一米四五  
走高跳 鎗田(不中) 一米〇二  
三段跳 淺見(熊中) 一米〇二  
以上の如く一部は三七・四對三一・一にて、第二部は三五對二八を以て何れも勝つたが、この試合に於て一部では、四百、八百、千五百に於て野村、小暮、塚越、仙場の四人によつて全勝したことは非常に心強く、又二部の淺見君の活躍は實にすばらしかつた。こゝに諸君の努力を深く感謝す然し二部に於る淺見の如く一人に大いに責任を持たせる様なのは避くべきであらう。

以上の如く一部二部とも勝利を得た。

明れば愈々休暇で、我々はあこがれの殿堂甲子園めざして猛練習を開始し、先輩諸兄の多大なる御後援の本に八月廿四日熊谷を出發した。メソバーは野村、中村、小暮、新井、塚越で、戦績は、野村は八百米に於て第二第二豫選をパスし決勝に残つたが前晩の睡眠不足(多少上つて寝られなかつたらしい)のため入選することは出来なかつたもの、第二豫選に於て二分九秒の偉大なるレコードを以てテーパーを切つたことは實に大いなる收獲であつた。中村は二百米に於て二四秒八のレコードを以て入選しながら第二豫選で落ちたのは諦められても諦められない。千六

百米繼走(中村、小暮、塚越、野村)は強豪島田商業に胸一つで破れたが、彼は決勝に於て四等となつた猛者である。かくて我々は惜しくも入選は出来なかつたが、決して落膽はしなかつた。

自分等の力がはつきりと分り、そして全國の強豪恐るゝに足らずと思ひ、これを機に益々練習せんと誓つた。

楽しいそして一面に苦しかつた夏休も終つてその練習を續かせて十月九日縣下大會に臨み左記の通り一部は六點、二部は一五點を占めた。

一部  
百米 六等 高橋 四百米 六等 淺見  
槍抛 五等 淺見 八百米繼走高橋、村岡、新井、淺見五等  
二部  
四百米 三等 野村 八百米 二等 野村  
棒高跳 二等 新井 二百米 五等 中村  
低障害 六等 新井 一五〇米 五等 仙場  
十月廿六日大宮に於て縣下陸上選手權大會に出場、  
八百米 一等 野村 二分十五秒  
四百米 三等 小暮  
千五百米 三等 仙場  
千六百米繼走 二等(野村、中村、塚越、西村)  
この間に於て新井は桐生高工主催の大會に出場し棒高跳に三等を得た。

十一月六日長瀬の選手權大會出場  
二百米 二等 小暮 八百米 三等 野村  
棒高跳 三等 新井 八百米繼走 二等 熊中會A  
八百米繼走 三等 熊中會B 千六百米繼走二等 熊中會

かくて秩父の大會を最後に昭和七年度の試合も修了した。今過去を省みる時、未だ努力の足らなかつたことを見出すのである。随分と練習はしたつもりでも最後の榮冠を得ることは出来なかつたのだ。だが勝敗は兵家の常だ。敗けてなほ奮ひ立つのが若人なのだ。闘へ!! そしてためまぜ!! それが後輩諸兄に望む我々の言葉である。

西村先生がよく云はれる、苦しい方を歩め!! その言葉を實行したなら必ずや勝利を得るだらう。最後に西村、奥村兩先生の御親切なる御指導を深く感謝し、先輩諸兄の限りなき後援助とを謝し、併せて部員の健康を祈る。

本年度卒業生

|              |          |          |
|--------------|----------|----------|
| 主將 野村 龍雄     | 四百米 五六秒  | 八百米 二分九秒 |
| 中村 夫一        | 二百米 二四秒八 | 四百米 五六秒  |
| 小暮 十九三       | 四百米 五七秒  | 二百米 二五秒  |
| 新井 清         | 棒高跳 三米二九 | 走巾跳 五米九二 |
| マネージャー 柴田 政輔 |          |          |

蹴球部記事

主將 中島半七郎  
理事 高野 光臣

湘高主催縣下中等學校第六回ア式蹴球大會カップ争奪戦  
九月廿三日  
此の日雨は降りグラウンドのコンディションは非常に悪くどうかと思はれたが次第にやみどりにか見込みがついた。熊中の元より得意とする試合日は雨天のときである。勿論吾等選手はこの日を喜んだ。相手は縣下の豪雄埼玉師範だ、昨年一回目から埼玉師とで今年は吾等が仇を復する時だ埼玉師側の應援團は刻一刻と群らがつて来る。試合開始九時が十時

に延期した。

五年生は今日の試合こそ最後の花を咲かせるべく大いに意氣があがつた。

十時、熊中のキック、オフに試合開始。武田、秋山にパス、秋山此を取つて中島にバック、パス。中島取つてドリブル、埼玉師軍のハーフを抜きフルに迫つて秋山にパス。受けて廣田に送る。廣田取つて攻め込むをフルバックに奪はる。逆襲かと思えたが高野よく防ぎ新井にパス、新井受けて中島に送る。此を取つて、秋山にパス、ドリブル!! 見事敵を交しそのまま進みて廣田にパス、此の二人のパス見事敵をつり、センターリング、ライナーの好い球、敵の頭上を飛ばし、武田取ると見えだが不利、スルーして中島に渡る。中島之をおきヘシュートせんとせしも前に敵満ち、直ちに秋山に送る。秋山決つてシュートせしもゴールキーパー好く防いだがボールすべつて前に落つ。矢の如く、此の機を逸せじとチャイナする武田、見事ボールイン(十分)。吾等益々意氣軒昂、一點を許した埼玉師軍時を経て猛烈味を示し十五分逆襲しゴールに迫つたが石橋、新井、富田よく防ぎ難なく返す廿分埼玉師レフト、ウイング快速力にて攻め來り、見事フルバックを抜いてシュート、危ふしと感ずる暇もあらばこそ、ボールはバーの上方五米、ゴールキックを中島とり腰塚にパス腰塚ドリブルで進まんせしも敵にまかれ大關にバックパス、大關、秋山に送らんとしたボール敵に奪はる。再びウイングを用ひて攻め込んだが又同じ通り。

後我よく攻めたが敵の好守にさへぎられこのまゝ前半戦を終る。

後半熊中雨を利し地の利を占め防備は益々堅實味を増した。埼玉師は常に右より攻め込んで来る、然し大關、石橋よく守り一歩もゴールを進ませなかつたのは特筆すべきだ。九分ゴールキックを新井よくヘツティン

かにて高野にさばく、高野交して中島にロングパス、見事なパスを受け  
た後中島ドリブルにて進み腰塚に送つたが奪はれ逆に敵は見事なパスに  
て進み再び、レフトウイングにパスせんとした瞬間高野よく奪ひて廣田  
にパス、重ねて秋山とのパスで行きセンタリングを送りしも武田後れて  
物にならず、漸く雨軍勢を現はし出したが、共によく攻めよく守りこ  
のまま終るかと思はれた。廿四分もう一分もあるかなきとき大關ボール  
を武田に渡し更に中島に送る、ドリブルして秋山にパス、秋山シュートせ  
しもはずれて返るを武田取り中島に送るシュート決まつたがキーパーの  
手に當り再び返るを中島又キックして一點を得。遂に此で勝負は決まつ  
た。やがてタイムアップとなる。後半戦は一進一退相伯仲して観衆に汗  
を握らしめた。遂に吾々は勝つた、その時の氣持は唯嬉しいのみ。何と  
も話し難い。實に晴れ／＼した氣持である。

熊中 11 0 0 勝  
中 2 1 1 0 0 勝

當日のメンバー

塚島田山田 關井野 橋田 田 田  
腰中武秋廣 大新高 石富 西 布施田  
F.W. H.B. F.B. G.K. Sub

全國中等學校ア式蹴球大會記

(東京文理科大学蹴球部主催)

二三年來幾多の不幸な目に逢ひ自己の有する實力を充分に發揮するこ  
との出来なかつた過去を思ふ時、何でも今年こそはと強い拳を握らずに  
は居られなかつた。炎暑の中に立派なるコーチャーを迎へ見るもいたま  
しい練習を續けた。その當初より選手の前には決心の色が見えてゐた。

今その技倆を發揮し得た跡を簡単に述べよう。

◎熊谷中對今市中

熊中 4 1 3 1 1 今市中

熊谷中試合開始前堂々場に現はれ、明るいユニホームを身に纏ひ見る  
からに敵を壓する様であつた。

氣のしつくりと合つた心地よいウオーミングアップを終り軽いユムビ  
ネーションに移る。此の日は前日に變りどんより曇り西風は可成り強く  
吹いてゐた。愈午後二時試合開始、今中のキック、オフに始まる。熊中  
のセンタ、スリーのユムビネーションうまく敵のキック、オフをとら  
へ忽ち敵陣に攻入る。熊中両インナーのパス見事ゴール前に迫つたがフ  
ルバックの好守に消え忽ち逆襲となる。敵はライト、ウイングの技倆を  
頼み、よく我がゴールに攻め込む。だが我がフルバックにおさへられた  
がコーナー、キックとなる。コーナー、キック、右ウイング物凄いきック  
はゴールポストを掠めて遂に一點先取さる。少壯の我がキーパー此の時  
幾分落膽の色が見えたが他は皆元氣よく必勝の色を見せてゐる。後熊中  
見事なパスを示し忽ち攻勢に出でライト、ウイングのセンタリングに始  
まり見るまに一點を返す。(十五分) 今中は益々弱味を示す、之に反し  
我はいよ／＼好調、見る見る又一點を加ふ。廿分右ウイングのセンタリ  
ング見事ゴールに襲ひホリド、センタのシュートに又一點を加へ勝  
味は充分に見えた。前半熊中風下に居りよく防ぎ一點を許したのみ。

後半戦は雨軍共に疲勞を見せ試合はグレ氣味になつた。熊中は後半左  
より攻めよく敵の弱點をつき攻め入つた。大體風上にゐて攻勢氣味であ  
つたが、連絡よろしきを得ず仲々得點とならず、廿五分ライト、インナ  
ー、ボールを取つてレフト、インナーにパス、レフトインナー、ドリブルで

進みウイングにパス、大關此をとつて猛進、見事なセンタリングに熊中更  
に一點を加ふこれに敵はすつかり守備に集中し以後我が軍よく攻むるも  
得點ならず此のままタイムアップとなる。

尙當日のメンバー左の通り

關見田山田 橋島野 井田 田 田  
大淺武秋廣 石中高 新富 西 布施田  
F.W. H.B. F.B. G.K. Sub

蹴球部本年度成績

對松中戦 (六月十四日於松中校庭)

熊中 0 0 1 1 2 松中 負

對本中戦 (六月廿二日於本校)

熊中 1 0 1 1 2 3 本中 負

對本中戦 (七月六日於本校)

熊中 2 0 1 0 0 0 本中 勝

對今市中 (全國大會於北町グラウンド)

熊中 4 1 3 1 1 1 今中 勝

對埼師戦 (縣下大會於浦高球場)

熊中 2 1 1 0 0 0 埼師 勝

對湘南中戦 (全國大會八月廿六日)

熊中 0 0 1 0 5 湘南中 負

對埼商戦 (十月六日於本校)

熊中 3 1 2 1 0 0 埼商 勝

對埼師戦 (縣下大會浦高)

熊中 0 0 1 0 4 埼師 負

對埼商戦

蹴球部理事 秋山俊夫

十月八日、昨年の敗北を報仇せんとして必勝を期して埼玉商業を迎へ  
た。晴天微風グラウンドコンディション良好午後三時よりレフエリー松本  
先輩の下に埼商キックオフに開始す。

前半。埼商先發、開始後直ちに我軍はボールを得、W.廣田のドリブルで  
敵陣に攻入つたがセンタリングが成らずゴールキックに無爲。此の時廣  
田眼を負傷す。おして出場したが、ボール判然とせずR.I.秋山との連絡を  
無く。敵は屢々、ロングパスを用ひるも大抵我軍のF.B.富田、石橋に防がる。  
吾軍は巧なるドリブルとパスによつて敵陣深く攻め入り十分右コーナー  
キックを得、R.I.秋山のロングキックはチャンスかと思はれたが、バーに  
當つてゴールキックとなり惜しく無爲。十六分再びコーナーキックを得  
R.I.此れを蹴ればゴール前の好送球となり、C.F.武田ヘッディングでショッ  
トしたが敵のG.K.の好防に阻まれゴール前の混戦となる。武田再び割つて  
ショットし決つて吾軍一點を先取す。敵は躍起となつて攻むれどもH.新  
井の好防、F.石橋の果敢なタックルなどによつてチャンスは握むに到ら  
ず。吾軍はフォワード線の好連絡により敵陣に肉迫し三度目の右コーナ  
ーキックを得、R.I.からのゴール前送球をL.I.中島ヘッディングに決めて吾  
軍 2—0 とリードす。二十二分敵コーナーキックを得るも無爲。



のなかつた事は不幸中の幸であつた。

すこし豫定をそれた練習でも天候にめぐまれ、進級にはめざましいものがあつた。次に最後の進級を發表する。

|               |              |
|---------------|--------------|
| 若山(二)→一七・廿一   | 宇野(豫)→五七・廿一  |
| 權田兄(三)→三上七・廿八 | 鈴木(三)→三上七・廿八 |
| 大塚兄(二)→二上七・廿一 | 矢島(五)→四七・廿八  |
| 秋山(五)→四七・廿八   | 大關(五)→四七・廿八  |
| 西田兄(三)        | 津久井(五)→四同    |
| 田中兄(三)→三上七・廿八 | 高橋(五)→四同     |
| 長又(五)→四七・廿八   | 布池(四)→三同     |
| 鶴見(五)→四七・廿八   | 田中弟(五)→四同    |
| 中村(四)→三上七・廿八  | 西田弟(四)→三同    |
| 石山(五)→四七・廿八   | 町田(豫)→五同     |
| 大塚弟(四)→三上七・廿八 | 權田弟(五)→四七・廿一 |
| 清水(豫)→五同      | 内田(五)→四同     |
| 福島(五)→四同      | 大澤(豫)→五七・廿八  |
| 小池(豫)→五同      | 石原(豫)→五七・廿八  |
| 宮本(四)→三同      | 黒田(五)→四同     |
| 浅井(五)→四同      | 新井(五)→四七・廿一  |
| 阿久澤(五)→四同     | 野口(五)→四七・廿八  |

以上廿四人

オリンピックで勝ちに勝つた水泳日本の熊中生よ！海にめぐまれざる平凡な土地に生れた熊中健児諸君！諸君は此の光輝ある優勝を續けるため又日本の名譽のため熊中にもプール設立に努力されん事を望む。母校熊中を去るに當り世界の拾舞臺で日本の中學生が勝つて居ると言ふ。

事を心に入れて益奮闘されん事を望む。

### 籠球部

長野正喜  
野口秀男

年毎に充實してゆく我が籠球部は今春第五名の選手を送り大打撃を蒙つたにも拘はらず残りの部員にて大いに結束し一昨年昨年と惜敗し悲憤の涙をのんで退いた先輩の仇を報せんと第一學期早々早くも猛練習を開始しました。夕陽西山に没する頃まで背に汗を流しつゝ部員の奮闘は實に涙ぐましい程でありました。

しかし一學期中不幸にして我が部は對抗試合一つすら出来ず徒らに腹を擦したにすぎなかつたのです。

やがて楽しい夏休みが來ました然し我々は鐵をも通す強き意氣の下に劇しい練習を八月廿一日より十日間敢行しました。苦しい中にも希望を抱いて奮闘する樂しさ。時には一塊の水、一片の西瓜などで渴したのをうるほす壯快さにスポーツ後の疲勞も忽ち癒やされてしまひます。

かくして我々の活躍舞臺である第二學期にはいりました。そして来るべき大會に必勝を期して新なる勇氣を以て練習は開始されたのであります。さていよいよ我が腕を試す時が到來しました。それは待ちにまつた全國大會へ出場したのです。前日來の雨は名残りなく晴れ、淺みどりに澄み渡つた大空を仰いで選手達は勇躍して上京しました。場所は神田のYMCAのコートで目指す敵は、見れば全國の強豪雲の新潟商業で、じつた。しかし我々は熱と意氣とを以て強豪恐るゝに足らずと元氣一杯朝氣にみちて堂々と向ひました。

試合が開始されるや猛烈なる接戦をつづけしばし惡戦苦闘の後に惜し

や敵に一ゴールをとられました。かくてははてと振ひ立ちついで我が軍も一ゴールを奪ひ美事なる白熱戦を演じましたが刀折れ矢つきて無慘や惜敗してしまひました。

思ふにこの敗因は技量の差でなく未だ練習の不足と選手の少いことだらうと思ひます。これは我々の自負かもしれませんが敵新潟商業は技術に於ては我々とあまり大差はないと思ひますが多量の練習と選手の豊富なる爲に元氣一杯の選手をつぎ／＼に出し我が軍の疲勞に乗じて勝を占めたのだと思ひます。しかし敗軍の將兵を誅らずとか、これはいさゝか愚痴かもしれせん。

後日新紙上で敵新潟が今年の全國大會に優勝の榮冠をかち得たことを知りやはり我々の技術が及ばなかつたことを恥ぢ次に來るべき縣下大會にこそはと大いに發憤しました。

程なく希望をかけた第五回縣下中等學校籠球大會の日とはなりました。我々選手は高なる胸を静めながら田中先生に引率されて熊谷を出發しました。塙師校庭に着くや莊嚴なる入場式があり試合は例年の如く浦中コートにて開かれました。

第一回戦は恨深き秩父農林とでした。我々の心は雪辱の心に燃え闘志満々たるものでした。

試合は開始されました。

前半、我が軍非常にコンボイシヨシ良く好連絡に着々と點をかさね敵軍の奮闘及は十六——中にで愉快に前半を終りました。後半、我が軍がデームいよ／＼好調にゴール又ゴールつゞけ様に六ゴールを奪ひ益々リードしました。ここに於て敵軍陣を立て直じやと勢を盛りかへしましたが我々の結束いよ／＼堅く後半十六——十三にて我が軍リードし合計三十二——二十三にて長年の恨をはらし一同快哉を叫び

ました。

さて二回戦は縣下の強敵浦中でした。我々は秋農を破りて大いに自信を高めあはよ／＼この大敵をもはふらんと野心満々としてこの巨鯨をねらひました。

試合は開始されました。我が軍は大いに奮闘し浦中と火花をたゝかはして接戦又接戦敵軍も大いに苦しみ四——三惜しや僅一點敵にリードされて前半は終りました。我々選手等は力を落さず互に激勵しつゝ熊中籠球部の爲全力を盡さんと協力一致後半にあたりました。敵もさるものなか／＼慎重にかゝりました。我が軍はいかに加して敵軍をリードしやうと苦心懸命に戦ひましたが其の頃に至り一回戦の疲勞漸くあらはれチームワーク少しく亂れ無念にも十四——二にてタイムアップ、合計十八——五にて敵に名をなさしめてしまひました。

しかしながらこの一戦は非常に大接戦で見て居られた先生方も手に汗をにぎられたといふ程の大試合でありました。

あゝ、又もや我々は破れました。望みをかけて頂いた先輩に對しても顔向けが出来ない。あれ程熱心に練習したのにと思ふと實に悲憤の涙が頬を傳つて流れ落ち拂へども／＼つきませんでした。しかしあの美事な接戦は熊中健児獨特の意氣がかくまで我々を奮闘させたのです。勝負は時の運、我々はベストを盡したつもりであります。諸君どうか許してくれ給へ。

終りに一言後輩諸君に。我等の籠球部の生命は長い。君等の活躍するときはこれからだ。それには各學年でチーム又チーム位出来る程部員数が多くなれば自ら技が主達し大いに力強いと思ひます。今年は何部員が少く残念であつたが來年は今年の二倍否もつと／＼多くの部員になられる様希望します。籠球に理解を持つ校友諸君よ、進んで我が部に

編輯を終へて

今回の編輯に際し、先生方や先輩諸氏の玉稿が少がつたのは、或は御多忙であつたり、或は御失念のため期限に間に合はなかつたからです。今後は何卒例年通り「十一月十日」の締切を厳守して御寄稿下さる様お願いいたします。折角紙面をさきてお待ちして居たのが豫定がくるつてこんな貧弱なものが出来上つた譯です。多謝々々。

會報部委員

次號 締切

昭和八年十一月十日

入られて熱心に練習し堅固なるチームを作りあげて頂きたい。今年も勝つべき試合に惜敗し誠に面白くない次第であるが、失敗は成功の母と我が我の忍従の期も長くはあるまい。必ずや近き將來に於て覇を握る時廻くるであらう實にそれはもう眼の前にあるのだ。どうか來年こそは我々の期待にそむかぬ好成绩をあげ縣下否全國に名をなす様御奮闘を祈ります。これが我々部を去りゆく者の唯一の願ひであります。

餘白をかりて選手並に部員の氏名を掲げます。

正選手 主將長野、若山、野口、吉永、松崎

外部員 一年 小川、今井、阿久澤、松崎、有馬

二年 宮本、金室、金子、黒田、坂本、芹澤、町田

三年 平、鈴木、根岸、中島

四年 吉永、松崎

五年 長野、若山

マネージャー 野口

熊谷中學校

金二五〇〇円

1478  
'87. 5. 27  
我等二三四号  
二冊

橋本書店

千代田区神田神保町3ノ5  
電話 265-3837

昭和八年一月二十日印刷  
昭和八年一月廿三日發行  
(非賣品)

埼玉縣立熊谷中學校々友會

埼玉縣大里郡熊谷町大字熊谷八十一番地

編輯兼發行者 中村平三郎

東京市本所區東駒形三丁目十番地

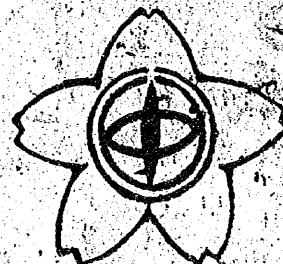
印刷人 西野末雄

東京市本所區東駒形三丁目十番地

印刷所 文化印刷合資會社

↓  
1D 18 14. Moteji

18. Moteji



6

埼玉県立図書館



3 104 15 11